

やなぎ ぞえ い せき
柳 添 遺 跡

飯田市立鼎中学校グランド拡張工事に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

やなぎ ぞえ い せき
柳 添 遺 跡

飯田市立鼎中学校グランド拡張工事に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

序

最近の子供たちの成長の早さには、目をみはるばかりです。鼎中学校は現在生徒数約600名であり、校庭は以前から手狭となっておりました。伸びざかりの子供たちを少しでものびと運動させてやりたいと、体育館の北側に校庭を拡張することとなりました。

鼎中学校周辺は、以前から土器や石器が出土し調査も行なわれ、周知の遺跡となっております。今回の工事は現地表を削平した後に整地するものであり、埋蔵文化財調査が必要となります。本来、遺跡は現状で保存されることが望ましいわけですが、校庭拡張も学校運営上必要であり、発掘調査を行ない記録として保存をすることとなりました。幸い良い成果が得ることができ、その重要性を再確認したと共に調査中に開催された中学校的文化祭では、当遺跡についての研究発表がされたということを聞いており、教科書の上だけではなく、実際に古代の人々の生活の痕跡である遺跡にふれることで、自分たちの住む地域の歴史に興味を持つきっかけとなつてもらえればさらに嬉しいことあります。

最後に、本調査及び本書作成にあたり、多大なご援助、ご協力、ご理解をいただきました関係各位に深く感謝し、衷心よりお礼申し上げます。

1992年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恒之助

例 言

1. 本書は飯田市立鼎中学校グランド拡張に伴う埋蔵文化財包蔵地柳添遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、本調査を平成2年9月25日～10月31日に実施した。続いて平成3年度末まで整理作業および報告書作成作業を行なった。
4. 発掘調査および整理作業においては、一貫して遺跡略号にY N Zを使用した。
5. 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先し、時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は、佐合英治・馬場保之・渋谷恵美子が執筆し、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行なった。
7. 本書に掲載された図面類の整理・遺物実測・写真撮影は渋谷が担当した。なお、同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川 豊および整理作業員が補佐した。
8. 本書の編集は調査員全体で協議の上、馬場・渋谷が行ない、小林が総括した。
9. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
10. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
11. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例　　言	
目　　次	
I 経　　過	1
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	1
II 遺跡の環境	5
1 自然環境	5
2 歴史環境	5
III 調査結果	11
1 壺穴住居址	11
1) 縄文時代中期	11
① 8号住居址 ② 9号住居址	
2) 古墳時代後期	13
① 1号住居址 ② 2号住居址 ③ 3号住居址 ④ 4号住居址	
⑤ 5号住居址 ⑥ 6号住居址 ⑦ 7号住居址	
2 土坑	28
① 土坑 1 ② 土坑 2 ③ 土坑 3 ④ 土坑 4 ⑤ 土坑 5	
⑥ 土坑 6 ⑦ 土坑 7 ⑧ 土坑 8 ⑨ 土坑 9 ⑩ 土坑 10	
⑪ 土坑 11 ⑫ 土坑 12 ⑬ 土坑 13 ⑭ 土坑 14 ⑮ 土坑 15	
⑯ 土坑 16 ⑰ 土坑 17 ⑱ 土坑 18 ⑲ 土坑 19 ⑳ 土坑 20	
㉑ 土坑 21・22 ㉒ 土坑 23 ㉓ 土坑 24 ㉔ 土坑 25 ㉕ 土坑 26	
㉖ 土坑 27	
3 壺穴	36
① 壺穴 1 ② 壺穴 2	
4 溝址	37
① 溝址 1 ② 溝址 2 ③ 溝址 3 ④ 溝址 4	
5 集石	39
① 集石 1 ② 集石 2 ③ 集石 3 ④ 集石 4	
6 その他	41

①柱穴等	
②タタキ床	
③遺構外出土遺物	
IV　まとめ	43

挿図目次

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図2 調査地点及び周辺地図	4
挿図3 基本層序	7
挿図4 遺構全体図	9～10
挿図5 8号住居址	11
挿図6 9号住居址	13
挿図7 1号住居址	14
挿図8 1号住居址カマド	15
挿図9 2号住居址	17
挿図10 3号住居址	18
挿図11 4号住居址	20
挿図12 5号住居址	22
挿図13 6号住居址	24
挿図14 6号住居址カマド	25
挿図15 7号住居址	28
挿図16 土坑平面図(1)	32
挿図17 土坑平面図(2)	33
挿図18 土坑平面図(3)	34
挿図19 土坑平面図(4)	35
挿図20 土坑平面図(5)	36
挿図21 竪穴1・2	37
挿図22 溝址1・2・3	38
挿図23 集石1・2・3・4	40

図 版 目 次

第1図	8号住居址出土土器	48
第2図	8号住居址出土土器・石器	49
第3図	9号住居址出土土器	50
第4図	9号住居址出土土器・石器	51
第5図	9号住居址出土石器	52
第6図	1号住居址出土土器	53
第7図	1号住居址出土土器	54
第8図	1号住居址出土遺物	55
第9図	2号住居址出土土器	56
第10図	3・4号住居址出土土器	57
第11図	4号住居址出土土器	58
第12図	5号住居址出土土器	59
第13図	5号住居址出土遺物	60
第14図	6号住居址出土土器	61
第15図	6号住居址出土土器	62
第16図	6・7号住居址出土遺物	63
第17図	1・2・4号住居址出土土器・石器	64
第18図	5・6・7号住居址 土坑4・5・7・13・15 竪穴2出土土器・石器	65
第19図	溝址4 遺構外出土土器	66
第20図	遺構外出土土器・石器	67

写真図版目次

図版1	8号住居址 同炉址	70
図版2	9号住居址 同炉址 同遺物出土状態	71
図版3	1号住居址 同カマド	72
図版4	1号住居址カマド 同遺物出土状態	73
図版5	1号住居址遺物出土状態	74
図版6	2号住居址 同内検出礫(集石1・2)	75
図版7	2号住居址遺物出土状態	76
図版8	3号住居址 4号住居址 同カマド	77

図版9	4号住居址カマド	78
図版10	4号住居址遺物出土状態	79
図版11	5号住居址	80
図版12	5号住居址カマド	81
図版13	5号住居址遺物出土状態	82
図版14	6号住居址 同カマド	83
図版15	6号住居址カマド	84
図版16	6号住居址遺物出土状態 7号住居址	85
図版17	溝址1・2・3及び周辺土坑	86
図版18	竪穴1・2 集石1・2・4	87
図版19	8号住居址出土遺物	88
図版20	9号住居址出土遺物	89
図版21	1号住居址出土遺物	90
図版22	1号住居址出土遺物	91
図版23	2号住居址出土遺物	92
図版24	2号住居址出土遺物 3号住居址出土遺物	93
図版25	4号住居址出土遺物	94
図版26	4号住居址出土遺物 5号住居址出土遺物	95
図版27	5号住居址出土遺物	96
図版28	5号住居址出土遺物	97
図版29	6号住居址出土遺物	98
図版30	6号住居址出土遺物	99
図版31	6号住居址出土遺物	100
図版32	6号住居址出土遺物 7号住居址出土遺物	101
図版33	1・2・4・5・6・7号住居址出土遺物	102
図版34	土坑4・5・7・13・15 竪穴2 溝址4 遺構外出土遺物	103
図版35	遺構外出土遺物	104
図版36	発掘調査風景 航空測量 現地説明会	105

I 経過

1. 調査に至るまでの経過

飯田市鼎下山に所在する鼎中学校は、生徒数約600名である。現在のグランドは狭隘であり、利用上制約を受けていた。そこで、果樹園となっていた体育館の北側約850m²の部分にグランドを拡張することになった。

当該地は、天竜川の支流松川を望む中位段丘の縁辺部標高464m付近に位置し、埋蔵文化財包蔵地上山遺跡群柳添遺跡の一画にあたる。今回の調査地点の西側の道路拡張工事や付近の果樹園の造成工事等で、縄文時代から平安時代に至る複合遺跡としてその存在が知られていた。

グランド拡張工事は、範囲内を約1m削平するというもので、遺跡が存在した場合、影響を及ぼすことは必定であり、前述の経過からも工事実施にあたり、事前に発掘調査を行なう必要があると判断された。

2 調査の経過

諸協議を経て、平成2年8月28日、重機による表土除去後、9月25日に発掘調査を開始した。調査は、北側から住居址を優先して検出・掘り下げを行ない、写真撮影・実測等を行なう。住居址の検出が完了すると同時に、土坑・溝等の検出に入る。最終的に、堅穴住居址（縄文時代2・古墳時代7）、土坑27、堅穴2、溝址4、集石4と柱穴群を確認した。10月23・26日には、航空測量を行ない、31日に器材を撤収、現地での調査を終了した。なお、10月31日には、現地説明会を実施した。

調査終了後、引き続き飯田市考古資料館において、記録された図面・写真類の整理及び出土遺物の水洗い・注記・接合・復元・実測・写真撮影等を行ない、報告書作成にあたった。

(渋谷恵美子)

3 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和 佐合 英治 吉川 豊 馬場 保之 渋谷恵美子

作業員 今村 春一 木下喜代恵 坂井 勇雄 坂下やすゑ 清水 三郎

豊橋 宇一 西尾 俊貴 正木実恵子 松下 成司 松下 直市
吉川 正実

整理作業員 池田 幸子 伊原 恵子 大蔵 祥子 金井 照子 金子 裕子
唐沢古千代 唐沢さかえ 川上みはる 木下 早苗 木下 玲子
榎原 勝子 小池千津子 小平不二子 小林 千枝 田中 恵子
筒井千恵子 橋本 宣子 丹羽 由美 萩原 弘枝 原沢あゆみ
平栗 陽子 福沢 育子 福沢 幸子 牧内喜久子 牧内とし子
牧内 八代 松本 恭子 三浦 厚子 南井 規子 宮内真理子
森 信子 森藤美智子 吉川紀美子 吉川 悅子 吉沢まつ美
若林志満子 斎藤 徳子 渋谷千恵子

(2) 事務局

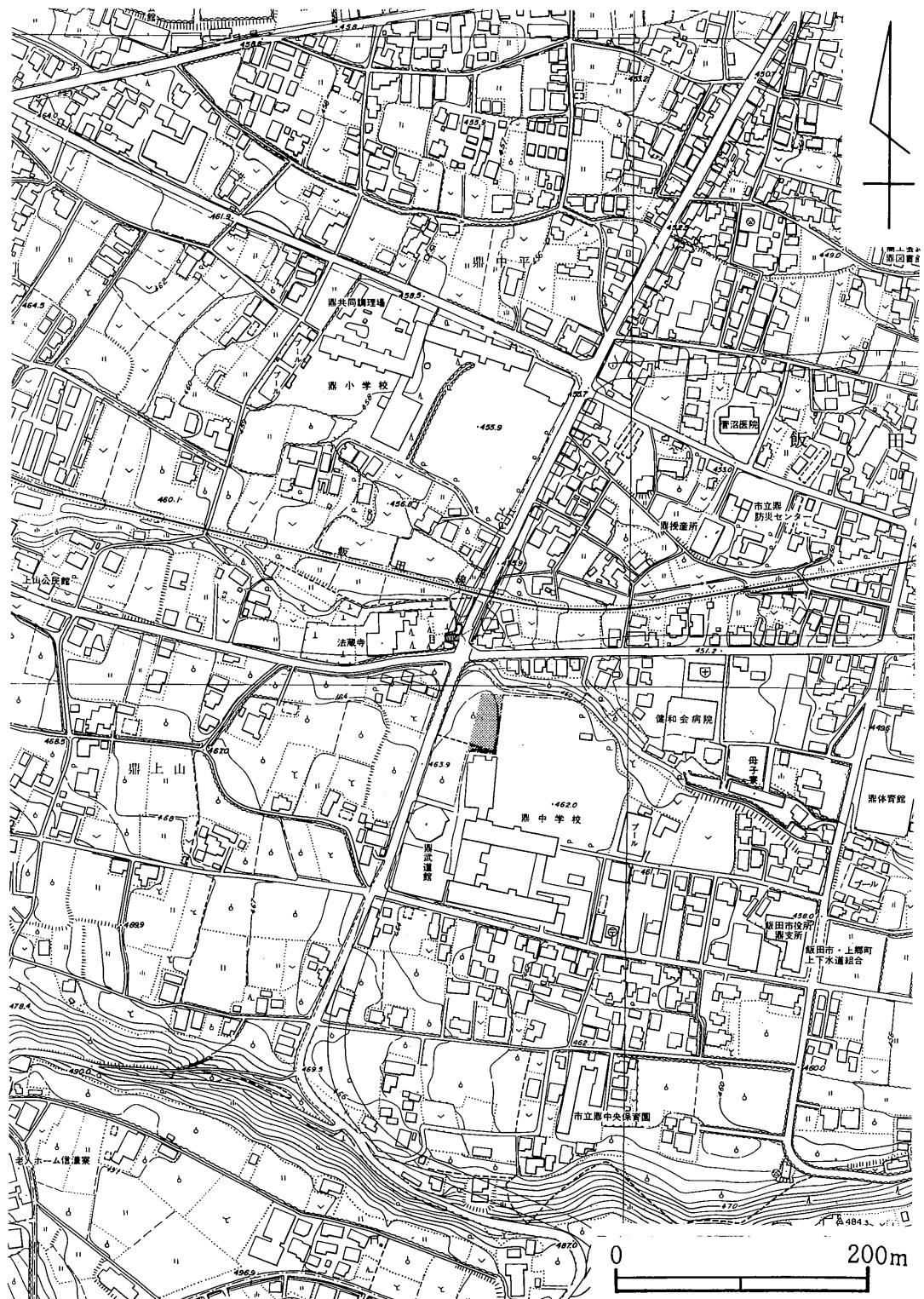
飯田市教育委員会

竹村 隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）平成 2 年度
安野 節（飯田市教育委員会社会教育課長）平成 3 年度
中井 洋一（飯田市教育委員会社会教育課文化係長）
小林 正春（ " " 文化係）
吉川 豊（ " " 文化係）
馬場 保之（ " " 文化係）
篠田 恵（ " " 文化係）
渋谷恵美子（ " " 文化係）平成 3 年度



- | | | | | |
|------------|------------|---------------|-----------|-----------|
| A 柳添遺跡 | 1, 六反畝遺跡 | 2, 天伯A遺跡 | 3, 天伯B遺跡 | 4, 山岸遺跡 |
| 5, 名古熊下遺跡 | 6, 上の平遺跡 | 7, 代田遺跡 | 8, 日向田遺跡 | 9, 乃木坂遺跡 |
| 10, 矢高原遺跡 | 11, 黒河内遺跡 | 12, 田井座遺跡 | 13, 一色遺跡 | 14, 猿小場遺跡 |
| 15, 八幡原遺跡 | 16, 萱垣古墳 | 17, 西の原古墳 | 18, 物見塚古墳 | 19, 鞍骨古墳 |
| 20, 堀の内西古墳 | 21, 稲井大塚古墳 | 22, (伝) 神明堂古墳 | | |

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査地点及び周辺地図

II 遺跡の環境

1 自然環境

鼎地区は飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、南東側は松尾地区と下伊那郡上郷町に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。鼎地区的場合、微地形の変化はあるものの、中央アルプスの前山山麓に形成された扇状地を飯田松川が開析した段丘地形上に立地し、基本的には3つの段丘面により構成される。最上位の一色面・名古熊北原面・八幡原面は中位段丘に区分され、標高500m前後に笠松山系から発達した扇状地形の末端（扇端）があり、これより以西は伊賀良地区、以東が鼎地区となっている。安定したローム層が堆積する。中位段丘より大きな段丘崖で一段低くなる切石面・上山面は、砂質ローム・砂礫層を主体とする低位段丘に比定され、下山面に連続する。この北側はやや規模の小さい段丘崖を経て、南条面に対比される段丘面があり、さらに松川の氾濫原へと続く。

柳添遺跡が位置している上山地籍は、中位の上山面上にある。上山面・切石面の場合、段丘面上には松川の氾濫堆積に伴う微高地があり、方向は松川に平行している。この微高地に沿って低湿地があり、南側の段丘崖下には湧水線が存在する。柳添遺跡はこの段丘中央の微高地上にあり、基本的に水成の砂質ロームが厚く堆積している。今次調査地点の北東側は比高差約8mの段丘崖となる。地山は中央付近から北側に向かってやや傾斜を増し、礫が多く混る。北東端は砂が約50cm程堆積し、その下位は礫層がある。南西端では表土下約50cmで砂質ロームに達する。礫混りの砂質ロームから砂層に移行する部分では、おおむね耕土下に灰色土・暗褐色土・灰色砂質・黒褐色砂質・黒色砂質・漆黒土・黒褐色土があり、約130cmで地山に至る。調査地点の旧状は果樹園で、深耕はあるものの削平ではなく、遺構の遺存状態は良好である。遺構は砂質ローム・砂層を掘り込んでいる。

以上のように、柳添遺跡は段丘上の微高地から段丘崖にかけて位置しており、乾燥した場所であると同時に、すぐ近くに湧水線・湿地があり、生活・生産を営むのに適した場所といえる。

2 歴史環境

鼎地区における埋蔵文化財包蔵地は松川氾濫原および段丘崖部を除くほぼ全域に分布しており、

これまで発掘調査がなされた遺跡は、代田、山岸、天伯A、天伯B、猿小場、矢高原・八幡原、黒河内、田井座・一色・名古熊、六反畠、日向田、柳添の各遺跡と天伯1・2号古墳、物見塚古墳がある。

こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代までさかのぼる。断片的な資料ではあるが、天伯B・猿小場遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、地区内全域に遺跡の存在することが確認されている。しかし、その内容はそれぞれの時期によって異なっている。早期・前期の遺跡・遺物の分布は複数の遺跡で認められるが、集落址の調査例は田井座遺跡に限られ、定着・安定した遺跡の姿を捉えることができるようになるのは、続く中期になってからである。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落が分布しており、これまでに天伯A・柳添遺跡等が調査されている。後期・晩期になると遺跡数・規模とも減じ、猿小場・山岸・六反畠遺跡が調査されているにすぎず、具体的な状況は不明である。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。該期の集落展開としては、中・低位段丘崖下の湧水線および低位段丘中央に発達する湿地帯を利用した水田経営と中位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。後期前半では猿小場・山岸遺跡で住居址が調査されている。後期後半になると、調査面積の大小、遺跡範囲内の調査区の位置など問題はあるものの、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という大きく2つの類型がみられる。前者は低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は中位段丘面から扇状地上に多く、田井座遺跡があげられる。それは前述の基盤となる生業形態の相違と関わるものと考えられる。

古墳時代の様相は、前期にあたる状況がほとんど不明であり、わずかに、山岸遺跡にその一端をうかがえる程度であるが、後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸・天伯B・六反畠・黒河内遺跡がある。またこの時代の集落址以外の特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には現在消滅したものを含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は後期の天伯1号・2号古墳があり、最近調査されたものに割竹形木棺の痕跡が確認された物見塚古墳がある。

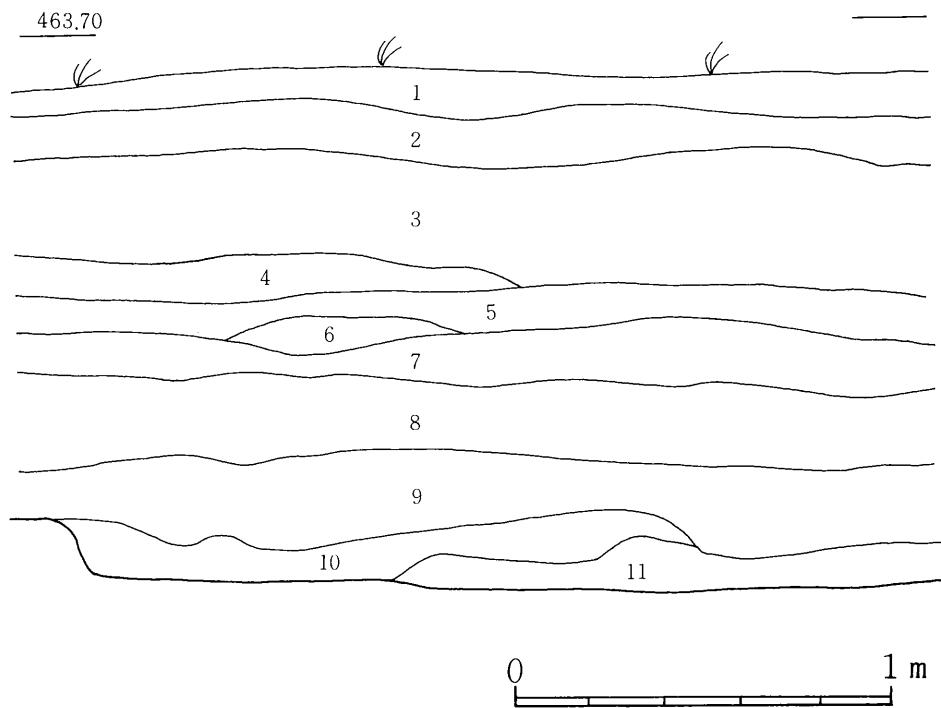
奈良時代の鼎地区の状況は不明であるが、古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降、隣接する松尾・伊賀良地区において、東山道の経路および「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、当地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は地区内全域に分布し、猿小場遺跡では9世紀後半を中心に25軒と多くの住居址が検出されている。しかし、一般的には遺跡単位では住居址は少なく、むしろ散在する分布状態をみせている。日向田遺跡では平安時代後期の住居址から墨書き土器が出土しており、前述の伊賀良地区等との関連が暗示される。なお平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中

世の住居址も検出され、猿小場遺跡では16軒の住居址が調査されている。そこには集落の安定・継続した姿を読み取ることができ、伊賀良庄の発展から小笠原氏の勢力伸長といった中世史の脈絡の中で重要な役割を果たした地域であることは想像に難くない。

以上、鼎地区の遺跡を中心に各時代を概観した。こうした脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのように位置づけられるかは本書の内容により明らかにされるといえる。

(馬場保之)



- 1, 黒色土 2, 灰色土 3, 暗褐色土 4, 灰色砂質土 5, 黒褐色砂質土
6, 暗灰色砂利土 7, 黒色砂質土 8, 漆黒土 9, 黑褐色土 10, 褐色土
11, 暗茶褐色土 12, 黄褐色土

挿図3 基本層序

插図4 遺構全体図



III 調査結果

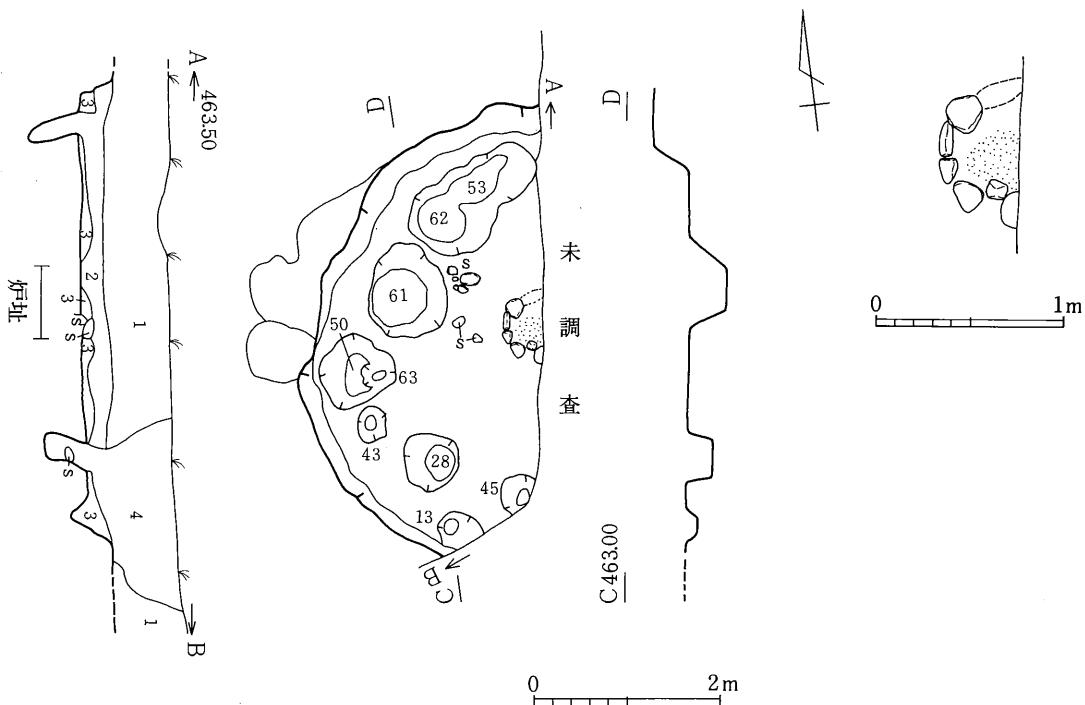
1 穹穴住居址

1) 縄文時代中期

① 8号住居址（挿図14、第1～2図）

調査区の東南隅に検出した。住居址の東側部分は調査区外にかかり、未調査となっている。

推定径約5mの円形を呈する穹穴住居址となる。住居址内には、黄色砂土の上に黄色砂混じり暗褐色土がレンズ状に堆積する。床面はさほど締まりはなく、壁は緩やかに傾斜しつつ立ち上がる。周溝は確認できず、主柱穴は4本ないし5本であったと思われる。炉址は、住居址の中央、調査区境に確認された。握りこぶし大の石を円形に並べた径80cm程の石囲炉である。一部石が抜



- 1, 黒褐色土
- 2, 暗褐色土（黄色砂土混り）
- 3, 黄色砂土
- 4, 攪乱

挿図5 8号住居址

き取られており、痕跡が残る。炉址の掘り込みは浅く、焼土は表面にうっすらと残る程度である。

遺物

土器は、破片がほとんどである。いづれも胎土に雲母粒を多く含む。(第1図1)は、深鉢である。横方向の隆帯の上に匂状の隆帯をめぐらし、間に2条を一組とした縦の条線が施される。色調は、内面は茶褐色、外面は明るい褐色を呈する。(2)は、深鉢のキャリパー状に開く口縁の一部である。体部は、隆帯で区画され、間に2条を一組とした条線が施される。口縁部上面にも格子状等の隆帯と6字状の半截竹管文が施されている。色調は、内外面共に暗褐色を呈する。(4)は、折り返しのある波状口縁をもつもので、体部は無文である。内面に付着物がある。色調は、内外面共に暗褐色を呈する。第2図には破片資料を載せた。縄文(5)や半截竹管文(3・9・10)を施したものその他は、隆帯又は隆帯と条線による。

石器は、図示できないものがあるが、比較的多い。打製石斧は、全面に剥離調整をしたもの(21)と自然面を残すもの(22~24)がある。(21)と(22)が硬砂岩製で他は緑色片岩製である。横刃型石器(26~29)は、自然面を最大限に利用したものと(28)のように比較的調整の多く加えられているものとがある。いづれも硬砂岩製である。

(渋谷恵美子)

② 9号住居址(挿図6、第3~5図)

調査区中央東側、2号住居址・集石3に切られ、土坑4・19と重複して検出された。一部調査区外にかかる。

南北7.4×東西6.6mの不整橿円形を呈する堅穴住居址で、南西壁の一部は2号住居址に壊され遺存していない。西壁の2号住居址と重複する付近は、掘りすぎによりプランが歪む。主軸方向はN21.2°Eを示す。埋土は褐色土の一層であるが、地山との判別は容易でない。床面は中央は硬くほぼ平坦であり、北東壁側はやや低くなる。壁は急な立ち上がりを示し、壁高は16~26cmを測る。周溝は確認できなかった。主柱穴は5本と考えられ、いづれも近接して同じくらいの規模の柱穴が掘り込まれることから、1回の建て替えが考えられる。平面形は重複する柱穴等のためやや不整形であるが、おおむね円形を呈するものと思われる。径60~100cm、深さ30~74cmとばらつく。主柱穴以外に本址に伴わないと思われる柱穴がいくつか掘り込まれており、入り口部の確認はできなかった。

炉址は中央やや北壁寄りに設けられたと考えられ、西側に炉石と思われる焼けた花崗岩3個が検出された。90×80cmの範囲にはほぼ方形に炉石の抜き取り痕があり、中央やや西側に痕跡的に焼土が検出された。石組炉であると考えられる。

北西壁際から深鉢(第3図2)が内面を上に向かた状態で出土した。

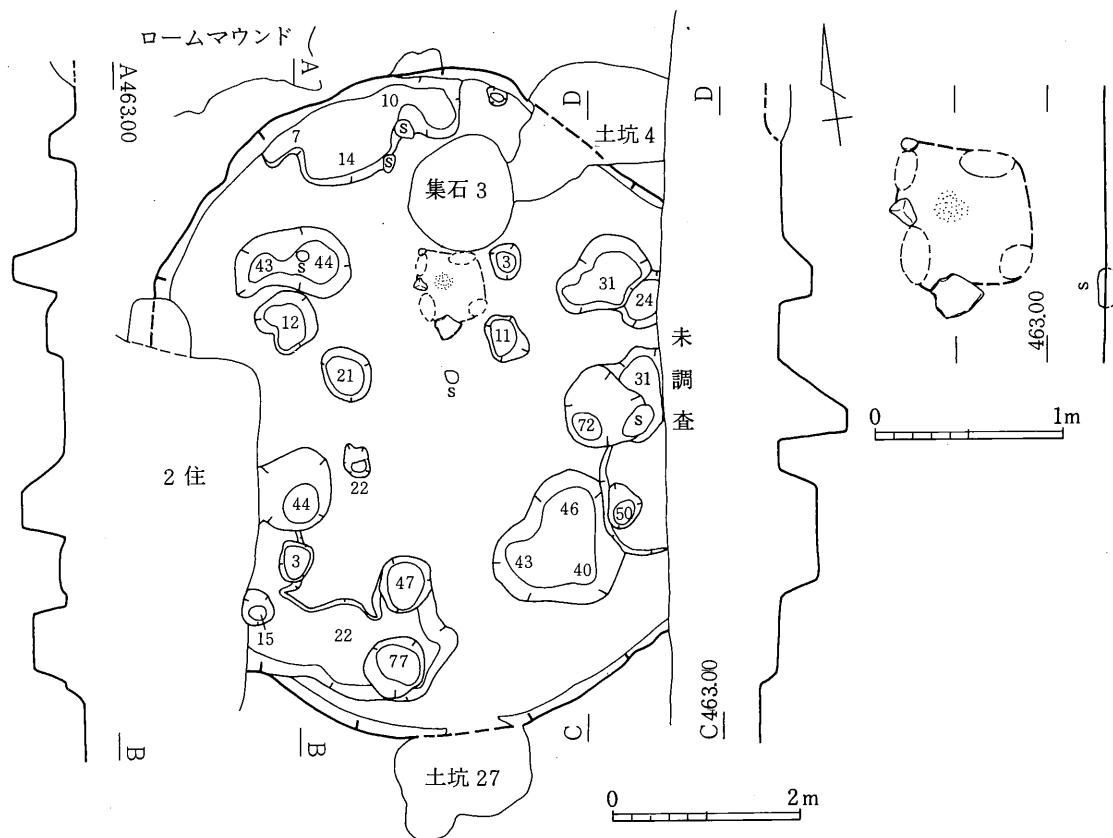
出土遺物は深鉢形土器をはじめ、打製石斧・横刃型石器・剥片石器等の打製石器、敲打器があり、出土量は少ない。

深鉢(第3図2)は全体の約1/3強が遺存する。頸部文様帶は2本の隆帯で4単位に区画さ

れ、内部に変形十字文が充填され、縦位の条線が施文される。縦位の区画の上部には円文が付される。胴部文様は4単位の懸垂文で区画され、その間に櫛形文が展開する。櫛形文の下部にも懸垂文が付される。頸部文様帶と同様、区画文内部は縦位の条線が施文される。胎土に金雲母を多量に含む。他に櫛形文内部に条線が施文されるもの、隆沈線により区画文が描かれ縦位や綾杉状に条線が充填されるもの、沈線により渦文が描かれるもの等、破片が出土している。いずれも胎土に金雲母を多量に含む。石器は横刃型石器・剝片石器が主体であり、石材は硬砂岩・緑泥岩が多い。打製石斧には刃部を欠損するもの、側縁に潰しが施され刃部の一部を欠損するもの、刃・基部を欠損し器体が火を受けているもの等ある。

出土遺物等から本址の所属時期は縄文時代中期後半と考えられる。

(馬場保之)



挿図6 9号住居址

2) 古墳時代後期

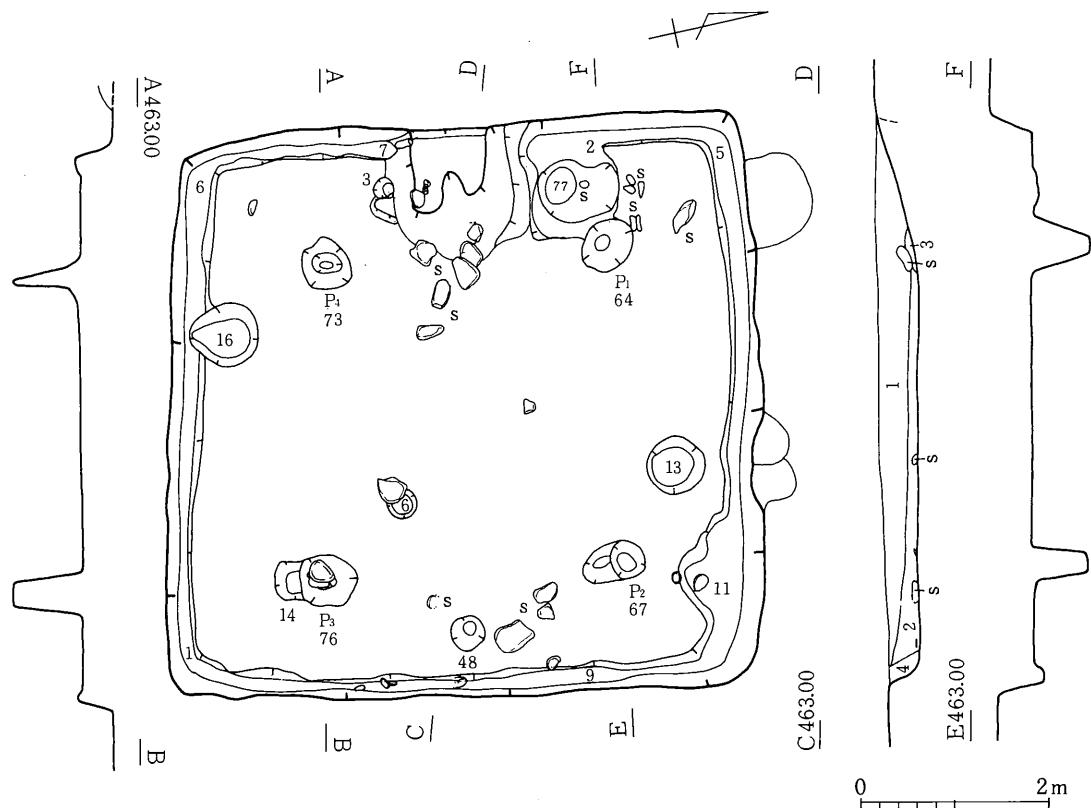
② 1号住居址 (挿図7・8、第6~8図)

調査区東南隅より検出された。約6.2m四方、主軸方向N75°Wの方形を呈する堅穴住居址である。住居址内には、黄色砂質土をブロック状に含む黄褐色土の上に暗褐色土がレンズ状に堆積

する。主柱穴は4本、周溝はカマドの下部を除きほぼ全周に確認された。壁は、緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面はカマド前面においては固く締まっているが、周辺はやや締まりがなくなる。西側壁中央に位置するカマドは、天井石は崩落し、袖石も倒れたり抜きとられ、一つを残すのみだが、石の抜き取り痕が残っており、本来は6号住居址のように複数の石が袖石として用いられていたと思われる。煙道の下部も確認され、現状では煙道部を含めて全長約3m、カマド本体の幅1.6mの石芯粘土カマドである。焼土は炊き口付近を中心に煙道まで厚く堆積している。カマドの周囲からは遺物の出土も多い。カマドの南側にある小穴からは搔きだされた焼土とともに小型の壺等が出土している。また、カマドの北側に接して0.9×1.2mの貯蔵穴と見られる穴も検出された。

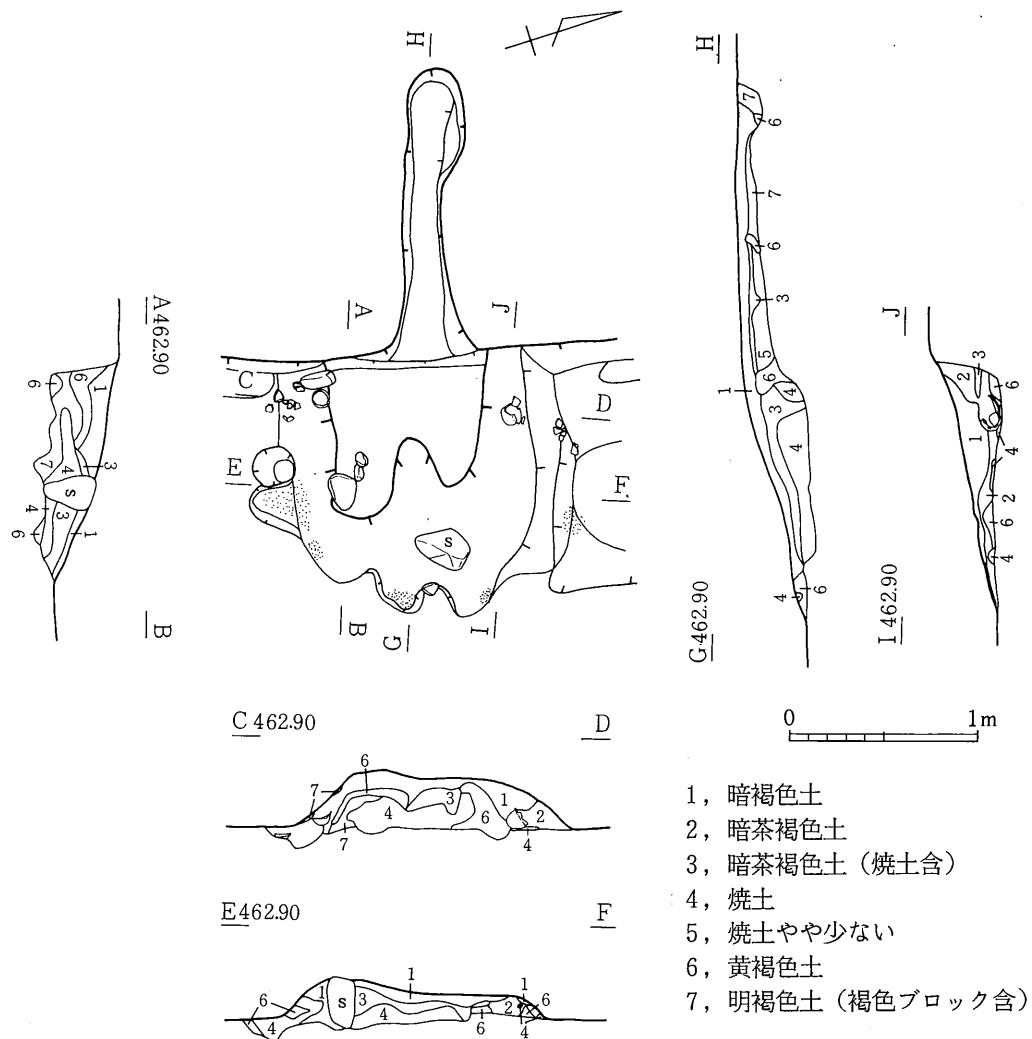
出土遺物は、土師器壺・甕・壺・高坏、須恵器坏、石製品等出土量は多い。

甕には大小2種がある。大型は器高30cm前後のもの、小型は15~20cmのものである。おおむね、



1, 暗褐色土 2, 黄褐色土(黄色砂土ブロック含) 3, 黄褐色土(カマド焼土含) 4, 黒色土

挿図7 1号住居址



挿図 8 1号住居址カマド

胎土に1～3mmの小石、雲母細粒等を含む。(第7図1)は、ほぼ完形品である。胴中央に最大径をもつ卵形のもので、口縁部はやや反りぎみに開き、口縁端部断面は球状を呈する。器面は内外共に荒れているが、口縁部内外面は横方向のユビナデの後にヘラによる調整が、外面上半はハケ調整を下半はハケとヘラによるナデ調整が施されている。下半全周に二次焼成の痕跡がみられる。内面はハケ調整のようである。色調は、内面と外面上半は明るい褐色、外面下半は黒褐色である。(第6図1)もほぼ完形で、卵形を呈する。(第7図1)に比べ、調整は粗く、内面に輪積み痕を残す。口縁部は外反する。器面は荒れているが、口縁部はヨコナデ、外面はハケ調整が施されているとみられる。やはり、下半全周に二次焼成の痕跡がみられる。色調は、内面と外面上半は明るい褐色、下半は暗茶褐色である。住居址南西隅に横倒しでつぶれた状態で出土した。

(第7図2)は底部のみであるが、同様の甕となる。この他に、図示できない破片の中に数個体

分の壺の存在が確認できる。小型は胴中央に最大径をもつが、大型よりも口縁部の外反がゆるく、やや長胴化し、肩は張らず頸部からなだらかに底部に至る。(第6図2)は、1/3が残る。大きさからは中型品である。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヨコハケが施される。色調は、口縁部内外面は明るい褐色、頸部以下は赤茶褐色である。カマドの南側隅から出土。(第6図3)は、ほぼ完形。ススが付着し、二次焼成を受けて器面は荒れているが、内面はナナメハケ、外面は縦方向のヘラによると思われるナデが施されている。色調は、内面は暗褐色、外面は赤茶褐色を呈する。(第6図4)は、口縁部から胴中央にかけて二次焼成が認められるが、ハケ調整であろう。色調は、内外面共に赤茶褐色を呈する。カマド焼き口付近および柱穴(P1)より出土した。(第6図5)は、1/3が残る。他に比べて体部は球状となり、底部は丸底でヘラ調整がされる。内外面はそれぞれヨコとナナメのハケ調整が施されている。口縁部外面には輪積み痕を残す。内部には炭化物の付着がみられ、色調は、赤茶褐色で、内面上半と外面下半は暗褐色である。(第6図6)は、残存部はわずかである。成形・調整共に粗く、胴中央やや下に成形時(一時乾燥させた後に再度粘土紐を積み上げる)に生じた段差がみられる。また、二次焼成を受けているため、ハケによる調整がわずかに認められるのみである。色調は、内面は黒褐色、外面は赤みがかった黒褐色を呈する。

小型壺としたものは4点ある。胴中央に最大径を持ち、頸部からやや内湾しつつ広がる短い口縁部がつく。比較的厚手のもので、調整の精粗がある。(第7図3)は、ナデ調整がなされ、ススが付着する。色調は、内外面共に明るい褐色を呈する。カマドの南側より出土した。(5)は、ヘラによる丁寧なミガキ調整が施された薄手のもので、二次焼成を受けているとみられ、色調は、内面は暗褐色、外面は赤茶褐色を呈する。カマドの南側より出土した。(4)は、全面ハケ調整を主体とし、頸部の内面にユビオサエ、外面はヘラ調整がみられる。色調は、内面は明るい茶褐色、外面は暗褐色で二次焼成を受けているようである。(6)は、体部の一部を除いてほぼ全面にススが付着しており、器面はかなり荒れているが、ヘラナデのようである。色調は、内面は上半が黒褐色、下半が赤茶褐色、外面は暗褐色を呈する。

坏(第8図1)は、口縁部は二次焼成を受けたものか器面はかなり荒れているが、底部付近は内外面共にハケ調整が施される。色調は、内面が暗褐色、外面は口縁部は赤みがかった褐色で底部は黒っぽい。(2)は、全面に丁寧なヘラミガキがなされている。内面は黒色処理がされ、外面は明るい褐色を呈する。

高坏(第7図8)は、外面は縦のヘラミガキ、内面はヨコハケ、脚部と坏部の接合部分内面にはユビオサエが施される。色調は、内面は黒色、外面は明るい褐色を呈する。(7)は、器面はかなり摩耗しているが、外面は赤みがかった褐色を呈し、坏部内面は黒色処理がなされている。(9)は、内外面にはナデ調整が施され、赤茶褐色を呈する。(10)は、ほぼ完形のもので、脚部に二等辺三角形のスカシが3ヶ所にある。器面は荒れているが、内外面はヘラミガキがなされ、坏内面には黒色処理が施される。色調は、赤みがかった褐色を呈する。須恵器を模倣したものであろう。

この他に内面黒色処理のされた浅い壺、小型の壺、甕、高壺等の破片がある。

須恵器は、蓋壺の壺部が出土した。底部は回転を利用したヘラ調整、口縁部から内面にはナデ調整がなされる。(第8図3)は内外面灰白色、(4)は青灰色を呈する。

(第8図5)と(6)はそれぞれ土製と滑石製の紡錘車である。(5)は1/2が残る、大型のものである。明るい褐色を呈する。(6)は、底部は研磨され、他は縦方向のケズリ調整が残る。青灰色を呈する。滑石製臼玉(7~13)は、棒状にした石素材を適宜切断して作られたもので切断面は切りっぱなしになっている。青灰色と白灰色の2種がある。滑石製紡錘車と臼玉は、南側周溝寄りの穴から出土したもので、紡錘車も本来の目的から離れ、臼玉と共に何等かの祭祀にかかわるものと考えられる。

(渋谷恵美子)

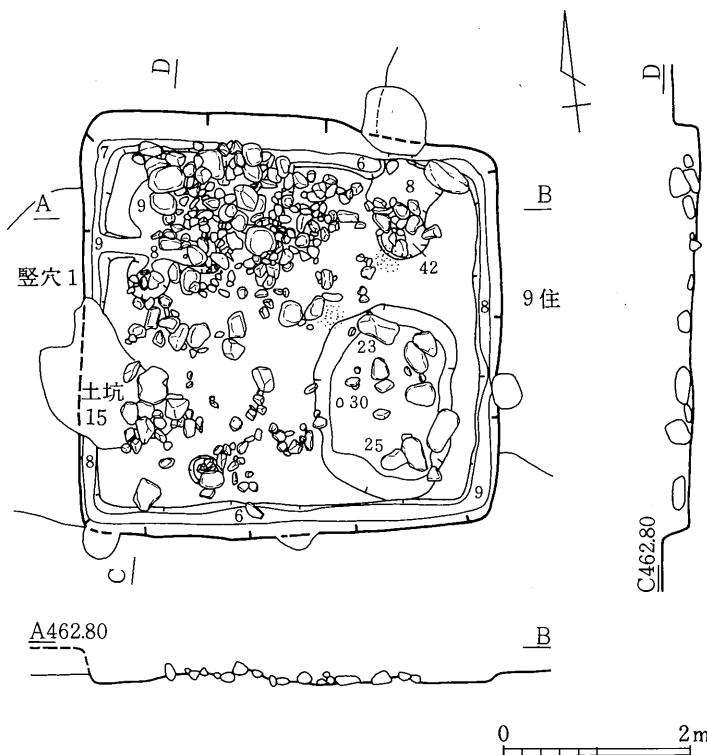
② 2号住居址(挿図9、第9図)

調査区中央やや南側に検出された。9号住居址・竪穴1を切り、土坑15と重複する。

おおむね方形を呈するが、東辺4.0m、南辺4.4m、西辺4.4m、北辺4.2mを測り、やや西側に開いた台形状の竪穴住居址である。西壁の方向はN 8° Eを示す。埋土は漆黒土で、中央付近および南東側の柱穴周辺を除いたほぼ全面で、床面直上に径10~30cm程度の礫が密集して検出され

た。また、中央および北東側柱穴周辺礫下で炭・焼土が確認された。床面は南西隅および北東隅に硬い部分があるが、全体的にやや軟弱である。壁高は32~35cmを測り、急な立ち上がりを示す。主柱穴と判断できるものはない。壁直下に幅20cm程度の周溝がほぼ全周する。南壁際中央やや東寄りに焼土・炭が多量にあったが、煙道・袖石等カマドの痕跡を示すものは確認できなかった。また、西壁際中央北側からは須恵器甕片がややまとまって出土した。

出土遺物は土師器壺・甕・壺・小型壺・鉢・甕、須恵器甕・蓋壺、砥石等があり、出土量は少ない。



挿図9 2号住居址

土師器壺（第9図1）は内外器面が荒れており、外面はヘラナデ後ハケ調整され、内面に接合痕をとどめる。甕(2)は胴部の一部を除き、ほぼ全体が遺存しており、胴部球形を呈する。小型壺(4)は底部にヘラによる切り離しと粗いケズリが残る。(5)は底部が高台状に削り出されている。鉢(3)はヘラにより底部切り離しされる。(6)は外面ハケナデされる。甕は単孔のもの他、複数小孔の粗大な石英等を多く含むものがある。須恵器甕(1)は成形・焼成等不良であり、波状文の施文も難である。蓋坏(9)はつまみが付く。砥石は粘板岩製である。

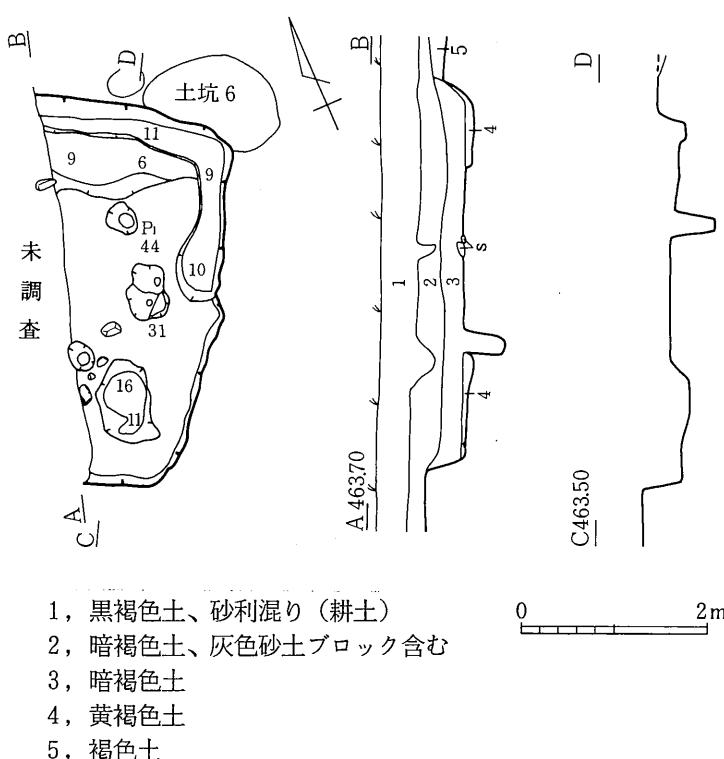
他に混入遺物として縄文土器深鉢片が出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される遺構であるが、礫が床面直上から多量に検出されること、礫下に焼土・炭が分布すること、柱穴・カマド等の施設が伴わないこと、須恵器の出土が他の住居址より多いことから、祭祀等の特殊な役割を果たした遺構と考えられる。

（馬場保之）

③ 3号住居址（挿図10、第10図）

調査区中央西端に検出された。土坑6と重複する。西側は調査区外にかかり、1／2弱を調査下にとどまる。



挿図10 3号住居址

方形を呈すると考えられる
竪穴住居址で、確認できる南
西北東方向の規模は4.0 mを
測る。南東壁の方向はN36.5
°。Eを示す。埋土は暗褐色土
が主体で、壁下および周溝に
黒褐色土が認められる。調査
区際では黄褐色土床面を一部
掘り過ぎている。床面は中央
付近で硬く締まった面が検出
された。壁高は22～34cmを測
り、急な立ち上がりを示す。
主柱穴と判断できるものはP
1および調査区際に検出され
た柱穴である。径30cm程度の
不整円形を呈し、深さはそれ
ぞれ44cm、40cmを測る。南東
壁北半および北東壁直下には
幅20～40cm、深さ10cm程度の

周溝が検出された。焼土・炭や煙道・袖石等カマドの痕跡を示すものは確認できず、調査区外北西壁にカマドが設けられたと考えられる。

出土遺物は土師器甕・壺・高壺・鉢、須恵器蓋壺、鉄製品等があり、出土量は僅少である。

土師器甕は刷毛目調整されるもの、外面右下がり斜めのヘラミガキが施されるもの等ある。壺(第10図2)は内外面ヘラナデされ、底部は平滑に仕上げられておらず、凹凸がある。口縁部を除く内面は黒色処理される。(1)は鉢と思われる土器で、口縁部端は内面に折り込まれ、やや波状を呈し、ユビオサエされる。内面に輪積み痕をとどめ、下半は器壁が分厚い。須恵器壺(3)は下半が大きく回転ヘラケズリされ、底部にヘラ記号がある。鉄製品は鉄鎌とも考えられる。

他に混入遺物として縄文時代中期の深鉢片、弥生時代後期の甕片、硬砂岩・緑泥岩製の打製石斧をはじめとする打製石器が出土した。

形態・出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

(馬場保之)

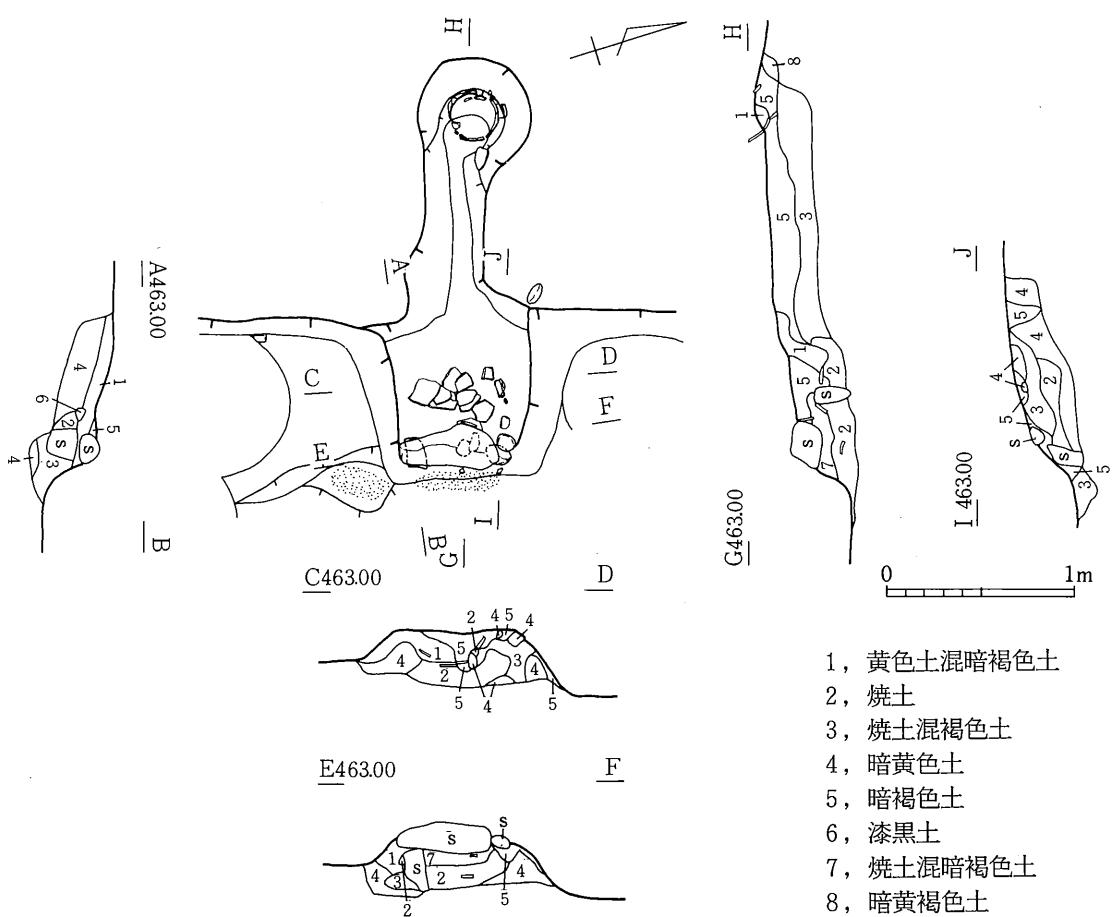
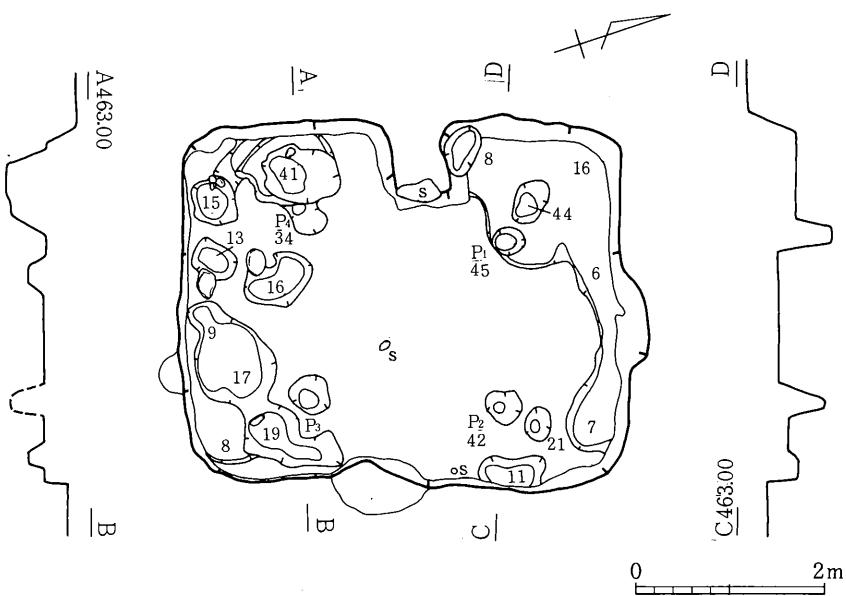
④ 4号住居址（挿図11、第10～11図）

調査区中央西側に検出された。2・3・5号住居址の間に位置し、殊に5号住居址とは非常に近接する。

隅丸長方形を呈する竪穴住居址で、規模5.0×3.8m、主軸方向はN75°Wを示す。埋土は主に漆黒土であるが、南壁際では黒褐色土の上に暗黄色土が被る。床面はほぼ全面硬く締まっている。壁高は22～39cmを測り、東・南壁が急な立ち上がりを示すのに対し、西・北壁は緩やかに立ち上がる。東壁中央を除いた部分には周溝状の掘り込みがあるが、深さ・幅とも一定しない。主柱穴はP1～P4の4本が検出され、径40cm程の不整円形を呈する。深さ34～45cmとばらつきがあり、やや斜めに掘り込まれる。西壁中央にカマドが設けられており、遺存状態は非常に良好である。袖石一対の石芯粘土カマドで、袖石は掘り方より奥（壁）側にずれる。また、両袖の粘土の残り具合も良好である。天井石は本来の位置を失なっていると考えられ、2つにひび割れしていた。燃焼部は厚く焼土が発達しており、約1／2個体の土師器甕が出土した。煙道の遺存状態も良く、煙だし部分は壁が下部は直であるのに対し、上部は緩やかな立ち上がりで、二段構造状を呈する。この部分には土師器甕が逆位やや西側に傾いて置かれ、二重に入れ子に据えられていた。他に北壁中央に焼土の張り出しがみられ、カマドの造り替えも考えられる。埋土上層からの遺物出土が多く、またカマド両側から土師器甕が出土した。

出土遺物は土師器壺・甕・壺・高壺・鉢・ミニチュア土器、須恵器甕、不明鉄製品等があり、出土量は多い。

土師器壺は胴部球形を呈するもの、底部ヘラケズリされるものがある。甕は外面ヘラミガキの施されるもの(4)、刷毛目調整されるもの(5)、内外面に接合痕・底部に木葉痕をとどめるもの（第11図1）、等がある。壺(3・4)は胴部下間に稜があり、内面黒色処理される。2は内外面ヘラミガキされ、内黒である。他に須恵器模倣壺がある。鉢は単孔で、内面横位・外面縦位のヘラ



挿図11 4号住居址

ミガキが施される。ミニチュア土器(5)は外面はユビオサエされ、口縁がやや波状を呈する。須恵器甕は1片のみで、やや軟質なものであり、外面格子目・内面同心円の叩きが施される。

他に混入遺物として縄文土器深鉢片、石器剝片（黒曜石・硬砂岩）、陶器片が出土した。

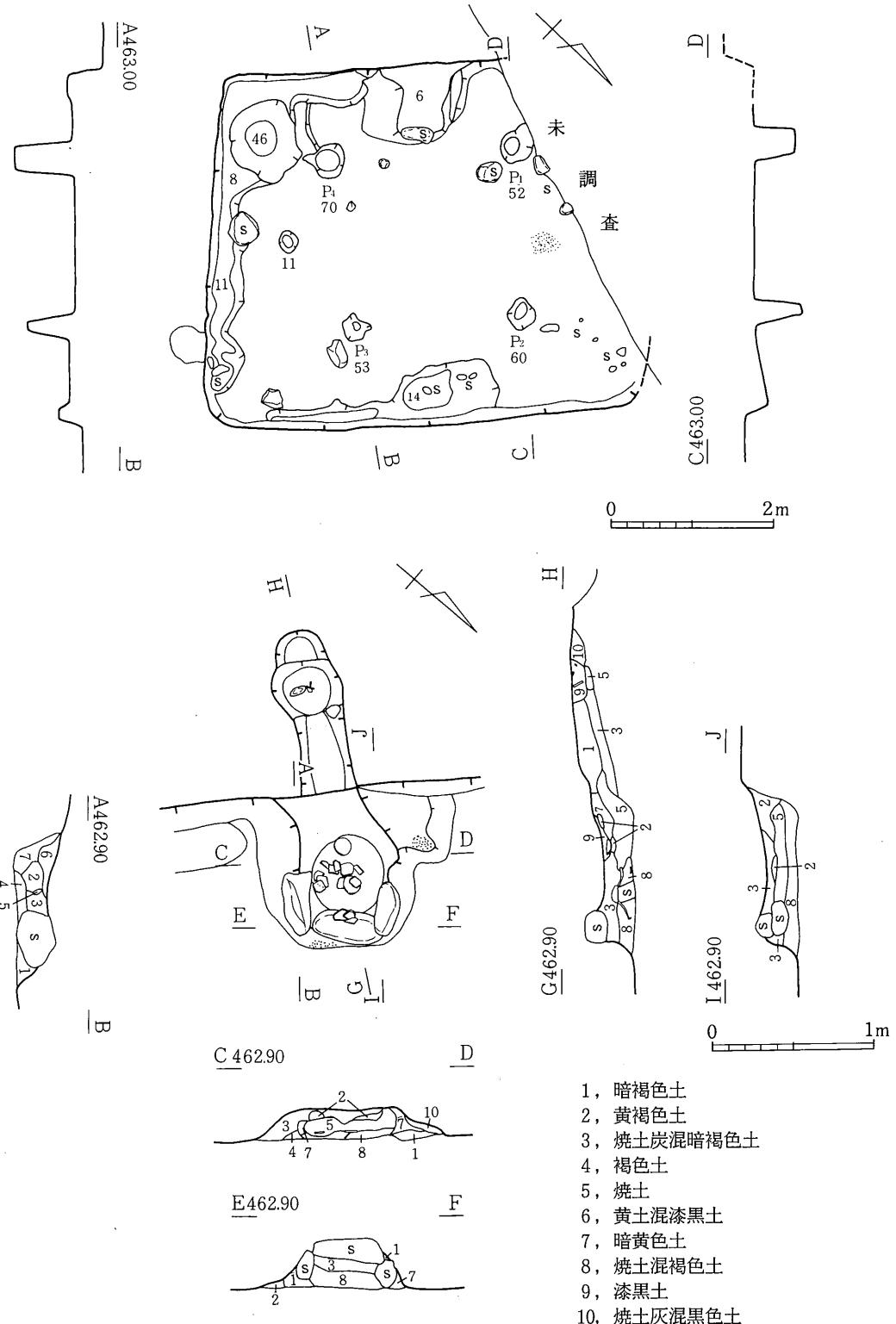
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期前半に比定される遺構であり、主軸方向・遺物等から
1・2・6号住居址と同時期の遺構と考えられる。(馬場保之)

⑤ 5号住居址 (挿図12、第12~13図)

調査区の西側、4号住居址に近接して検出した。住居址の西側一部は調査区外にかかり、未調査である。東西5.4×南北4.4m、主軸方向N142°Wの長方形を呈する竪穴住居址である。住居址内は、灰茶褐色土の上に暗褐色土がレンズ状に堆積する。周溝は、南北から東南壁にかけてと東北壁の一部で確認した。壁は、緩やかに傾斜しつつ立ち上がる。柱穴は、4本を確認したが、柱穴に対し住居址平面形はやや歪んでいる。本址は、床面に炭化材が遺存し、焼失家屋とみられる。炭化材は特に南西側のカマドの前面から南隅に集中しており、ここからの遺物の出土が多い。焼土・炭化物の集中は西側中央付近にもみられたが、この部分は堆積が特に厚く、焼失の際のものではなく、住居址が建てられた当初のカマドがあった場所と思われる。これは、現存するカマドの下に周溝があることからも妥当であろう。カマドは、煙道と天井石1石と両袖石各1石を残す。煙道までの全長約2m、本体の幅約1mの石芯粘土カマドである。カマド中央やや前寄りに石の支脚があり、土師器の壊がかぶさっていた。煙道の吹き出し部分からも土師器甕の破片が出土しており、4号住居址のように煙道部に土器が据付されていたとも考えられる。

遺物は、土師器壺・甕・壺・高壺、須恵器、鉄器、石製品等破片も含め出土量は多い。

甕(第12図1)は、口縁部はヨコナデ、体部内外面はタテハケが施され、赤茶褐色を呈する。(2・3)は、体部中央やや上に最大径のある卵形で、安定性は悪い。内面には輪積み痕を残し、外面は中央のスス付着により荒れているが、ハケ調整がみられる。(2)は内面にも付着物がある。色調は、(2)が内面と外面下半が暗褐色、外面上半が明るい褐色、(3)は内外面上半が赤みがかった褐色、下半は黒褐色を呈する。(4)は、体部は確認できなかった。ヨコハケが施され、明るい褐色を呈する。外面には、ススが付着する。(5)は、やや小型のもので、体部外面には二次焼成をうけてもいるが、調整は粗く輪積み痕が残る。口縁部はヨコナデ、体部内外面もナデが施される。色調は、内面は暗赤茶褐色、外面は暗褐色を呈する。一部が煙道より出土した。(6)は、口縁端部に面取りがされ、薄手で比較的丁寧な作りである。(7)と(8)は同形のもので、(7)は、口縁部ヨコナデ、体部はヨコハケを施し、外面にはススが付着し、内外面は赤茶褐色を呈する。(8)は、口縁部ヨコナデ、体部内面ヨコハケ、外面はタテハケを主体とし、一部ヘラナデもみられる。二次焼成を受けている。色調は、内外面共に口縁部は暗茶褐色、体部は赤茶褐色を呈する。この2点は、カマド支脚の上部から出土した。(第13図1)は、全体に成形・調整が粗く、器厚も均等ではない。底部より1/3のところに成形時の段差がみられる。口縁部はヨコナデ、体部は不規則なハケが



插図12 5号住居址

施されている。色調は、内外面共に黒褐色、底部は明るい褐色を呈する。カマドの西側脇より出土した。

壺は小型のものである。(2)は、スヌの付着等により器面は荒れているが、口縁部はヨコナデ、他はヨコハケを主体とし、頸部付近はユビナデ、外面はヘラ調整が施されていたようである。色調は、内外面暗褐色を呈する。(3)は、口縁部はヨコナデ、体部内面はハケ、外面はかなり荒れているが、ヘラ調整のようである。色調は、内面暗褐色を基調とし、底部と外面は赤みがかかった暗褐色を呈する。カマド西側脇より出土した。(4)は、単孔の甌である。完形で出土した。口縁部は端部を内側に折り曲げて指でつまんでいる。調整は雑だが、ハケ調整がされる。色調は、内外面共に赤茶褐色を呈する。南東隅の炭化材集中域より出土した。坏は、口縁部が単純に立ち上がるもの(5～8)と端部が短く屈曲するもの(9)と2種ある。(5)は、口縁部ヨコナデ、内面ハケ、外面はハケとヘラナデが施される。色調は、内外面共に暗褐色、底部は黒色を呈する。(6)は、内外面にヘラナデがなされた後、口縁部にはヨコナデが施される。色調は、内外面黒褐色を呈する。(7)は、口縁部はヨコナデ、内面底部付近はユビナデ、上部はハケ調整、外面調整は粗く、ハケとユビによるナデが施されている。色調は、内面黒褐色、外面暗褐色を呈する。カマド内より出土した。(8)も調整は粗く、内面はハケナデ、外面はユビとハケによるナデ調整とみられる。色調は、内外面明るい褐色で底部は黒っぽい。カマド支脚にかぶさっていた。(9)は、丁寧な調整である。口縁部はヨコナデ、内外面はヨコのヘラミガキが施され、内面は黒色処理がなされ、外面は明るい褐色を呈する。(10)は、高坏の脚である。内面はヘラ・ハケによる調整、外面は比較的丁寧なヘラミガキが施される。色調は、内外面赤茶褐色を呈する。6号住居址覆土出土のものに接合するものがあった。

この他に、甌・黒色処理の坏・高坏脚部等の破片がある。

須恵器は図示できなかったが、坏等と6号住居址出土の甌と接合するものがある。

鉄器は、鉈と板状のものがある。(11)の鉈は三つ折れの状態で、推定全長は33cmである。刃部中央に稜がある。(12)は、短刃端部が屈曲しており、鎌の可能性もあるが刃部は確認できない。

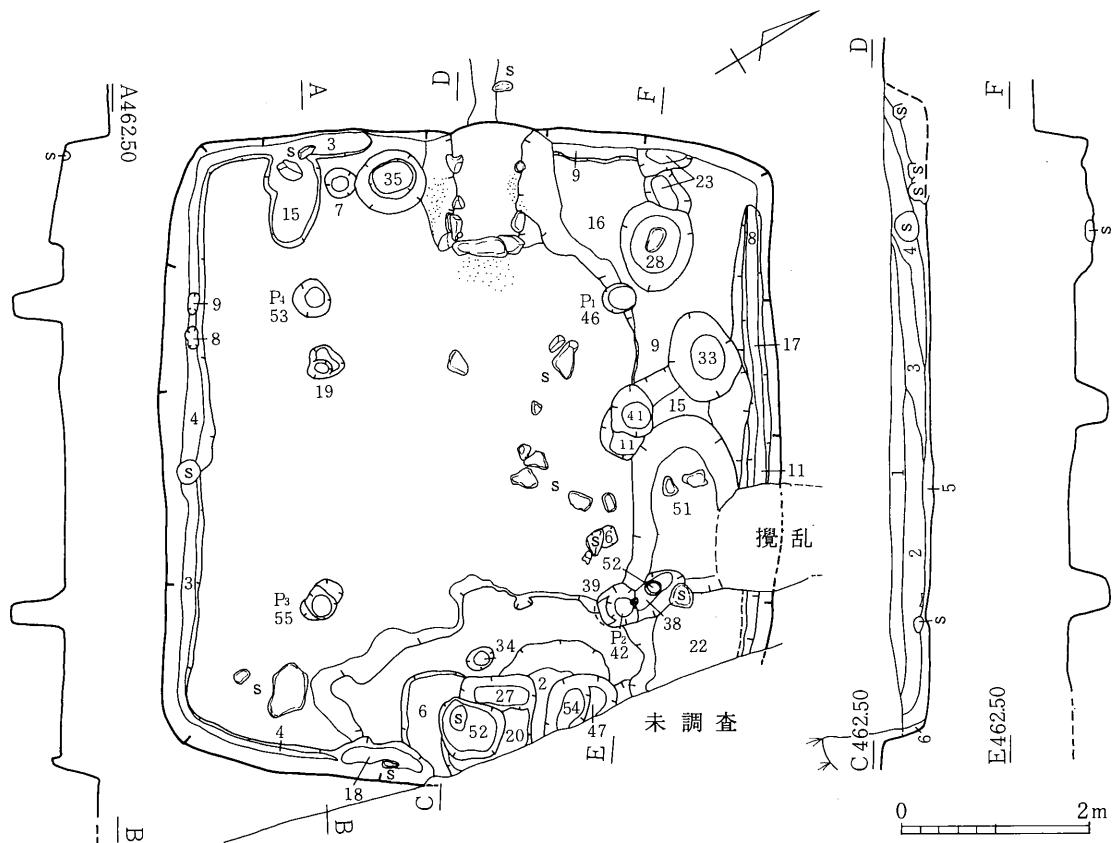
この他に、鉄滓のようなものも出土している。

石製品では、滑石製有孔円板(13)がある。一部欠けているが、表面は研磨されている。南東隅の炭化材集中域より出土した。
(渋谷恵美子)

⑥ 6号住居址 (挿図13～14、第14～16図)

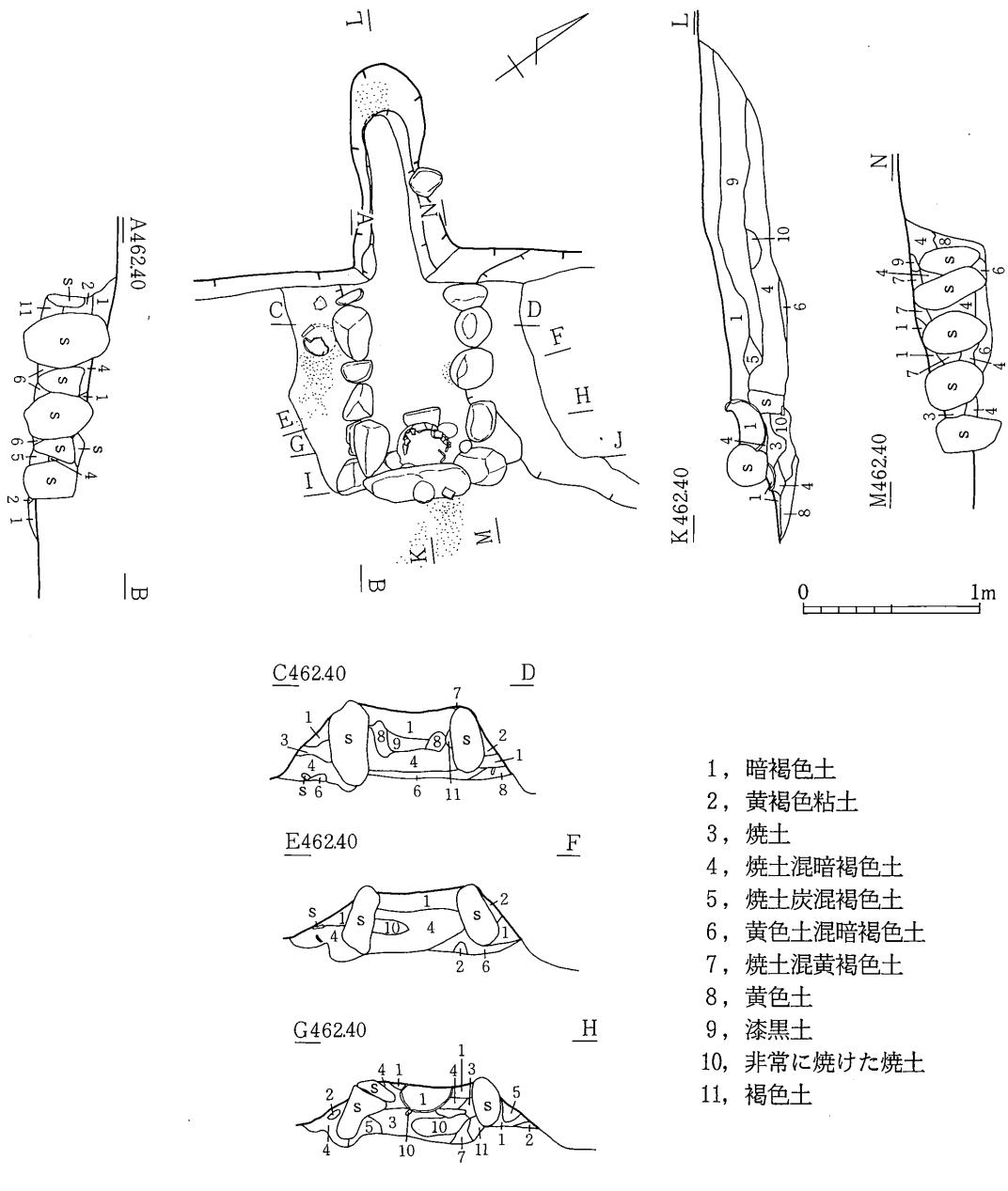
調査範囲のほぼ中央、東端に検出した。東隅が未調査部分にかかり、北東壁の一部が攢乱を受けるが、ほぼ全体が調査できた。方形の竪穴住居址で、規模は7×6.5mを測る。主軸方向はN 58° Wを示す。壁高は30～50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は北隅とカマドの左側の一部を除き検出され、壁直下を全周していると云える。幅は10～35cmで、深さは3～17cmを測り、南東壁下側は浅い。床面は平坦で、主柱穴内側は、硬く締まりきわめて良好なものである。

北東壁下から主柱穴まで70cm程の間の床面はきわめて軟弱で、最終的に溝状の凹みとなった。最深部で深さ21cmを測る。覆土は北西側から自然堆積しており、南東側に暗褐色土のレンズ状の堆積が見られる。主柱穴は4本確認した。住居址の大きさと比してやや小形とも思えるが、深さは浅いものでも床面から、42cmを測る。本址に付属する施設として、カマド両側と南東壁下の穴がある。どの穴の覆土も、主柱穴と同じ漆黒色土の覆土である。カマド両側の穴は貯蔵穴または、いわゆる灰かき穴と考えられるが、深さは余り無いものである。南東壁下中央の穴は入り口施設の一部と把握した。複数の穴を検出したが、東寄りの穴上部には貼り床状の粘土が部分的に認められ、すべての穴が同時に使われていたかは不明である。また、これら穴の周辺は貼り床され、数cmマウンド状に高くなっている。ほかに、溝状の凹みとなった部分には土坑状の大きな穴が検出された。この部分には床面はまったく認められなかったが、遺物の出土は無く、本址に伴うものかは不明である。カマドは北西壁中央に作られ、比較的大きな石芯粘土カマドである。煮沸部



1, 黒色土 2, 暗褐色土 3, 漆黒色砂質土 4, 黒色混暗褐色土 5, 漆黒土 6, 褐色土

挿図13 6号住居址



挿図14 6号住居址カマド

には甕胴部下半がそのまま埋まっており、煙道部も把握され、保存状態は良好である。袖石は壁面に対して直角に並べられ、両袖は平行となっている。芯石は各袖ともに五、六個使われ、左袖には大小の石を交互に並べ、大きな石は地山を掘り込んで据えている。

出土遺物は多い、器形の知れるものに土師器として壺、甕、坏、高坏がある。

壺には大形のものと小形のものがある。両者とも最大径は胴部中央に有り、それぞれにヘラミガキとハケで仕上げられるものが存在する。ほぼ完形の大形壺（第15図2）は、胴部下半が欠損するもの(1)に比べ口縁部の外反度が小さい。小形のものには底部が平坦なもの(3)と丸くなるもの(4)がある。どれも胎土中には小石粒を含み、小形で底部が丸いものを除いて雲母が認められる。焼成は普通もしくは良好で、色調は暗褐色や、明るい褐色である。

甕にも大小二種（第14図1～5）が存在する。底部はヘラの調整等によりラフに作り出され、内外面ともハケ整形されている。また、図化した小形の甕（4、5）の頸部はどちらも指頭による成形がなされ、1／4残存のものには、これが顕著に認められる。焼成はどれも普通、胎土中には小石粒、雲母を含んでいる。色調はすすが付着し一定でなく、明褐色から暗褐色、二次焼成の為赤味ががる褐色を呈するものもある。

坏で図化できた二つ（第16図1・2）はどちらも底部は平坦で、体部はほぼ垂直に立ち上がる。器壁は厚いが、口縁端部はシャープにつまみ上げられている。器面が荒れるためはっきりしないが、ハケナデにより仕上げられている。完存するものは赤彩されていた可能性が有り、胎土中に小石粒、雲母を含んで、焼成は普通である。色調は両者とも赤味がかった暗い褐色を呈するが、一部欠損するものは焼成がやや悪い。

高坏で図化できたものは脚部一点（第16図4）で、ヘラミガキされている。焼成は良好、胎土中には小石粒を含んでいる。色調は暗い褐色を呈している。

須恵器には、壺、甕、坏、蓋坏などがある。

壺（第16図8）は1／5程の破片である。肩部が張り、横に広がる体部である。胴部中央に浅い沈線が数条見られ、その上部に刺突紋が施紋されている。胎土、焼成とも良好なものである。壺として拓本で示した二条の稜線下部にそれぞれ波状紋をめぐらしたものも壺であろう。どちらも焼成は良好、胎土中には微小石粒が見られる。色調は薄い灰色と青灰色である。

甕（10～12）は拓本のみで示せる破片ばかりである。外面には平行叩き紋、内面には同心円紋が見られるが内面はすり消しされるものがある。焼成はみな良好である。色調は内面すり消しの

ものが青灰色あとのものは灰白色である。

壺(7)はやや大形のものである。体部の最下部はヘラケズリされ、平坦な底部との堀をより強調している。胎土中には雲母も見られ、色調は灰黒色を呈する。焼成は不良である。

蓋壺（5、6）は、受部上部が内傾するものと、ほぼ垂直に立ち上がるものがある。後者は底部欠損するが、両者とも器高は低く浅いものである。どちらも焼成は良好、胎土中には微小石粒を含むが精良なものである。色調は灰褐色を呈している。

ほかに、吊り下げ部は欠落しているが、カマド中から土鈴(13)が出土している。

石製品としては臼玉が4個ある（14～17）。どれも滑石製で、暗灰色と灰白色を呈するものがそれぞれ2個ずつである。

また、石器として硬砂岩の打製石斧があるが、本址に伴うものかは不明である。

時期は、出土遺物から、古墳時代後期前半に位置付けられる。

（佐合英治）

⑦ 7号住居址（挿図15、第16図）

調査範囲の北隅に検出した。方形の竪穴住居址であるが、ほとんどの部分は用地外となるため、全体規模は不明である。調査できたのは南の隅の部分で、南東壁3.6m、南西壁2.4mの範囲である。主軸方向は不明であるが、確認した南東壁の軸方向はN 20° Eを示す。壁高は35cm程を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は幅50～60cm、深さは15cm前後を測る。壁面からやや離れて検出され、南西壁下は最終的に壁ぎわまでが、大きな凹みとなった。幅も広く、いわゆる周溝とは異なるが、壁下を全周しているものと考えられる。床面は平坦で、周溝内側はきわめて良好なものである。主柱穴は図中で、P₁・P₂とした穴のどちらかがこれに当たると考えられるが、住居址の全体規模が不明のため主たる穴の確認はできなかった。全体では4本主柱穴であろう。本址に付属する施設はカマドをはじめほかには何も確認できなかったが、P₂の北側の穴には甕の底部が納まっていた。

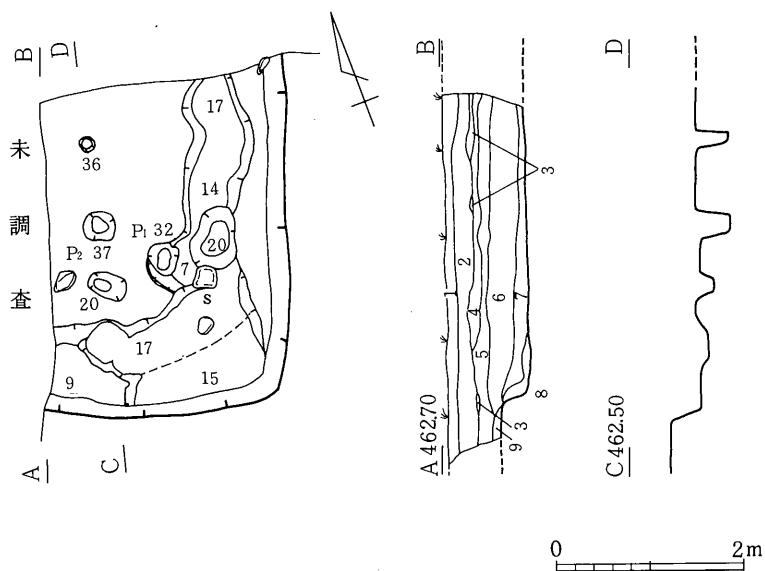
出土遺物は少ない。土師器として甕、壺、須恵器として蓋壺があるが、須恵器は一点のみの出土で図化できない破片である。

土師器として図化できるものも少ない。穴から出土した甕の底部(18)は二次焼成を受け器面荒れるが、内面はハケにより仕上げられている。胎土中には雲母小石粒を含み、焼成は普通である。色調は黒褐色を呈している。壺(19)は深さの有るもので、塊とも云えるものである。ヘラの調整により仕上げられるが、器壁は厚くラフな成形である。焼成は普通、暗い褐色を呈している。胎土中には小石粒が混入し、やや大きめの石粒と雲母を含んでいる。

ほかに、石器として緑色岩の打製石斧二点、硬砂岩でラフに作られた横刃型石器一点があるが、本住居址に伴うものかは不明である。

時期は、遺物等から、古墳時代後期前半に位置づけられる。

（佐合英治）



- | | |
|----------|-----------|
| 1, 黒褐色土 | 6, 漆黒土 |
| 2, 暗灰褐色土 | 7, 黒色土 |
| 3, 暗黄褐色土 | 8, 黄土混黒色土 |
| 4, 暗灰褐色土 | 9, 暗黄色土 |
| 5, 褐色土 | |

挿図15 7号住居址

2 土坑

約60cm以上のものを主に土坑とした。出土遺物は少なく、遺物が出土したものについても、それが土坑の時期を示すものであるか問題もあるが、判断資料は少なく、それぞれの性格等を把握するに至らなかった。

① 土坑1 (挿図16)

調査区の南端、8号住居址の西側に検出した。径1m、深さ40cmのややゆがんだ円形を呈する。遺物は、縄文土器と思われるものが1点出土しているが、器面は荒れ、時期は不明である。

② 土坑2 (挿図16)

調査区の南東端に検出した。半分は調査区外になるため実際の規模は不明だが、現状で最大径

なお、第18図に図示したものは、各住居址から出土した縄文時代中期土器片や硬砂岩製打製石斧・横刃型石器等であるが、これらは住居址には直接伴わないものである。

1 m、深さ約20cmで楕円形を呈するようである。遺物は、縄文土器深鉢の口縁部破片1点のみであり、性格等は不明である。

③ 土坑3 (挿図16)

調査区南側、1号住居址と2号住居址の間に検出した。1.65×0.8mで深さ20cmの土坑内に深さ50cmの掘り込みがあり、やや細長いひょうたん形を呈する。遺物は、縄文時代中期にあたると思われる土器片1点が出土したのみであり、性格等は不明である。

④ 土坑4 (挿図18、第18図)

調査区の東側に検出した。一部が調査区外にかかり、現状での規模は幅0.5~1m、長さ1.8m以上、深さ20cmの浅い溝状になる。9号住居址、集石3と切り合い関係にあり、本址は9号住居址を掘り込み、集石3は本址を掘り込む。遺物は、図示した円形貼付文や隆帶・条線を施した縄文土器深鉢破片2点の他にも小破片が出土している。時期は縄文時代中期にあたるが、性格等は不明である。

⑤ 土坑5 (挿図17、第18図)

調査区の南側、3号住居址、土坑6の東側に検出した。0.8×1m、底部は2段になっており、上段は深さ20cm、下段は60cmとなる。不整円形を呈する。遺物は、深鉢の波状口縁部片(14・15)、8の字状貼付突帯を付したもの(16)の他に小破片が出土している。時期は、縄文時代中期にあたるが、性格等は不明である。

⑥ 土坑6 (挿図17)

調査区の南側、3号住居址の北側、土坑5の西隣に検出した。1.4×1m、深さ20cmの円形を呈する。3号住居址に掘り込まれる。遺物は、図示できないが、縄文土器破片が3点出土しているのみであり、性格等は不明である。

⑦ 土坑7 (挿図19、第18図)

調査区の西側、6号住居址の西側、土坑8・9・10の間に検出した。1×0.6m、深さ40cm程度で底部はやや東側に傾斜し、中央のくびれた不整楕円形を呈する。遺物は、チャート製の打製石鎌(17)の他に、縄文土器と思われる小破片が出土しているのみである。性格等は不明である。

⑧ 土坑8 (挿図19)

調査区の西側、土坑7と9の間に検出した。2つの掘り込みがあり、平面形は不整楕円形を呈する。1.2×0.6m、深さは東側の浅い方が20cm、他方が40cmである。遺物は、縄文や沈線を施し

た縄文土器小破片が出土しているのみである。

⑨ 土坑9 (挿図19)

調査区の西側、土坑8と26の間に検出した。土坑8と同様、2つの掘り込みからなり、深さは30cm前後である。1.4×1.6mの不整円形を呈する。遺物は、土師器甕等の破片が出土し、性格等は不明である。

⑩ 土坑10 (挿図19)

調査区の西側、6号住居址の西側に検出した。1×1.2m、深さ30cmの中央のややくびれた不整楕円形を呈する。遺物は、図示できないが縄文時代中期にあたると思われる土器破片が出土している。

⑪ 土坑11 (挿図20)

調査区の北西隅、7号住居址の南側に検出した。70cm下で地山の礫層に達する。1×0.8mの不整楕円形を呈する。遺物は、縄文を付した土器破片が出土している。

⑫ 土坑12 (挿図20)

調査区の北西隅、7号住居址の南側、土坑11との間に検出した。2つの掘り込みからなり、深さは南側が80cm、他方が60cmとなり、平面は1.6×0.6mのJ字状を呈する。本址も土坑11と同様、底部は地山の礫層に達する。遺物の出土はなく、性格等は不明である。

⑬ 土坑13 (挿図17、第18図)

調査区の南西隅、溝址1の西側、土坑14・21・22の北側に検出した。1×1m、深さ20cmの不整楕円形を呈する。遺物は、図示した硬砂岩製打製石斧(18)の上半部のみであり、性格等は不明である。

⑭ 土坑14 (挿図17)

調査区の南西端、土坑13の南側に検出した。土坑22を掘り込む。1×1.3m、深さ約40cmの不整楕円形を呈する。土師器甕破片のみの出土である。

⑮ 土坑15 (挿図16、第18図)

調査区中央付近、2号住居址の西側にあり、2号住居址と竪穴1を掘り込む。1.6m、2号住居址床面からの深さ50cmで不整楕円形を呈する。出土した条線を施した縄文時代中期の土器破片(19)は、本址が2号住居址を掘り込んでいることから、本址に伴うものではなく、むしろ竪穴1に

関係する可能性もある。

⑯ 土坑16 (挿図16)

調査区の南東端、8号住居址の北側に検出した。1.3×1.2m、深さ80cmのややゆがんだ円形を呈する。覆土中に若干の焼土がみられたが、遺物の出土はなく、性格等は不明である。

⑰ 土坑17 (挿図17)

調査区の南端、溝址1の東側、土坑18に隣接して検出した。1.3×1.2m、深さ20cmの土坑内には、深さ40cmの掘り込みがあり、底部は2段になる。遺物はなく、性格等は不明である。

⑱ 土坑18 (挿図17)

調査区の南端、前述の土坑17の西隣に検出した。1.2×1m、深さ10cmの不整円形を呈する。遺物はなく、性格等は不明である。

⑲ 土坑19 (挿図16)

調査区の南端、1号住居址の西側に検出した。1.9×1.1m、深さ10cmのひょうたん形の土坑内に深さ30cmの掘り込みがある。遺物はなく、性格等は不明である。

⑳ 土坑20 (挿図17)

調査区の南側、溝址2と竪穴2の間に検出した。1×1.1m、深さ70cmの不整円形を呈する。遺物はなく、性格等は不明である。

㉑ 土坑21・22 (挿図17)

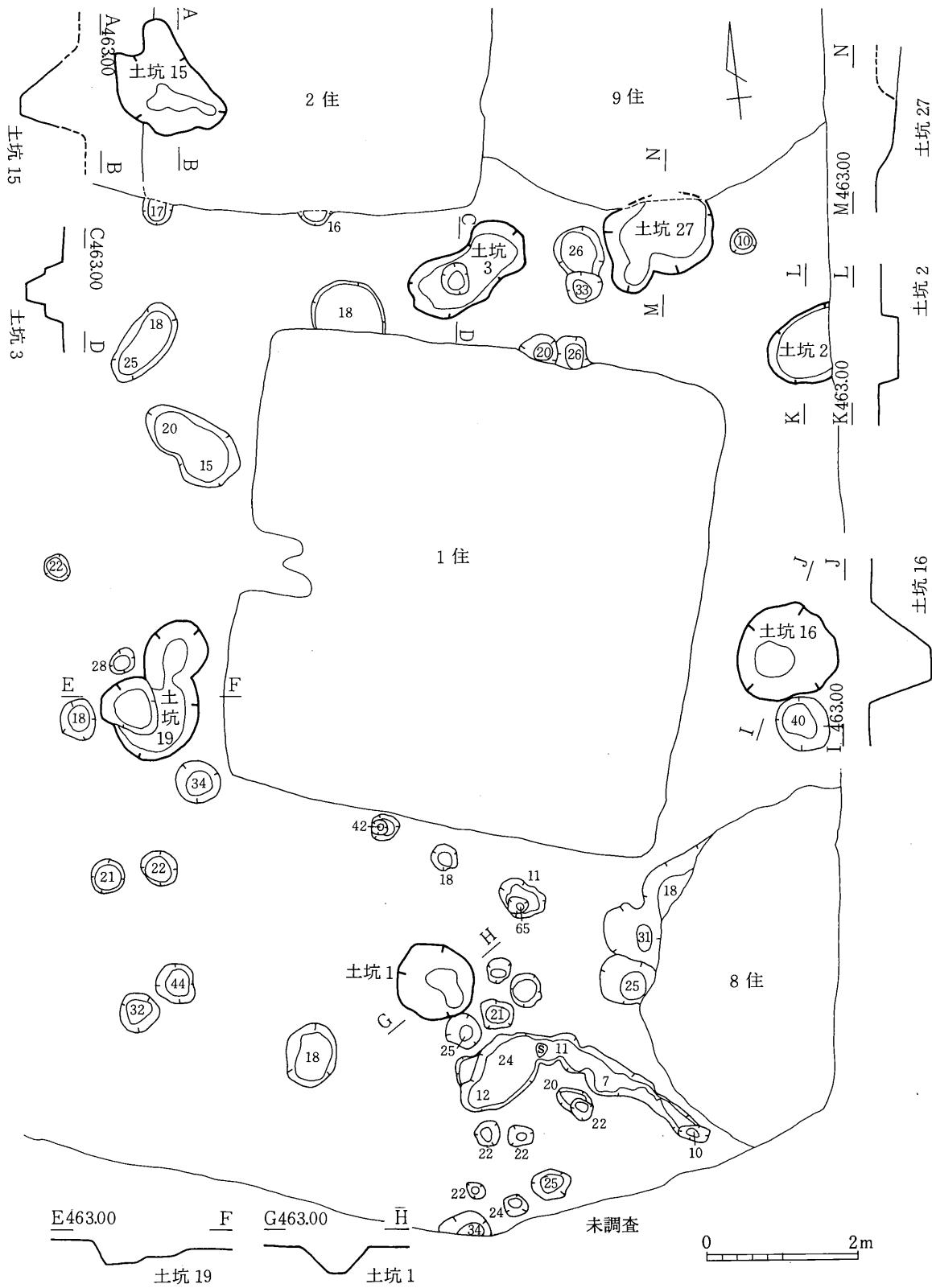
調査区の南端、溝址1の西側に検出した。土坑21は1×1.2m、土坑22は最長3.2mの不整形を呈する。土坑21は土坑22を掘り込んでいるが、深さは両者ほとんど変わらず20cm程度で、一つの土坑ともいえる。遺物はなく、性格等は不明である。

㉒ 土坑23 (挿図17)

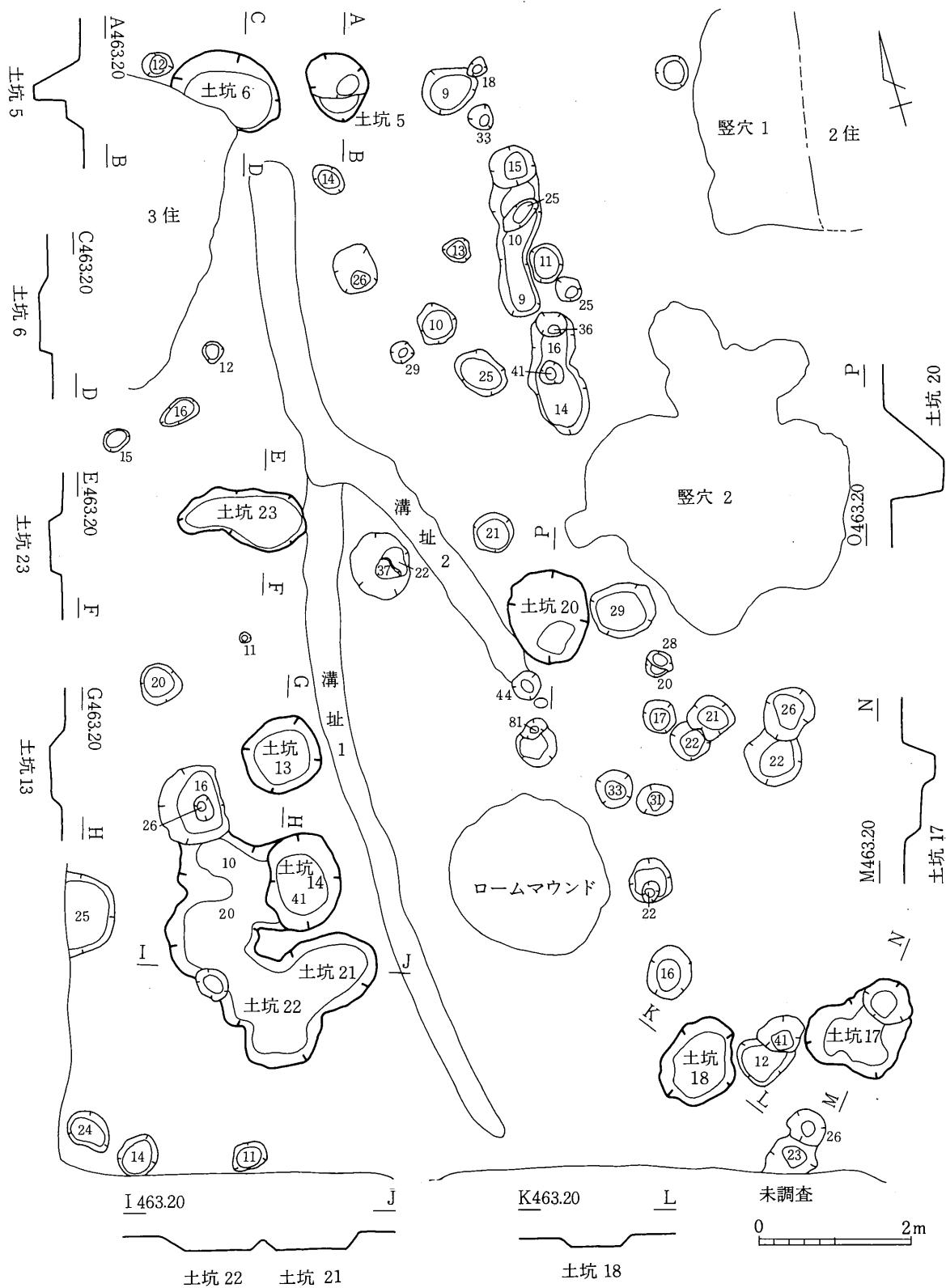
調査区の南側、溝址1の西側に検出した。1.6×0.7m、深さ20cmのやや細長いものである。遺物はなく、性格等は不明である。

㉓ 土坑24 (挿図18)

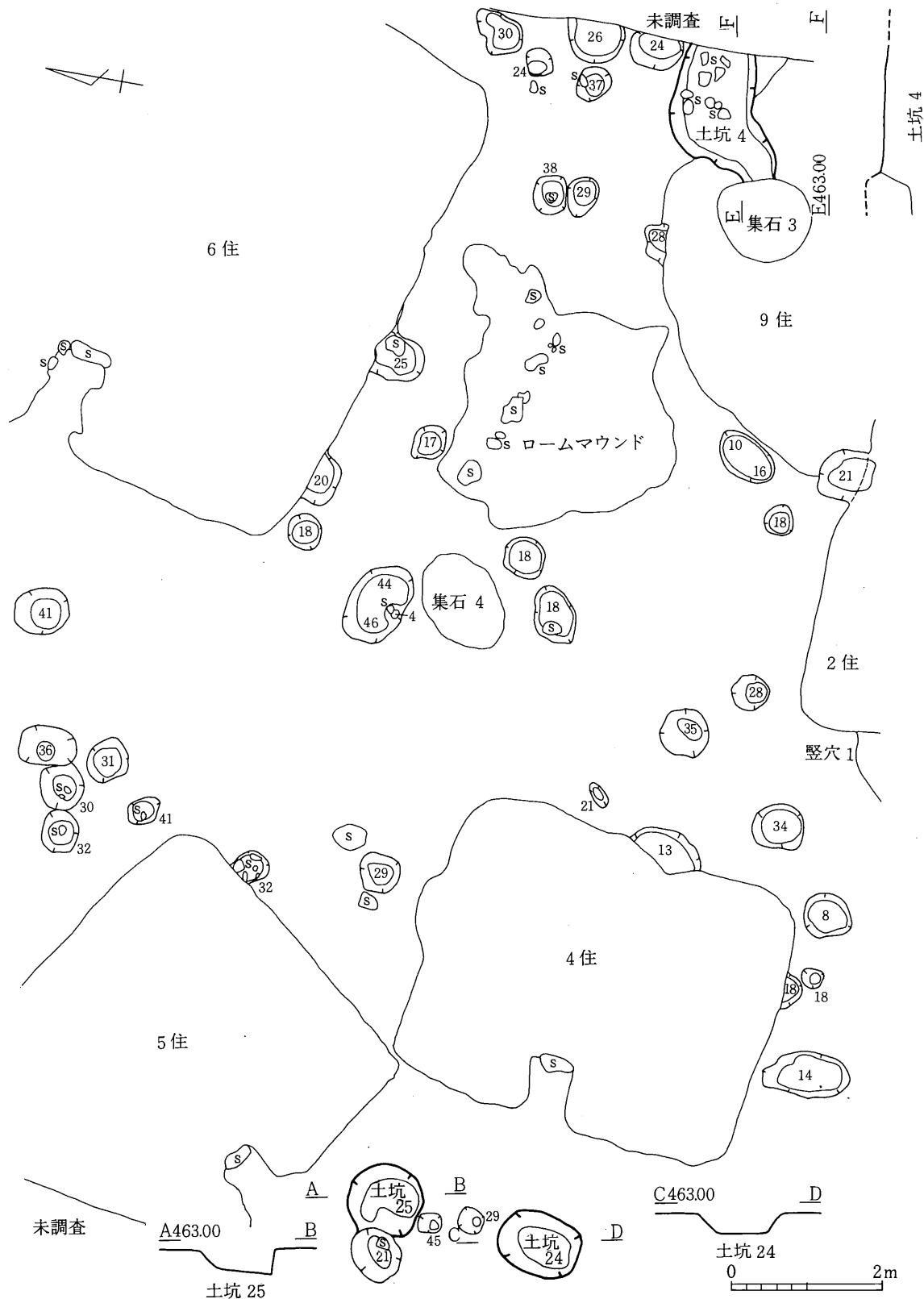
調査区の西端、4号住居址の西側、土坑25の南隣に検出した。1.1×0.8m、深さ30cmの楕円形を呈する。遺物はなく、性格等は不明である。



挿図16 土坑平面図 (1)



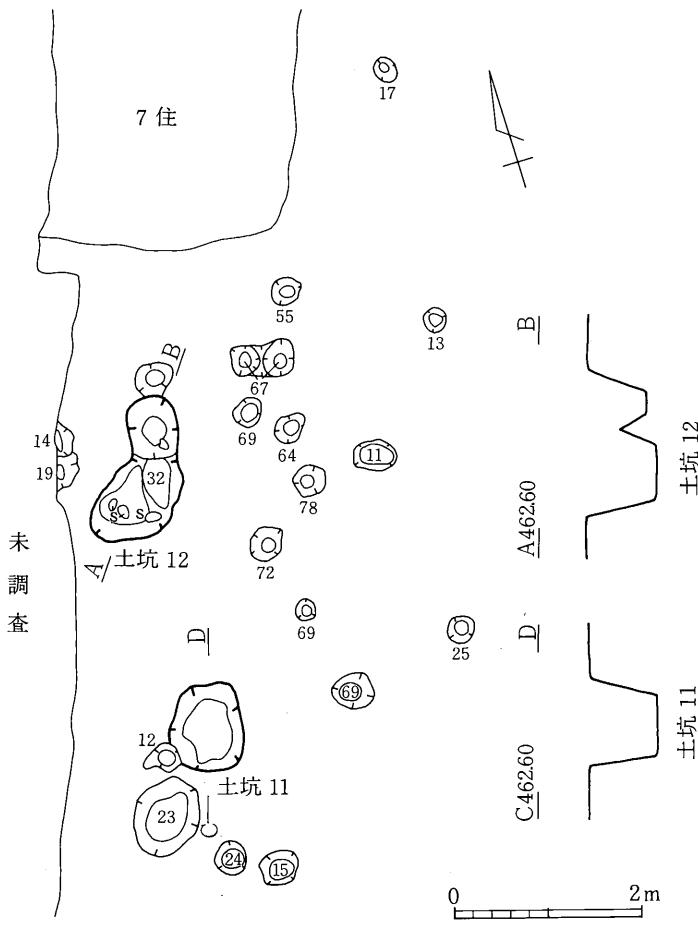
挿図17 土坑平面図 (2)



挿図18 土坑平面図 (3)



挿図19 土坑平面図 (4)



插図20 土坑平面図 (5)

(渋谷恵美子)

3 竪穴

① 竪穴 1 (挿図21)

調査区中央、2号住居址・土坑15に切られて検出された。

重複関係のため平面形・規模等不明な点が多いが、おおむね円形を呈するものと思われ、南北方向は3.5m、深さ約30cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、全体的に軟弱である。壁際からだらだらと凹み、北側壁下に周溝状の施設が検出された。埋土褐色土の一層である。主柱穴と考えられる柱穴はない。また、焼土等炉の痕跡も認められない。

出土遺物は玻璃質安山岩の小剝片1片のみである。

規模が小さく、付属施設の状況も不明であり、竪穴とした。出土遺物がほとんどなく、時期不

㉔ 土坑25 (挿図18)

調査区の西端、5号住居址の南側に検出した。1×1m、底部は南側に傾斜し深さ20～40cmとなる。遺物はなく、性格等は不明である。

㉕ 土坑26 (挿図19)

調査区の西端、5号住居址の北側に検出した。1.9×0.6mの細長いものである。底部は西から東へ傾斜し、深さは20cm程になる。遺物はなく、性格等は不明である。

㉖ 土坑27 (挿図16)

調査区の東端、9号住居址の南側に検出した。1.4×1.4m、深さ30cmの不整形の土坑で、9号住居址を掘り込むが、遺物はなく、性格等は不明である。

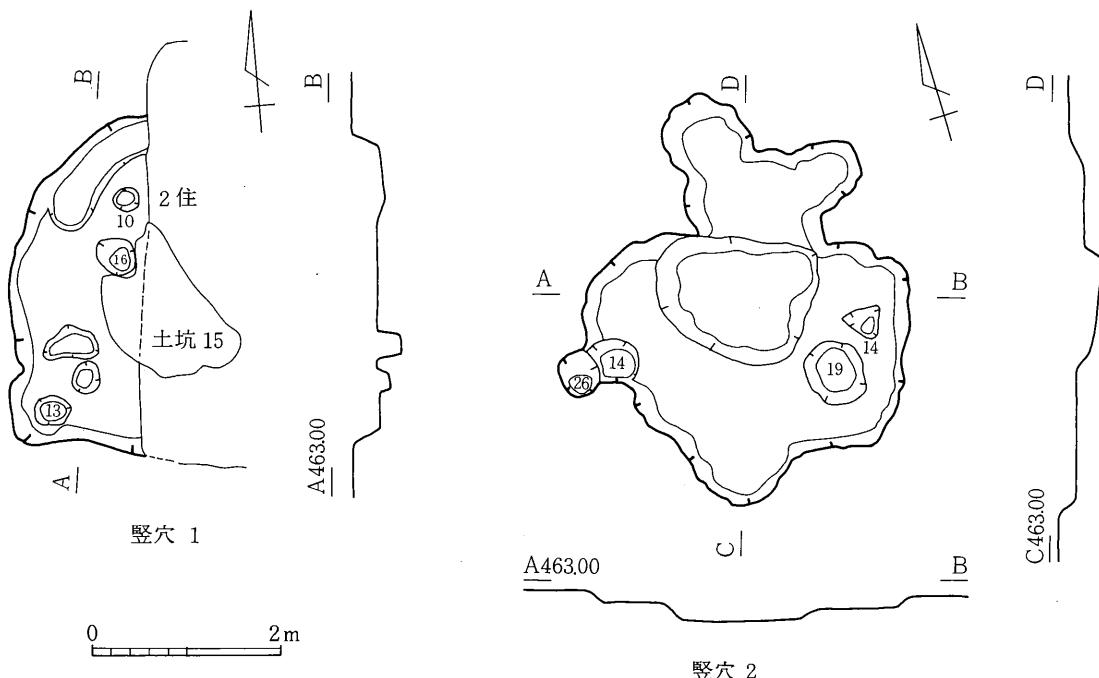
明であるが、埋土の状態から縄文時代中期の遺構の可能性がある。

② 竪穴 2 (挿図21、第18図)

調査区中央南側、1号住居址、土坑19・20、竪穴 1、溝址 2 と近接して検出された。

不整形を呈する遺構であるが、遺物出土があり、底面が平坦なため、竪穴として取り扱った。規模 4.4×3.4 m、深さ13~22cmを測る。中央に 1.8×1.2 m、深さ19cmの不整形の落ち込みがあり、別遺構の重複とも考えられるが、埋土は同一で判断がつかなかった。底面は全体的に軟弱である。埋土は北側の張り出し部分が褐色であるのに対し、南側は上部に褐色の砂質、下部に褐色土が堆積する。壁の立ち上がりの状態は緩やかである。焼土等の痕跡は認められない。

出土遺物は縄文時代中期土器3片と硬砂岩製の横刃型石器があり、詳細時期は不明であるが、埋土の状況等から縄文時代の遺構と考えられる。
(馬場保之)



挿図21 竪穴 1・2

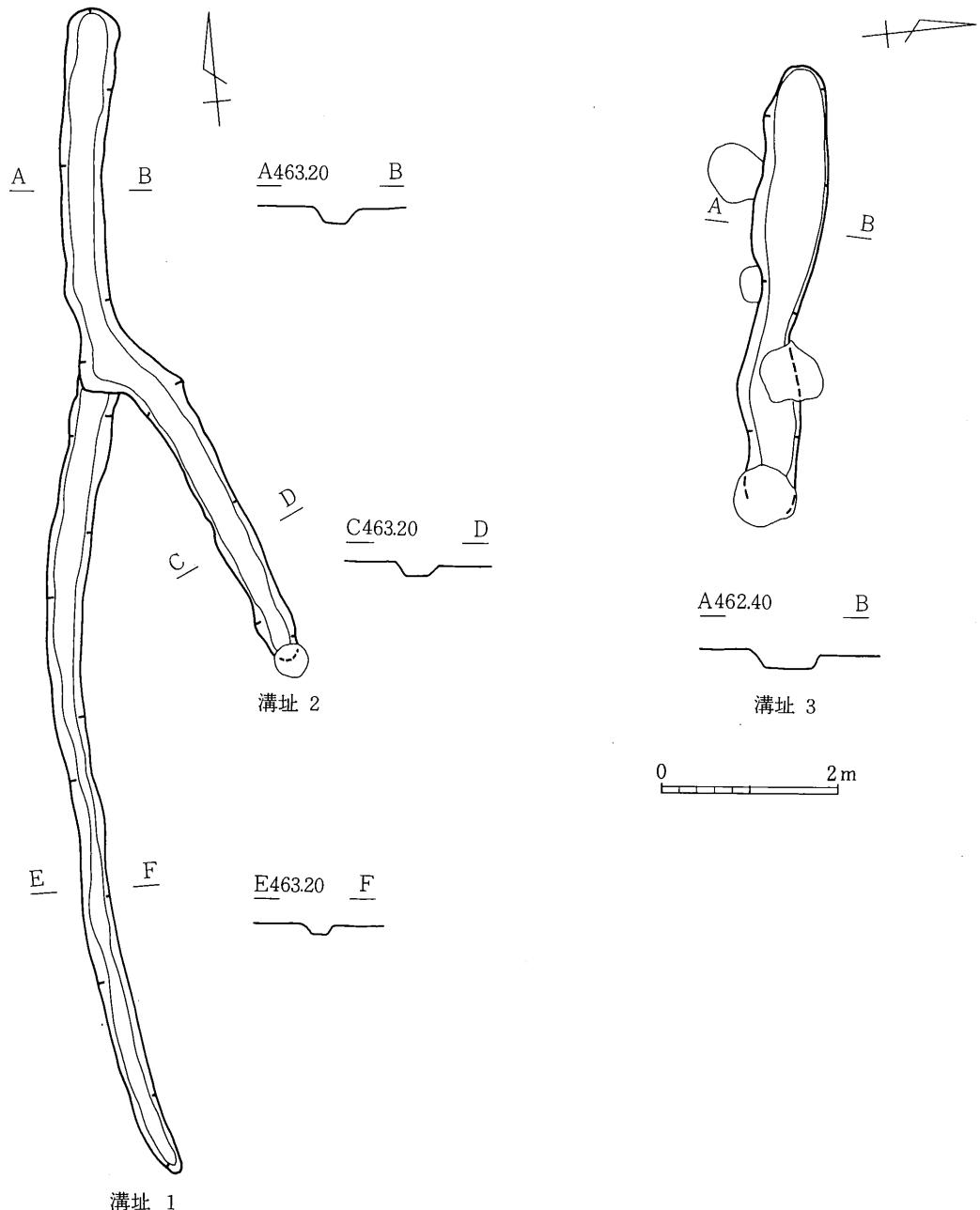
4 溝址

① 溝址 1 (挿図22)

調査区南西側、溝址 2 と連続し、13・14・21~23と近接して検出された。やや弧状を呈する溝址で、土坑23より北側部分は底部が一段低くなり、溝址 2 と捉えられた。総延長8.8m、幅30~50cm、深さ10~21cmを測り、底部は南側が低くなる。埋土は黒褐色土である。断面U字状を呈する。

出土遺物は隆蒂文・縄文・条線文が施文される縄文時代中期土器片があるが、いずれも混入と考えられ、本址に伴うものはない。

時期・性格等詳細は不明であるが、底部に砂等水の流れた痕跡はなく、なんらかの区画に関する施設と考えられる。



挿図22 溝址 1・2・3

② 溝址 2（挿図22）

調査区南西側、溝址1と連続し、3号住居址、土坑6・20と近接して検出された。

溝址1と連続する部分で折れ曲がっており、これより南側はやや西に湾曲する。総延長7.7m、幅40～60cmとばらつく。深さは12～30cmを測り、中央部が高く、両側は低くなる。埋土は溝址1と同様、黒褐色土で、断面U字状を呈する。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明であるが、溝址1と同時期の遺構と考えられ、やはり、なんらかの区画施設と考えられる。

③ 溝址 3（挿図22）

調査区北東端で検出された。

直線状を呈する溝址で長さ5.2mを測り、幅は40～80cmとばらつく。長軸方向はN76°Wを示す。深さは5～24cmを測り、東側が低くなる。埋土は褐色土で、断面U字状を呈する。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

④ 溝址 4（第19図）

調査区中央西端断面にかかる、5号住居址上部で検出された。重機により削平を受けて断面で確認されたのみである。

5号住居址床面より約40～50cmの位置にあり、褐色の礫混砂利層がほぼ水平に観察された。中央部はやや層厚を増し、また、下位に大型礫が集中する。平面でプランは確認できなかったが、およそ6号住居址カマド方向に伸びていたと考えられる。

出土遺物は須恵器甕、大平鉢がある。大平鉢（第19図1）は口縁部に成形時の歪みがある。

出土遺物から中世の溝址と考えられ、形状等から自然流路と思われる。

（馬場保之）

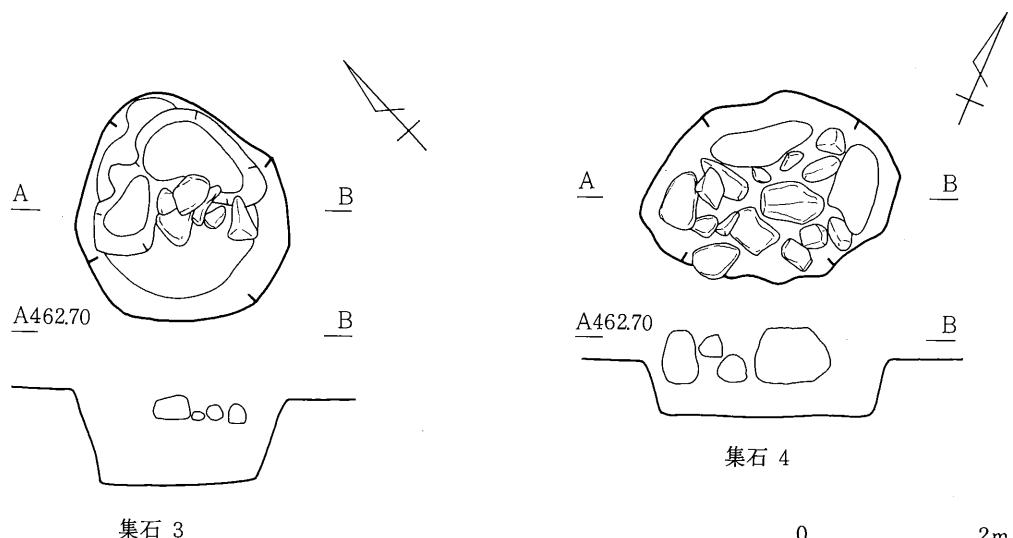
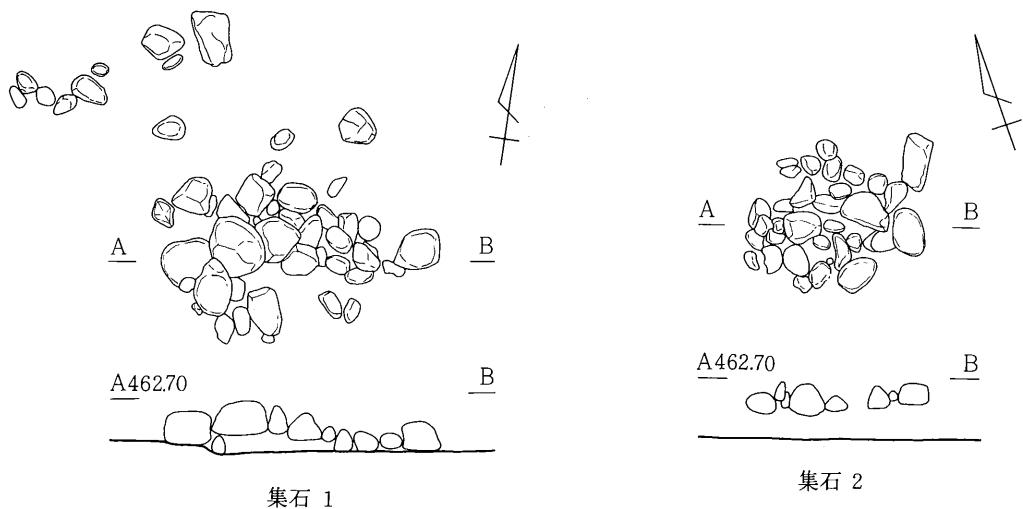
5 集石

① 集石 1（挿図23）

調査区南東側、1号住居址南東隅、1号住居址を切って検出された。

1号住居址検出面より花崗岩を主とする大型礫が確認されたが、上部は取りはずしてしまい、間層を挟んだ下位の礫のみを図化した。150×120cmの範囲に10～30cm程度の礫が密集する。大部分は1号住居址床面より約10cm高いが、2～3個床面に達する小礫がある。

出土遺物はなく、重複関係から古墳時代後期以降に位置づく以外詳細は不明である。



挿図23 集石 1・2・3・4

② 集石 2 (挿図23)

調査区南東側、1号住居址中央やや東壁寄り、1号住居址を切って検出された。

90×80cmのほぼ円形の範囲に、10~20cm程度の楕円礫が一定レベルに集中する。1号住居址床面より10cm程浮いた状態で検出された。

出土遺物はなく、詳細時期・性格は不明であるが、重複関係や形態等から集石1と同時期の遺構と考えられる。

③ 集石 3（挿図23）

調査区中央東側、9号住居址炉址北側、9号住居址を切って検出された。

120×100cm、深さ約45cmの掘り方に、底部より25cm程浮いた状態でほぼ中央に礫が集中して検出された。礫は重なりがなく、ほぼ一面的に分布する。花崗岩を主とするが、わずかに砂岩が含まれる。10~20cm程度の礫である。埋土は礫下面付近まで黒褐色土、以下褐色土で、掘り過ぎた可能性もある。焼土・炭は含まれず、焼けた礫もない。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

④ 集石 4（挿図23）

調査区中央、4号住居址と6号住居址の中間に検出された。

地山に礫が含まれる部分に位置するが、130×90cm、深さ約30cmの不整楕円形を呈する掘り方内部に礫が集中する。10~40cm程度の大きさの揃わない礫が、検出面の15cm上位から底部まで重なった状態で出土した。礫はやや東辺側に寄る。

出土遺物は土師器甕3片のみで、時期・性格等詳細は不明である。

（馬場保之）

6 その他

① 柱穴等（挿図16~20）

前述した土坑以外にも40~60cm前後の穴が調査区全体で検出された。それぞれ深さ、形は異なる。建物址等の柱穴の可能性も考えられるが、性格は特定できなかった。縄文土器破片を出土したものもあるが、流れ込みともみられる。なお、溝址3より北側では、地山の礫層まで達するものもある。

② タタキ状床（挿図4 スクリーントーン部分）

調査区南端、8号住居址の南側に検出した。調査区外にかかるため、確認されたのは一部分である。固くたたき締められており、住居址床面と思われる。この部分に接する北側の溝が周溝の残存であろう。タタキ部分に小穴がいくつか検出されたが、柱穴とは言い難い。本址に伴う遺物はないが、床面は他の住居址よりも高い位置にあり、時期的には新しくなる。5号住居址上部で中世の溝が確認されているが、本址も該期にあたる可能性が考えられる。

③ 遺構外出土遺物（第19~20図）

縄文時代中期

貼付文（第20図1）、半截竹管文(2)を施したもの、隆帯に条線を施したものがある。

弥生時代

有孔磨製石包丁（第20図24）が1点出土した。刃部に擦痕が認められる。今回の調査では該期の遺構は確認できず、以前の調査でも後期の遺物が若干出土しているのみで、集落等の状況は不明である。

平安時代・中世以降

（第19図2）は灰釉陶器の高台付碗、(3)はロクロ使用の土師器台付鉢の脚部である。遺構としては自然流路の溝址4を確認したのみであったが、該期の遺構は今回調査した遺構検出面よりも上部にあるものと思われ、後世の削平により破壊されている可能性はあるが、調査区南端のタタキ状床も含め、該期の集落の存在は十分考えられる。

石器

（第20図16・17）は緑色片岩製打製石斧。横刃型石器は、ほぼ全面に調整が施されているもの（18・19）と自然面を利用し部分的に調整を施すもの（20～22）とがある。いずれも硬砂岩製である。（23）は硬砂岩製の石錘である。

（渋谷恵美子）

IV まとめ

今回確認された縄文時代中期と古墳時代後期の住居址は、集落全体からみればごく一部である。したがって、ここでは遺構・遺物について気付いた点をあげ、本報告書のまとめにかえたい。

縄文時代中期

該期については、今回の調査区の西側で以前に行なわれた調査等があり、それとの関連が考えられる。今回確認されたのは2軒のみであり、遺物の出土量も多いとはいえないが、土器の様相はやや異なるようであり、別の集落址として捉えられる。時期によって移動はあるが、この中位段丘のかなり広い範囲が居住域となっていたものと思われる。

古墳時代後期

該期については、以前の調査等でも明確ではなく、今回の調査によりその一端が明らかにされたといえる。

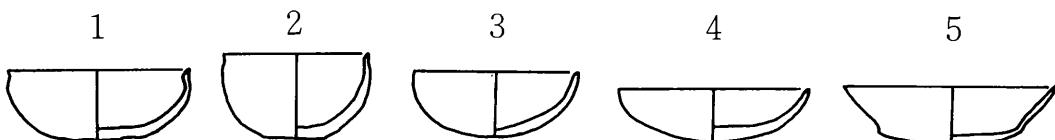
1. 住居址の時期

7軒の住居址は、古墳時代後期前半に比定されるものであるが、出土土器からみると古い様相と新しい様相とが混在する。時期的には大きな隔たりはないが、位置関係からもすべてが同時存在ではなく、住居址間に若干の時期差が認められる。5・6号住居址がやや先行し、6号住居址は比較的長く存続していたようである。

2. 一住居址内における土器の基本セット

遺物の出土量が比較的多く、基本的なセットがとらえられる。

主体となるのは、大小の甕や壺・坏や塊・甑・高坏である。甕の量は特に多い。これに対し、大型の壺が少ないようであり、貯蔵用と煮炊き用という機能別の器種分類が明確でなかったともいえる。坏は形態上最もバラエティーに富む。以下の5種に分類できる。



一住居址から5種すべてが出土するわけではない。1・2は前段階からのものであり、5は新しい様相を示し、時期等により組合せは異なるといえる。特徴としては、1は口縁端部が屈曲する。1・2は大小があり、坏というよりもむしろ塊・鉢といった方がよいものもある。3は2よ

りも浅く、4はさらに浅いものであり、調整は丁寧である。壺・高壺には一部内面に黒色処理を施すものがある。これらは、須恵器の供給の不足を補うものとされているが、壺では、黒色処理をしたもののが特定の器形に限られていない。この時期は一部須恵器の壺を模倣したもの（須恵器模倣壺）がみられるが、今回はそれと思われる破片が出土したのみである。甌は2・5号住居址のみからの出土だが、役割からいって、いずれの住居址にもあったといえよう。

3. 須恵器を有する住居址

須恵器が一般的なものではなかった当時において、須恵器を保有する住居址は、集落内でも大型のもの、あるいは中核的なものであるという傾向が指摘されている。今回の調査では、量的には少ないが、図示した以外にも各住居址から破片が出土している。破片の場合、住居址に直接伴うか判断しがたいものもあるが、一集落内における須恵器出土住居址の割合は多いといってよいと思われる。このことは、当遺跡が古墳時代後期における拠点的集落であり、その中で今回の調査地点が中心的部分である可能性を指摘できよう。

4. 土師器と須恵器

当地方における、須恵器の導入の問題を含めて、内面黒色処理の土師器と須恵器との補完関係について、ここでは述べることはできないが、一集落内の須恵器のあり方を考える上で興味深い資料がある。須恵器模倣壺については前述のとおりであり、出土したものがすべてではないが、壺のバラエティーが多い中にあっては、傾向として少ないといえよう。壺以外では、1号住居址の高壺や破片ではあるが6号住居址の甌がある。これらはいずれも、形態は須恵器を模倣しながらも技法等は土師器のものである。これに対し、2号住居址出土甌は形態は須恵器を模倣するが、輪積み成形であり、色調は灰白色を呈するが、焼成はきわめて悪い軟質のものである。5号住居址からも同様の破片が、6号住居址でも軟質の壺が出土している。6世紀代における須恵器地方窯は今のところ長野県内では長野市松ノ窯址が知られているだけである。2号住居址出土品の焼成方法は不明だが、伊那谷における須恵器搬入の経路や在地生産については今後の研究課題である。

5. 祭祀遺物

屋内祭祀にかかわると思われる遺物がいくつか出土している。

1号住居址 滑石製臼玉 滑石製と土製紡錘車

4号住居址 ミニチュア品

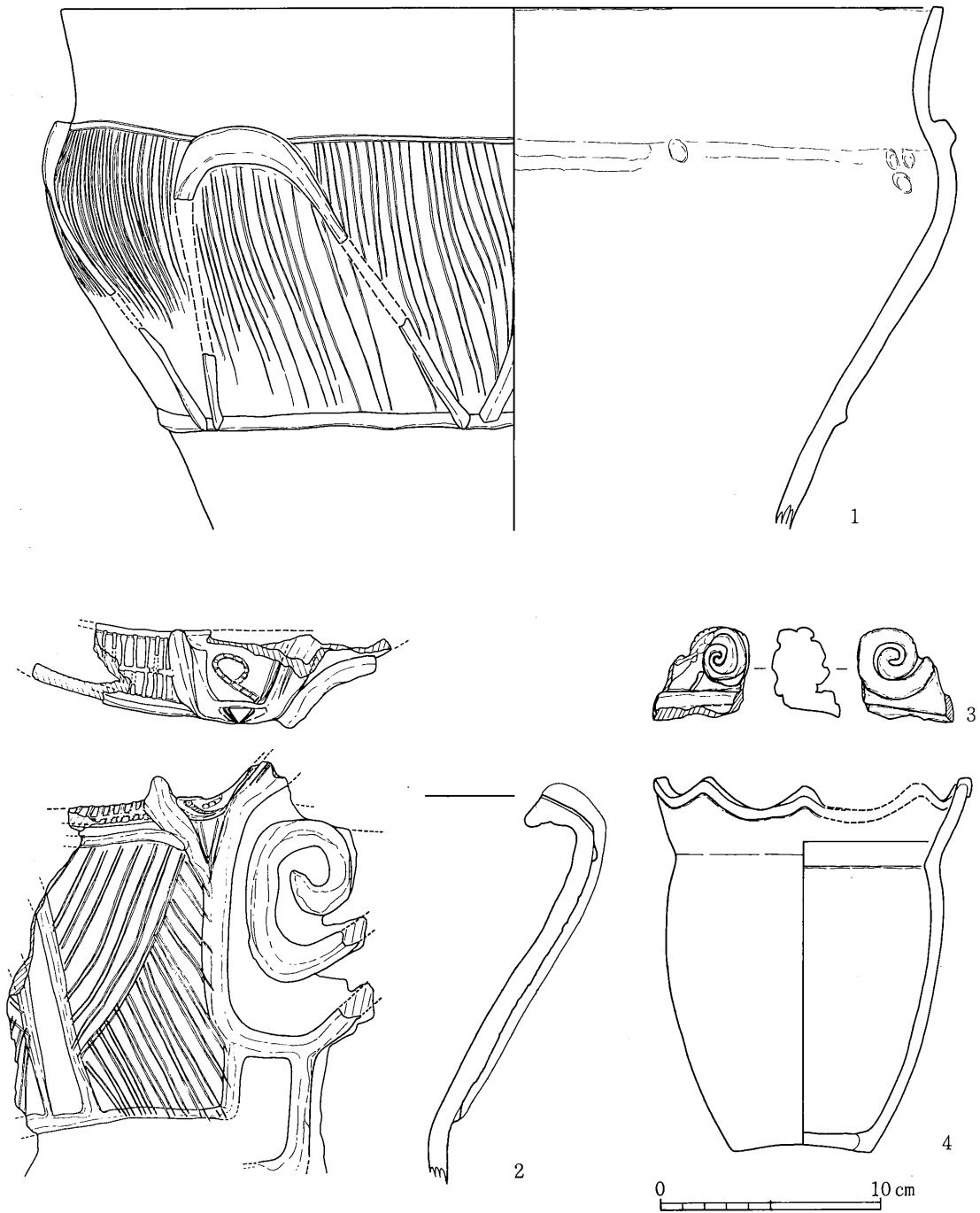
5号住居址 滑石製有孔円板

6号住居址 ミニチュア品 滑石製臼玉 土鈴

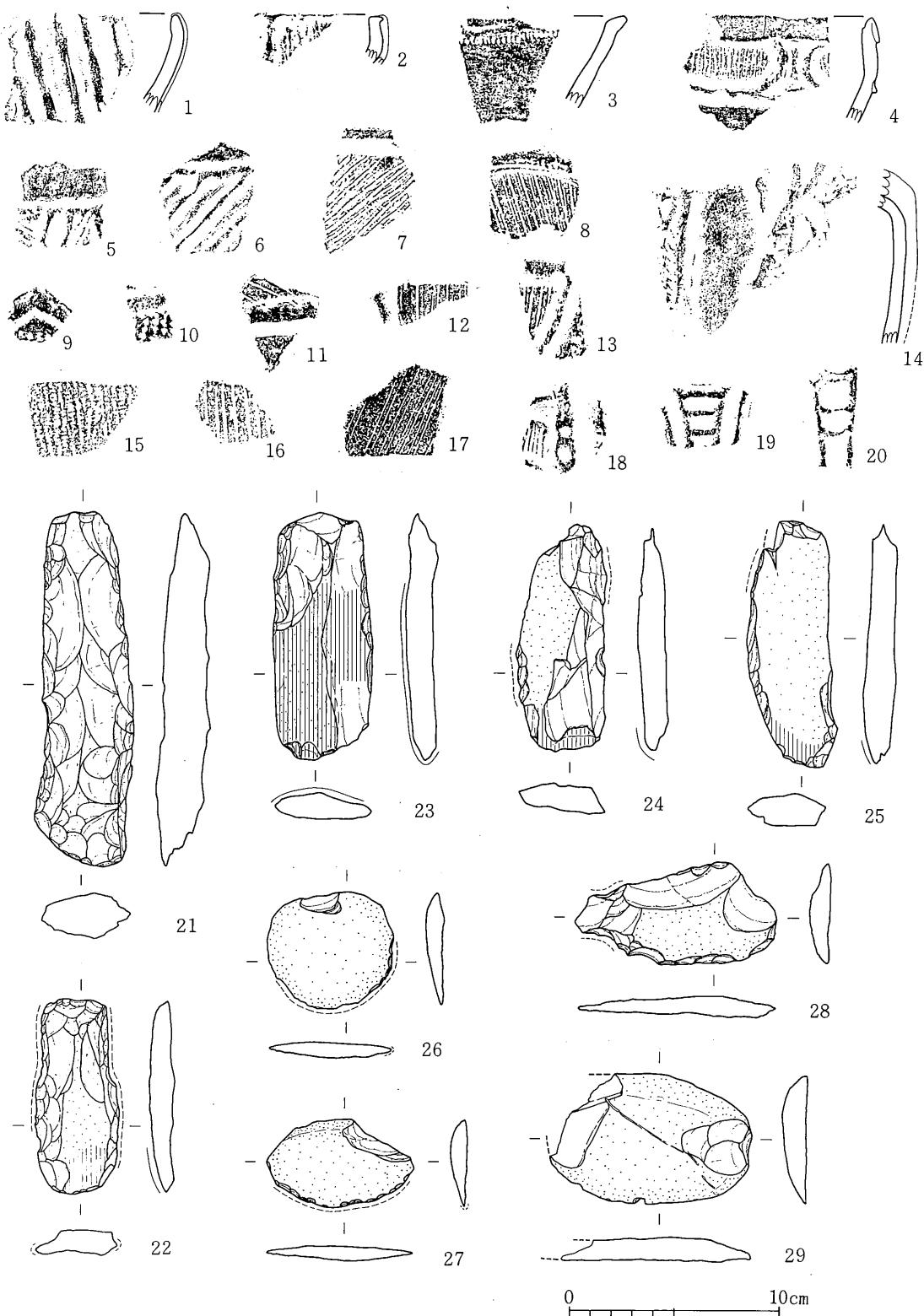
これらすべてが祭祀にかかわるというのには問題もある。住居址内における祭祀の実態をつかみえないが、祭祀が通常一般の住居で行われたものか、一部の住居址で行われたものであるか、今後の資料の追加を待ちたい。

以上の点から、古墳時代後期における柳添遺跡は今回調査地点が集落の中心となっていたと思われる。該期については天竜川支流松川の上流にある鼎切石天伯B・山岸遺跡が拠点的集落として知られ、また下段にある黒河内遺跡でも同時期の集落が確認されている。今後、一集落内における各住居址のあり方、松川を介した該期における遺跡間のあり方を検討していきたい。

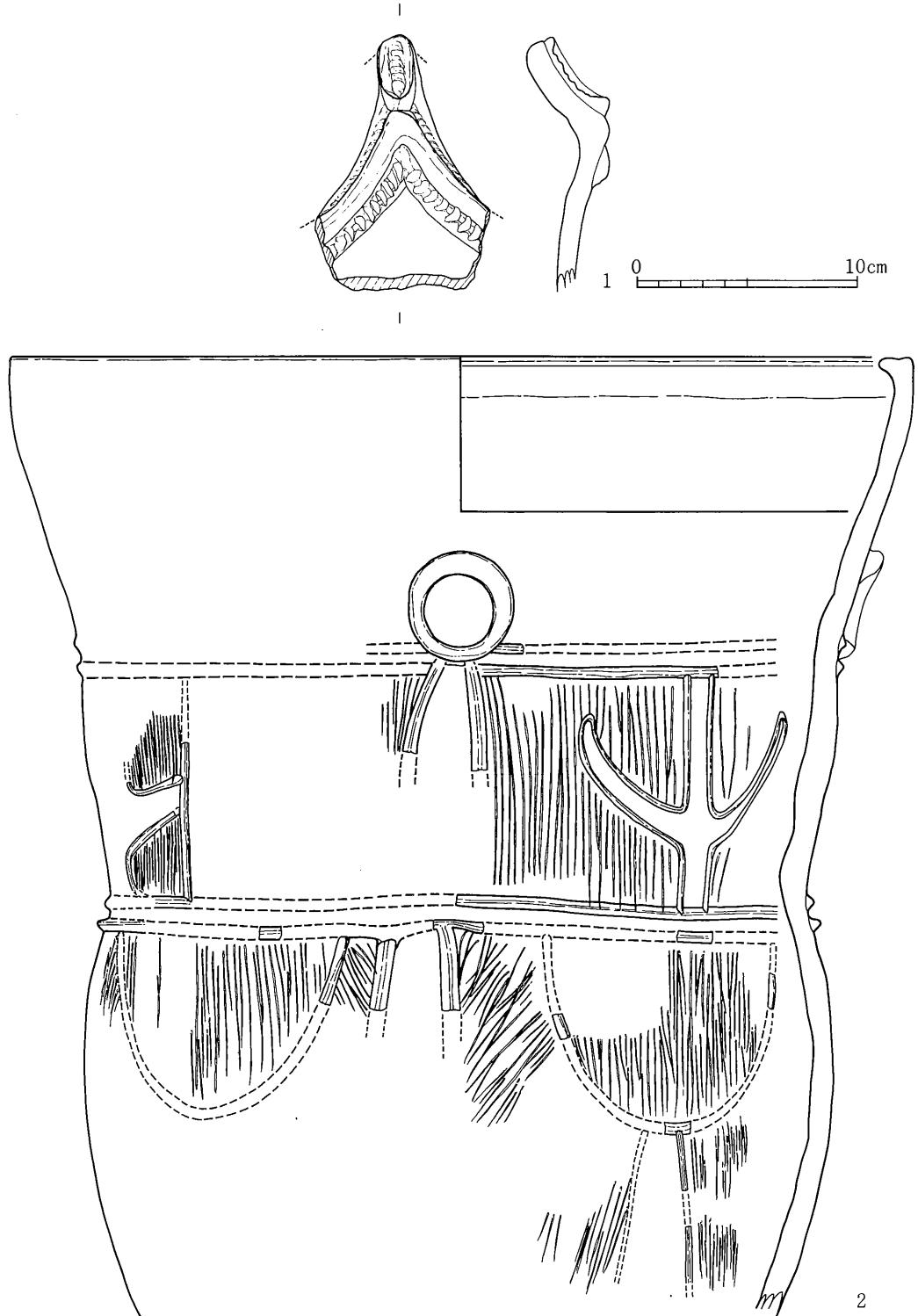
図 版



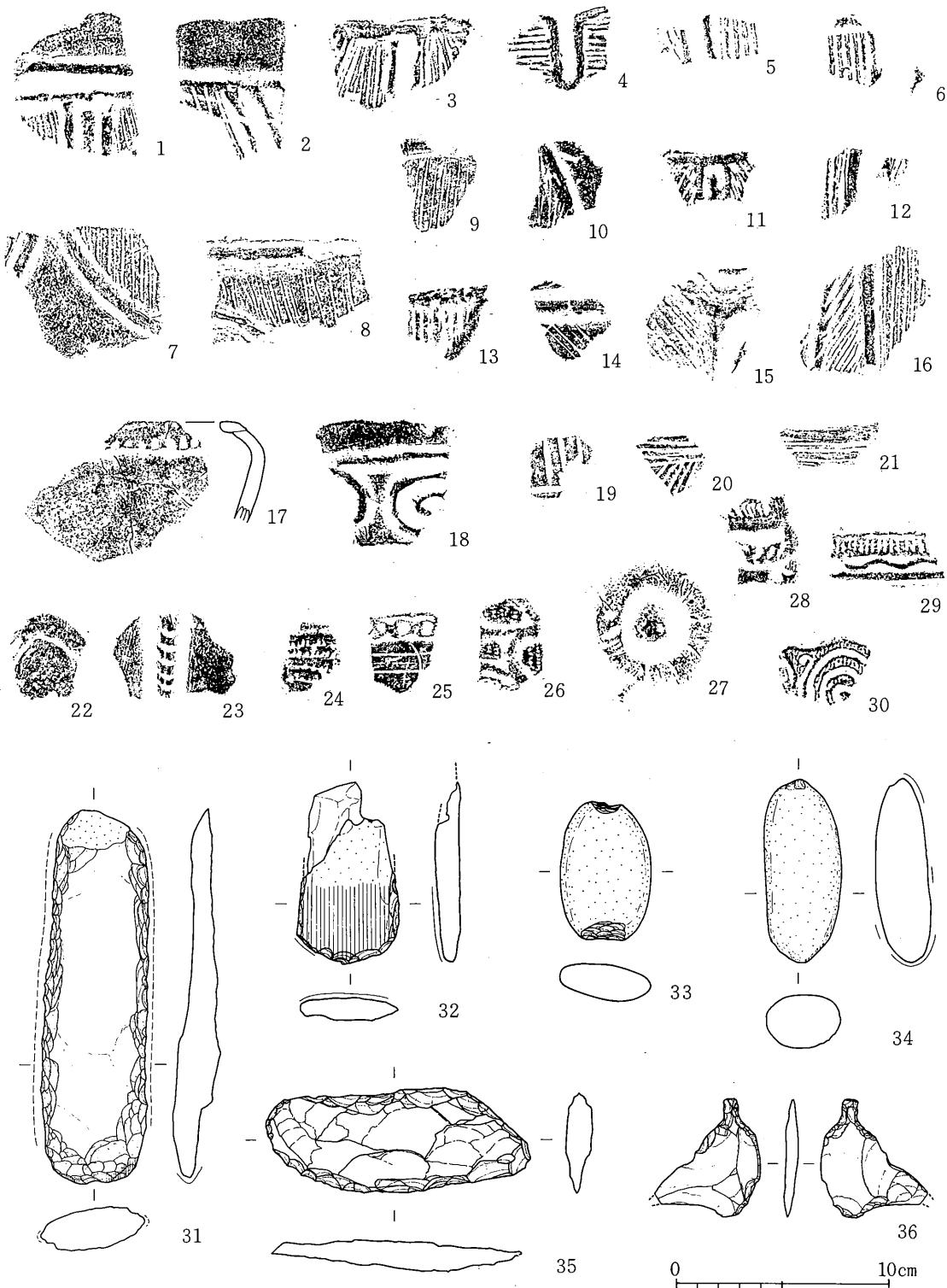
第1図 8号住居址出土土器



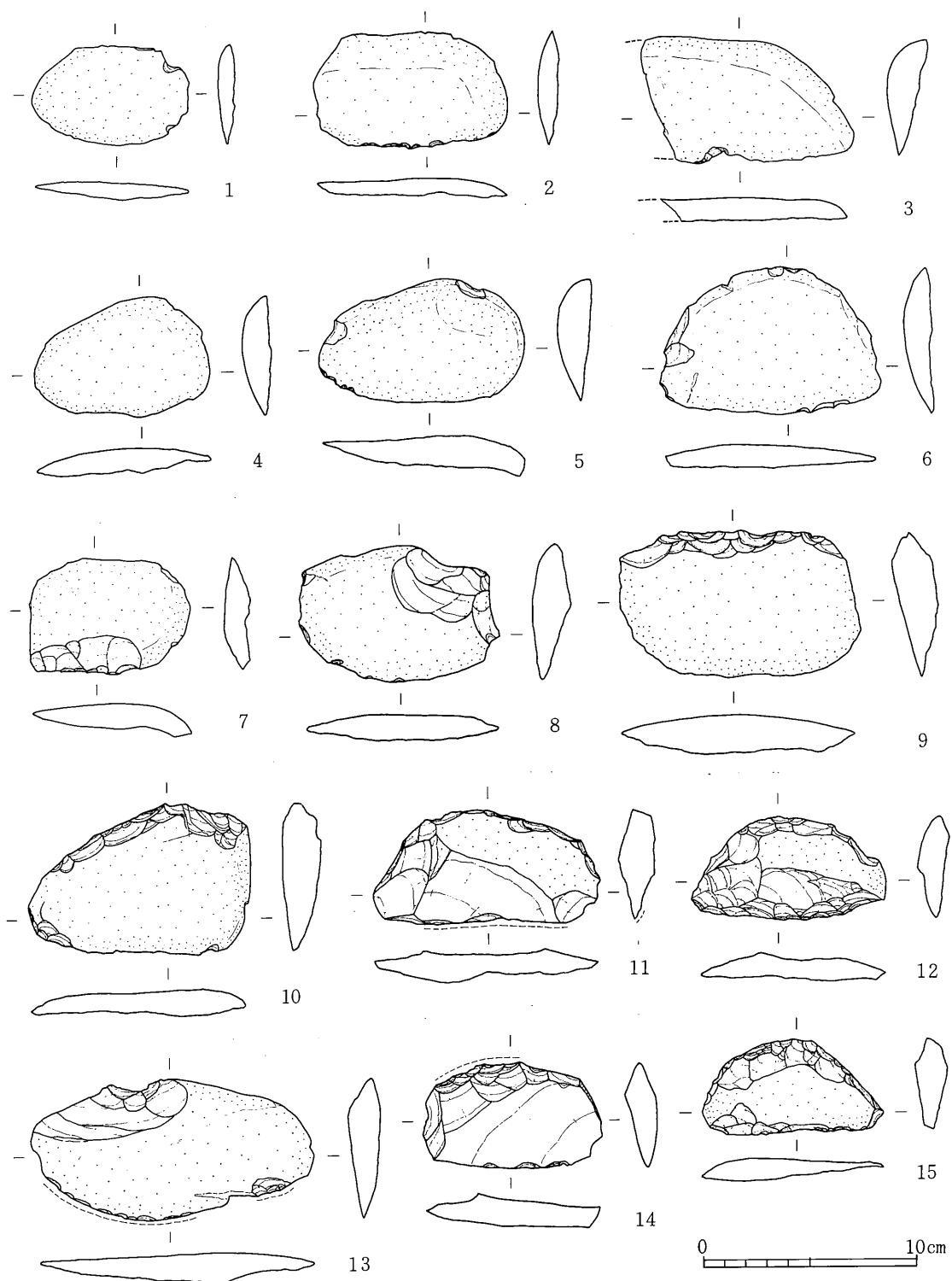
第2図 8号住居址出土土器・石器



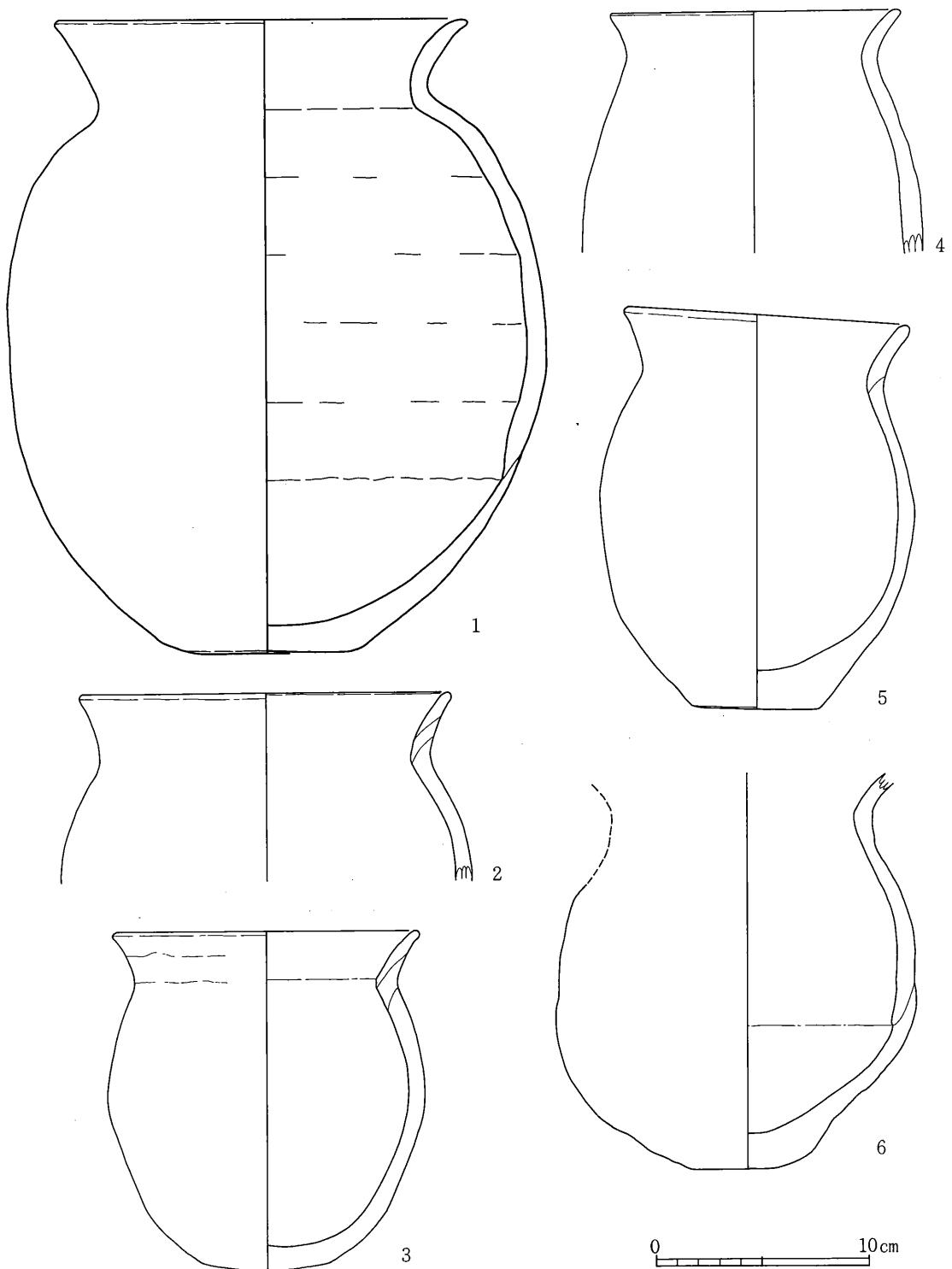
第3図 9号住居址出土土器



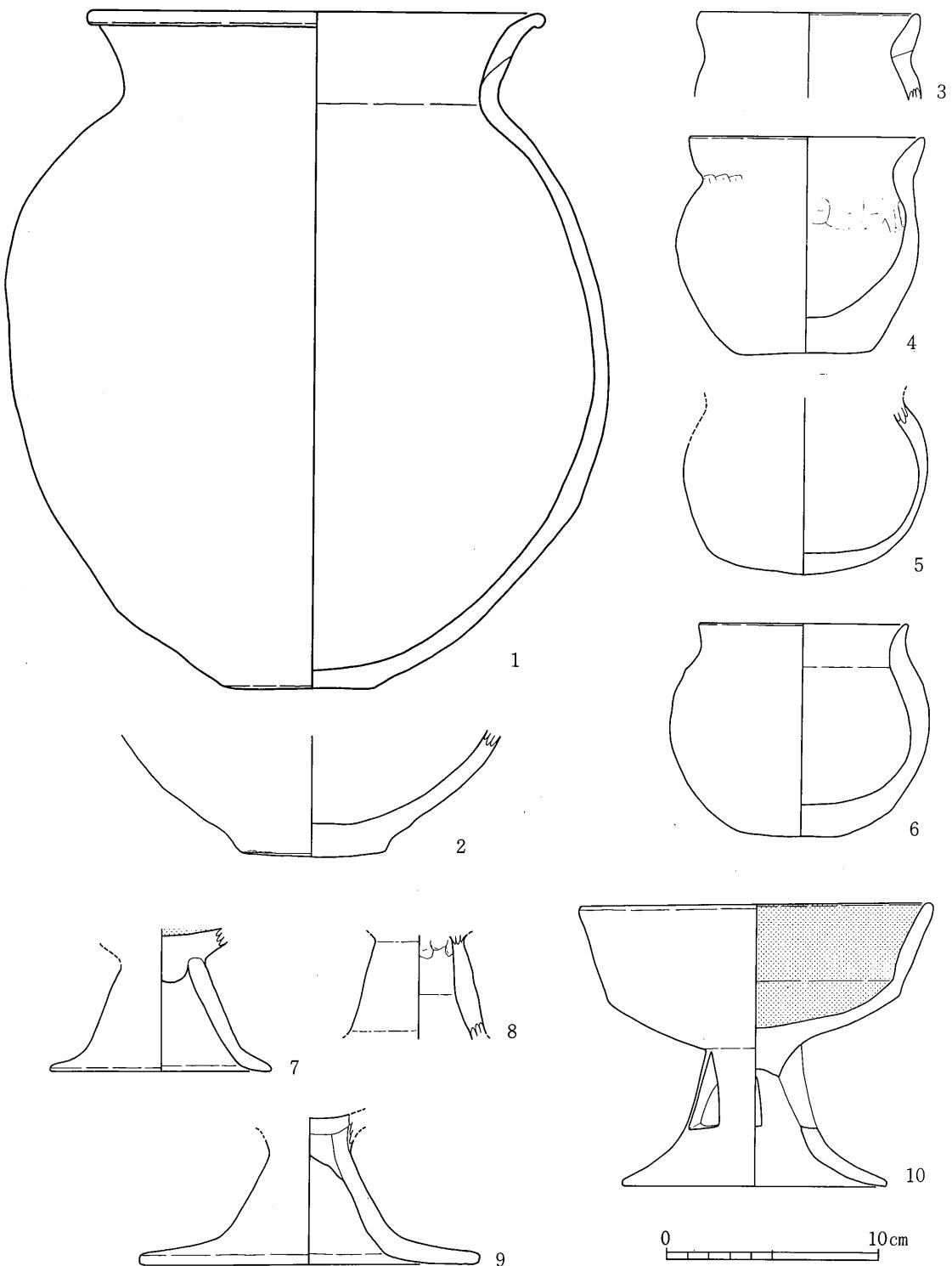
第4図 9号住居址出土土器・石器



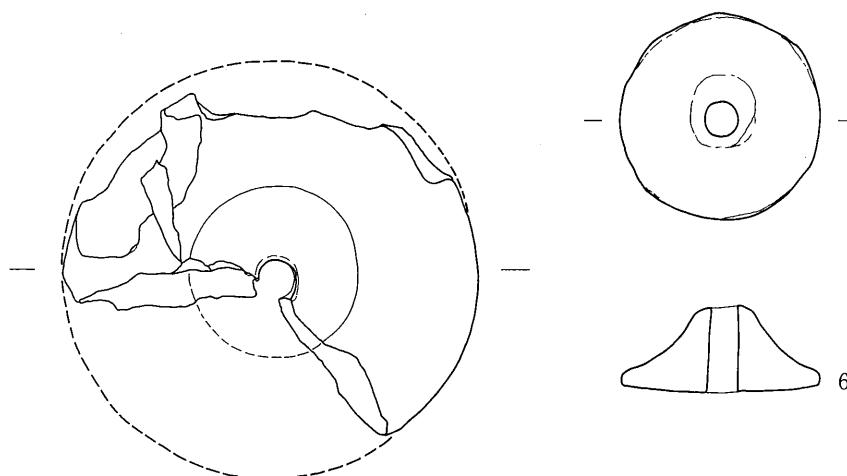
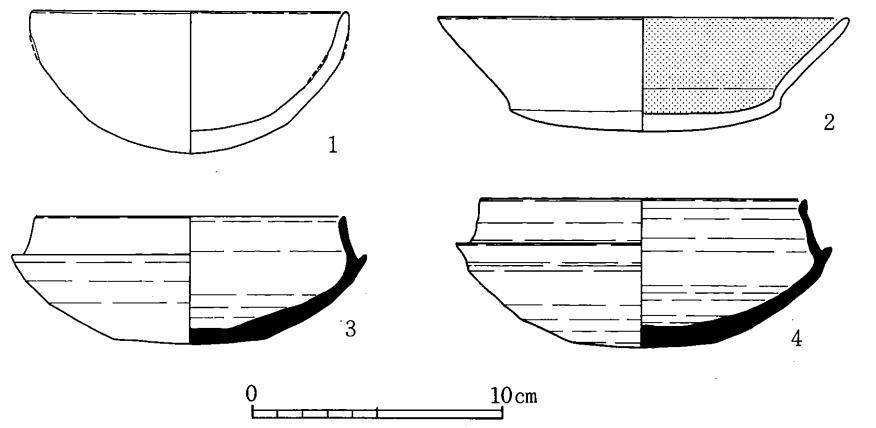
第5図 9号住居址出土石器



第6図 1号住居址出土土器



第7図 1号住居址出土土器

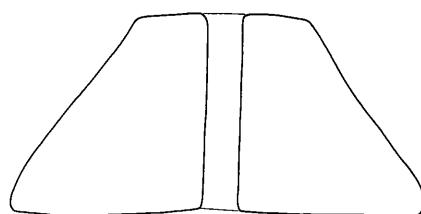


- (○) - - (○) - - (○) -

□□ 7

□□ 8

□□ 9



5

- (○) - - (○) - - (○) -

□□ 10

□□ 11

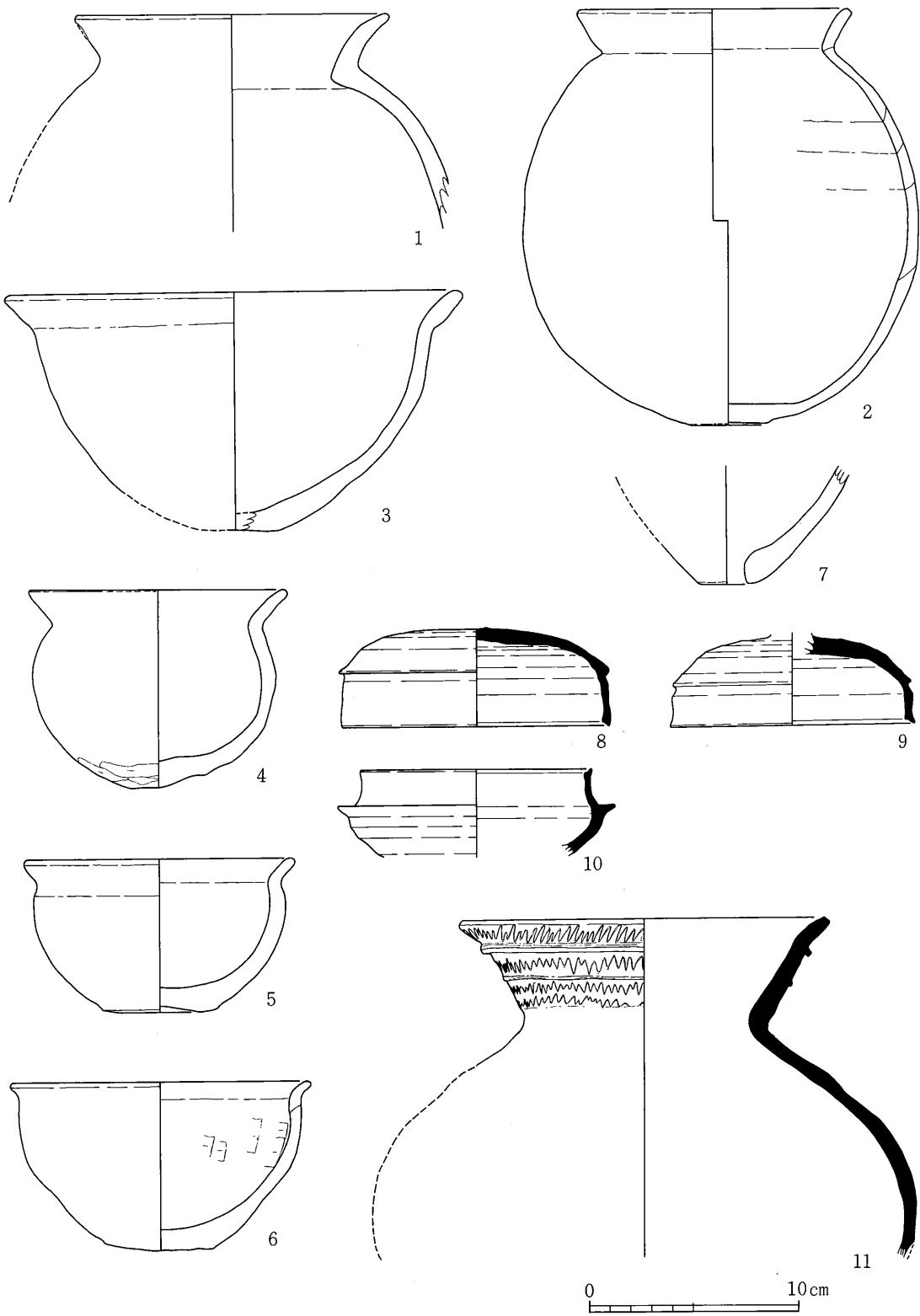
□□ 12

- (○) -

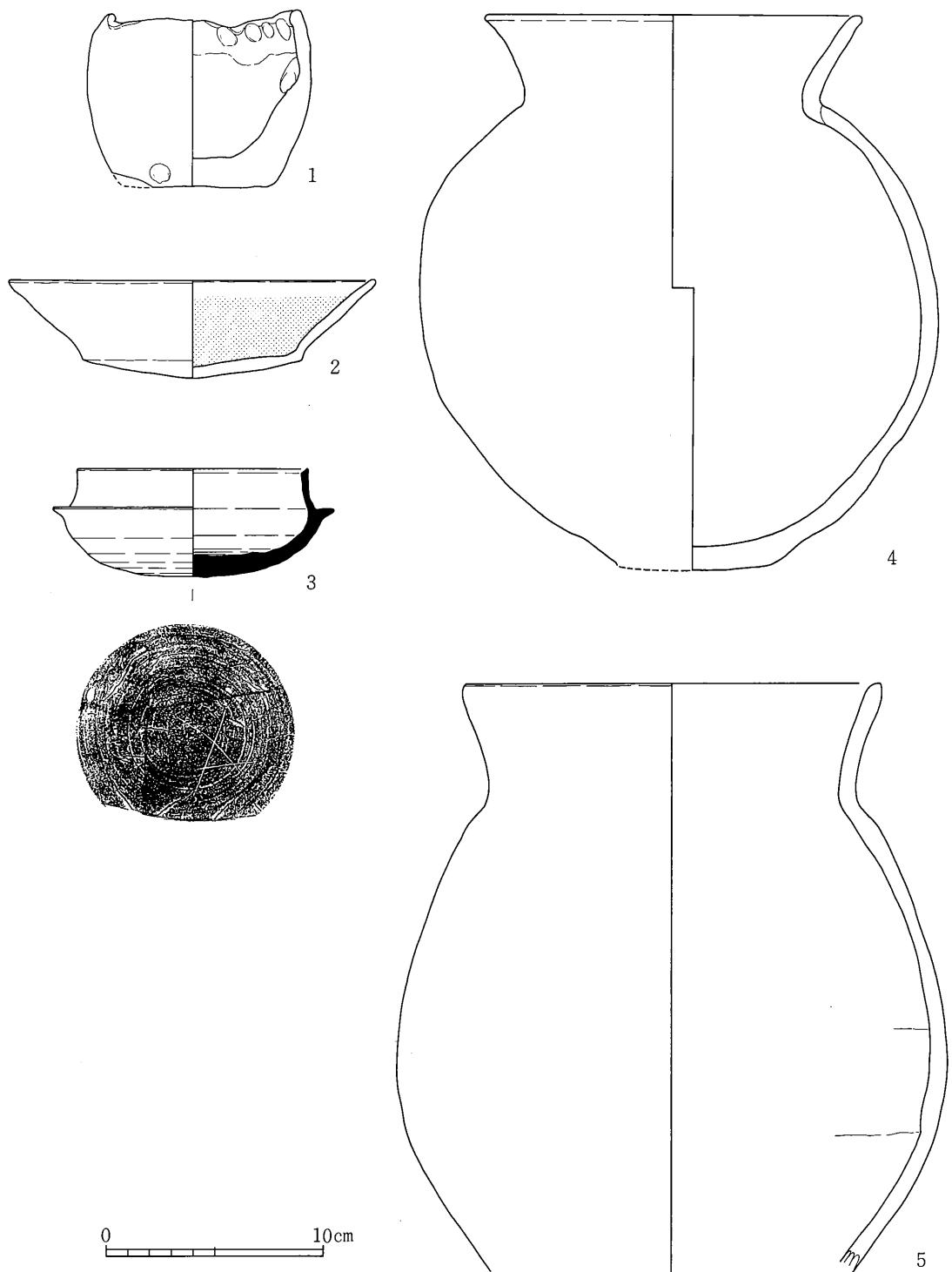
□□ 13

0 5~13 2cm

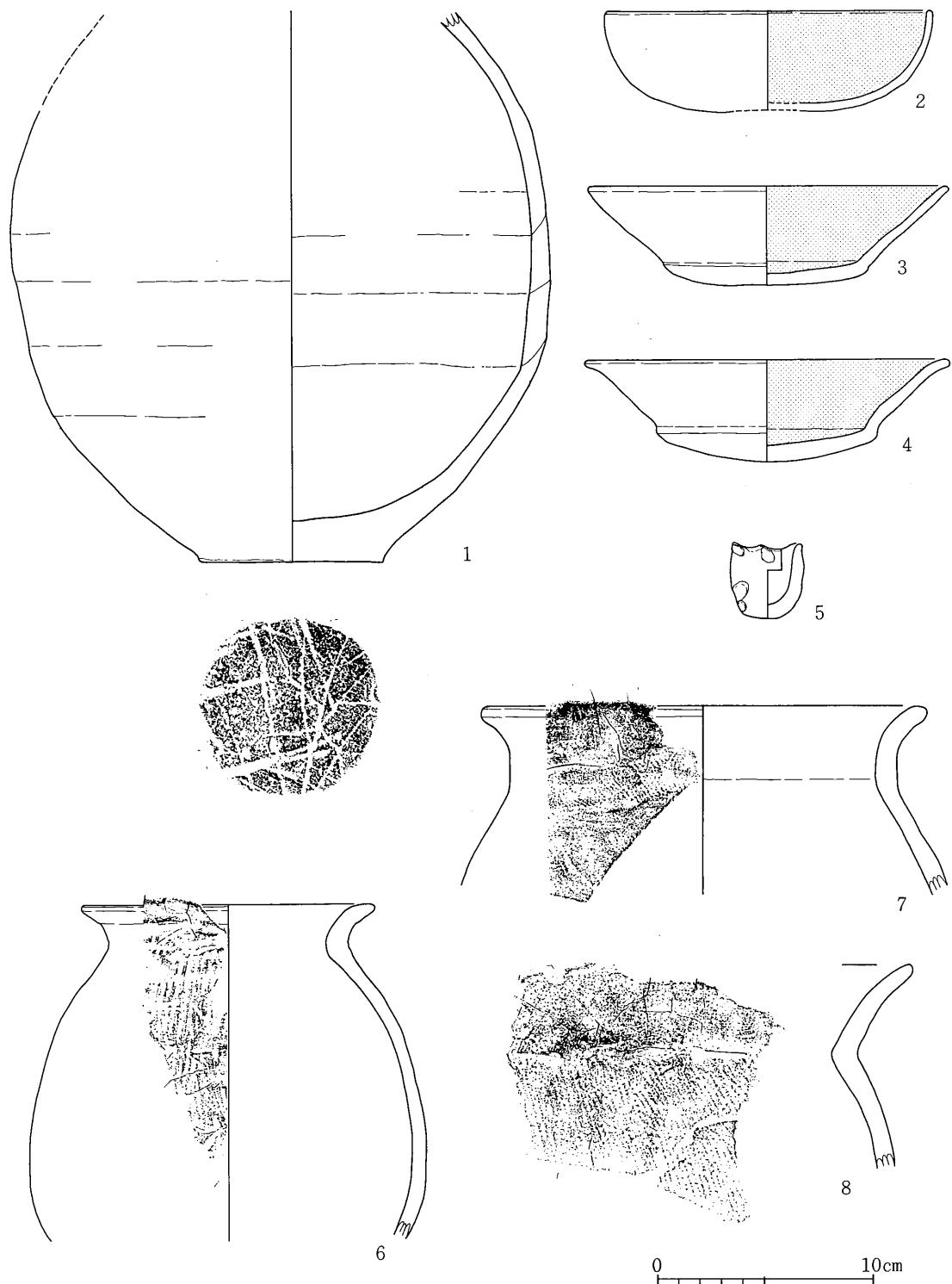
第8図 1号住居址出土遺物



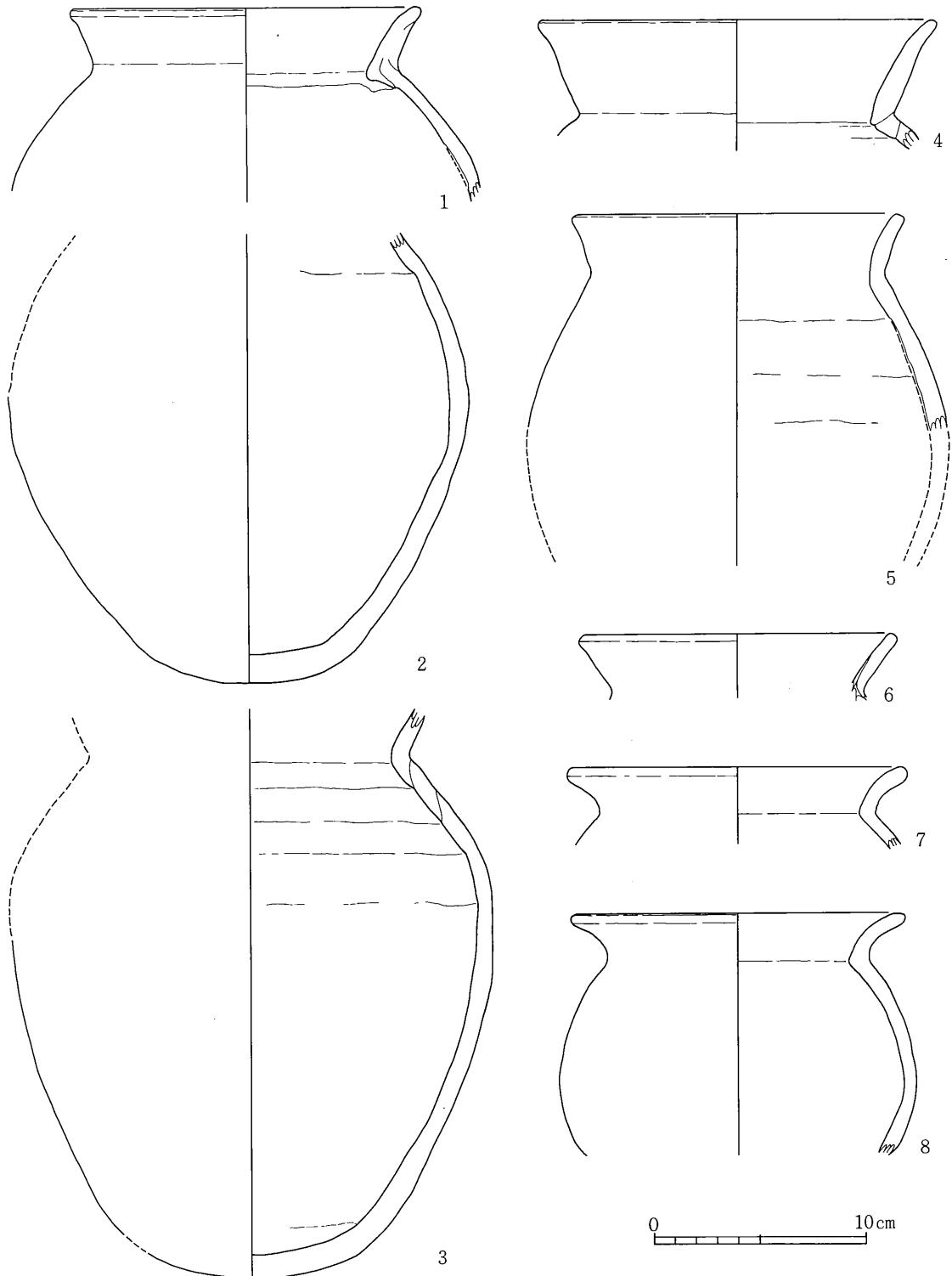
第9図 2号住居址出土土器



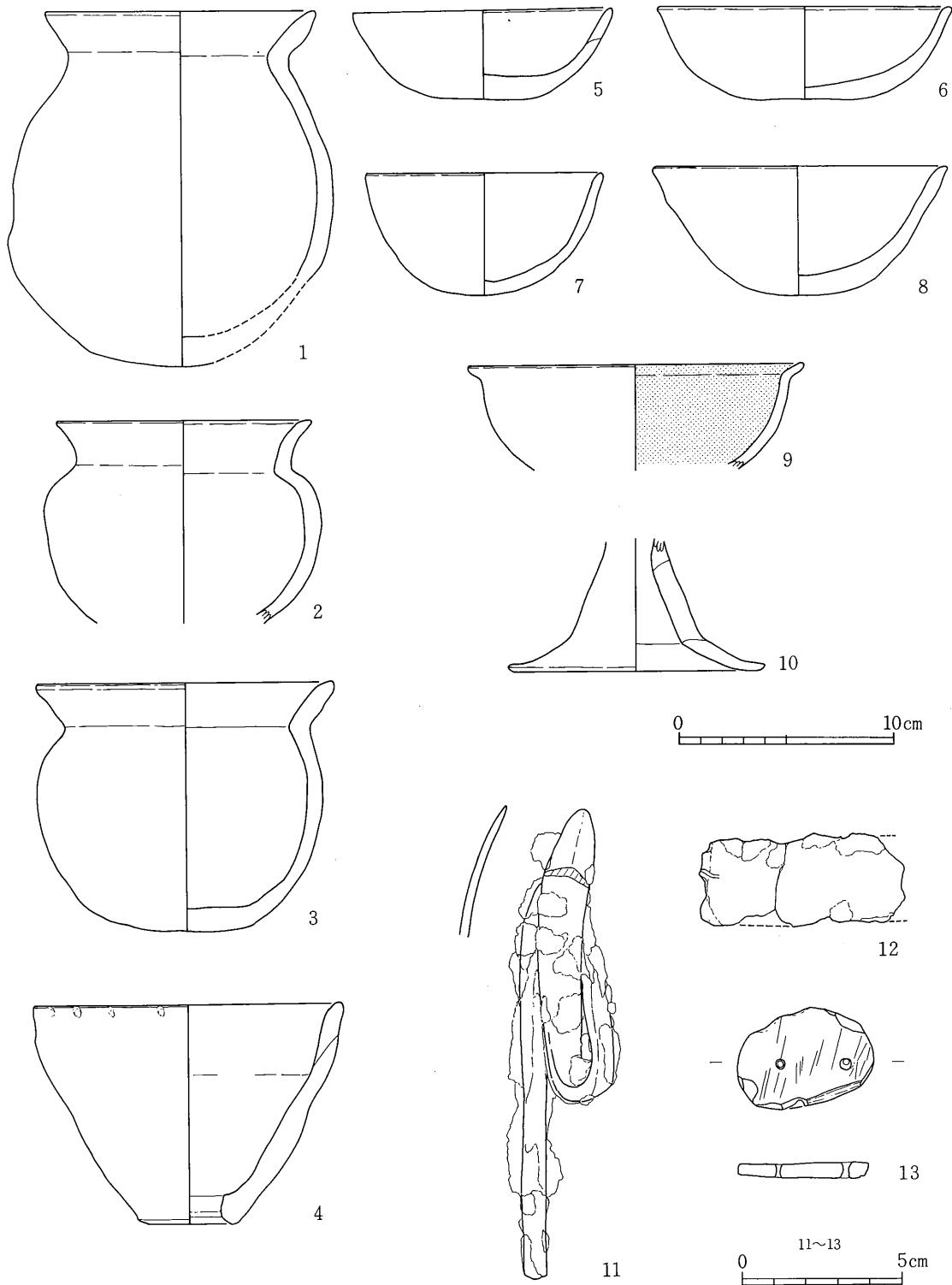
第10図 3・4号住居址出土土器 (1~3 3住、4~5 4住)



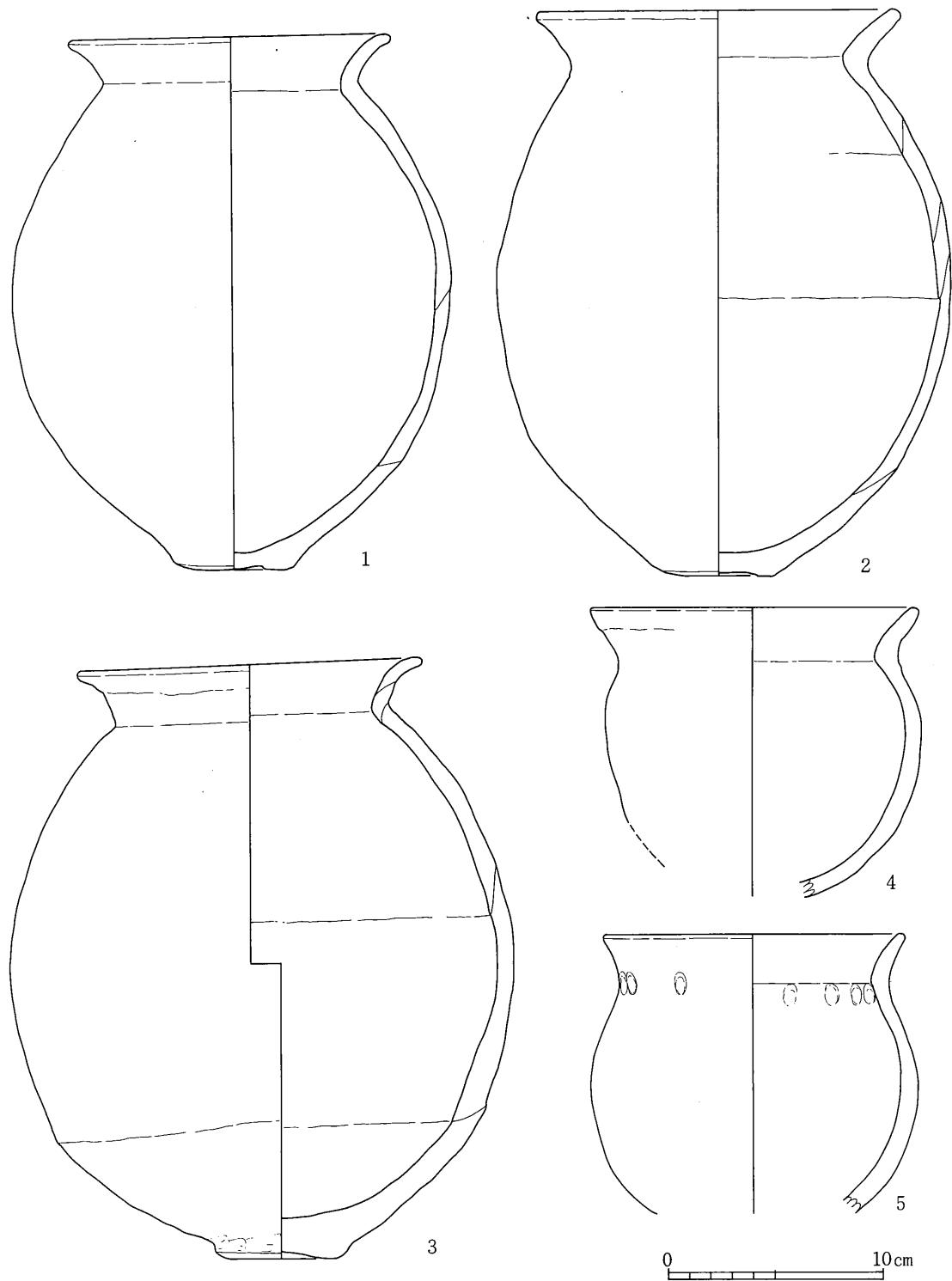
第11図 4号住居址出土土器



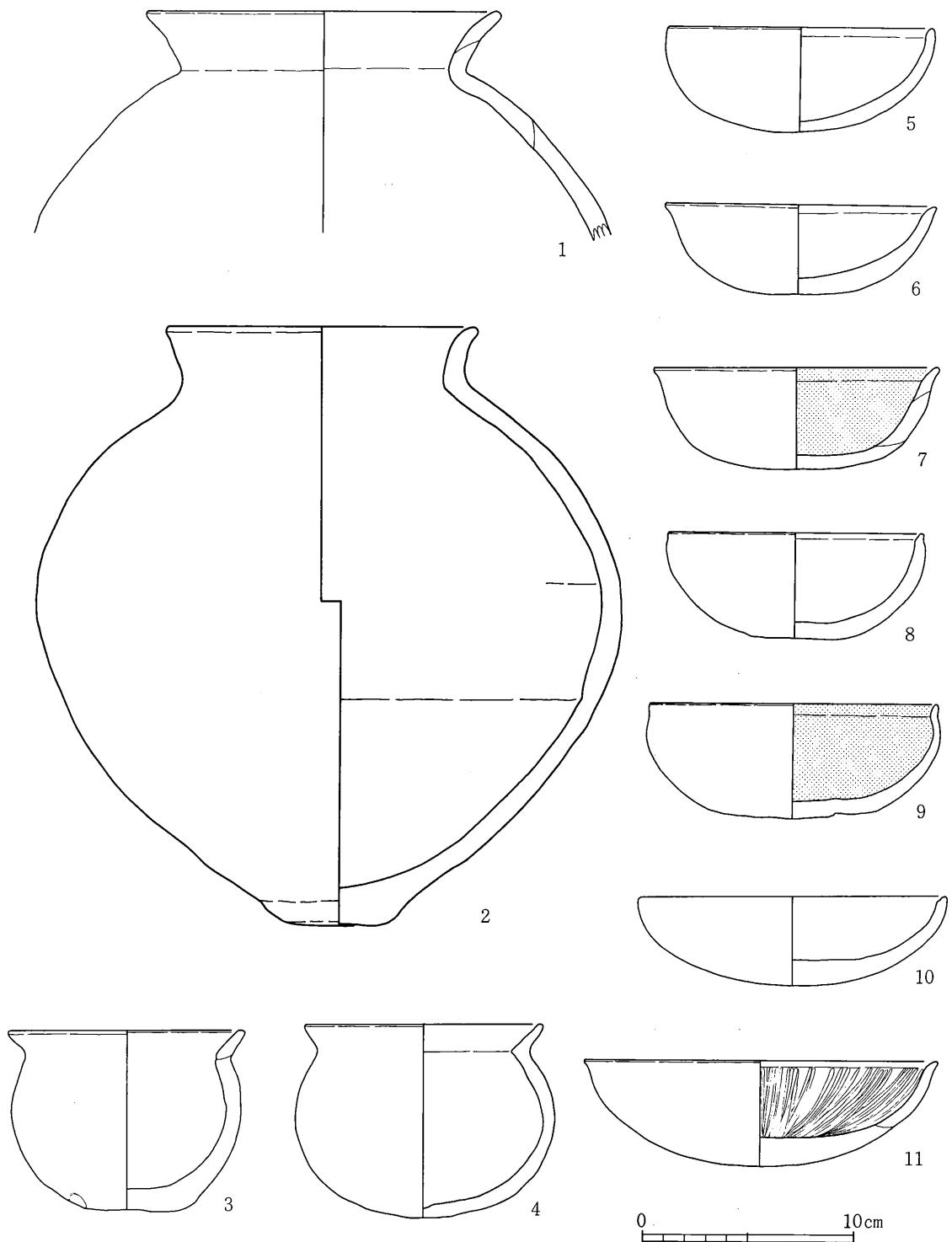
第12図 5号住居址出土土器



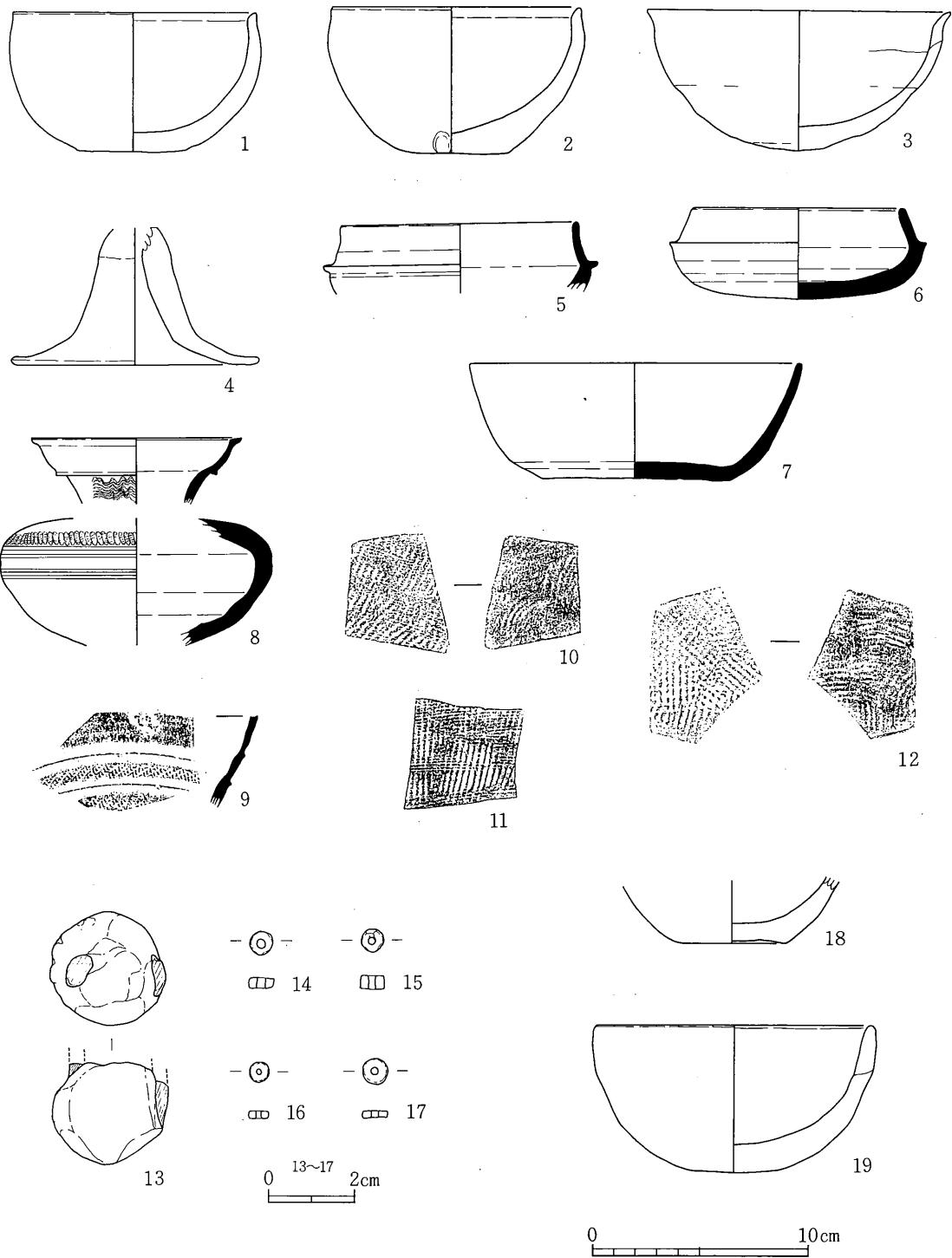
第13図 5号住居址出土遺物



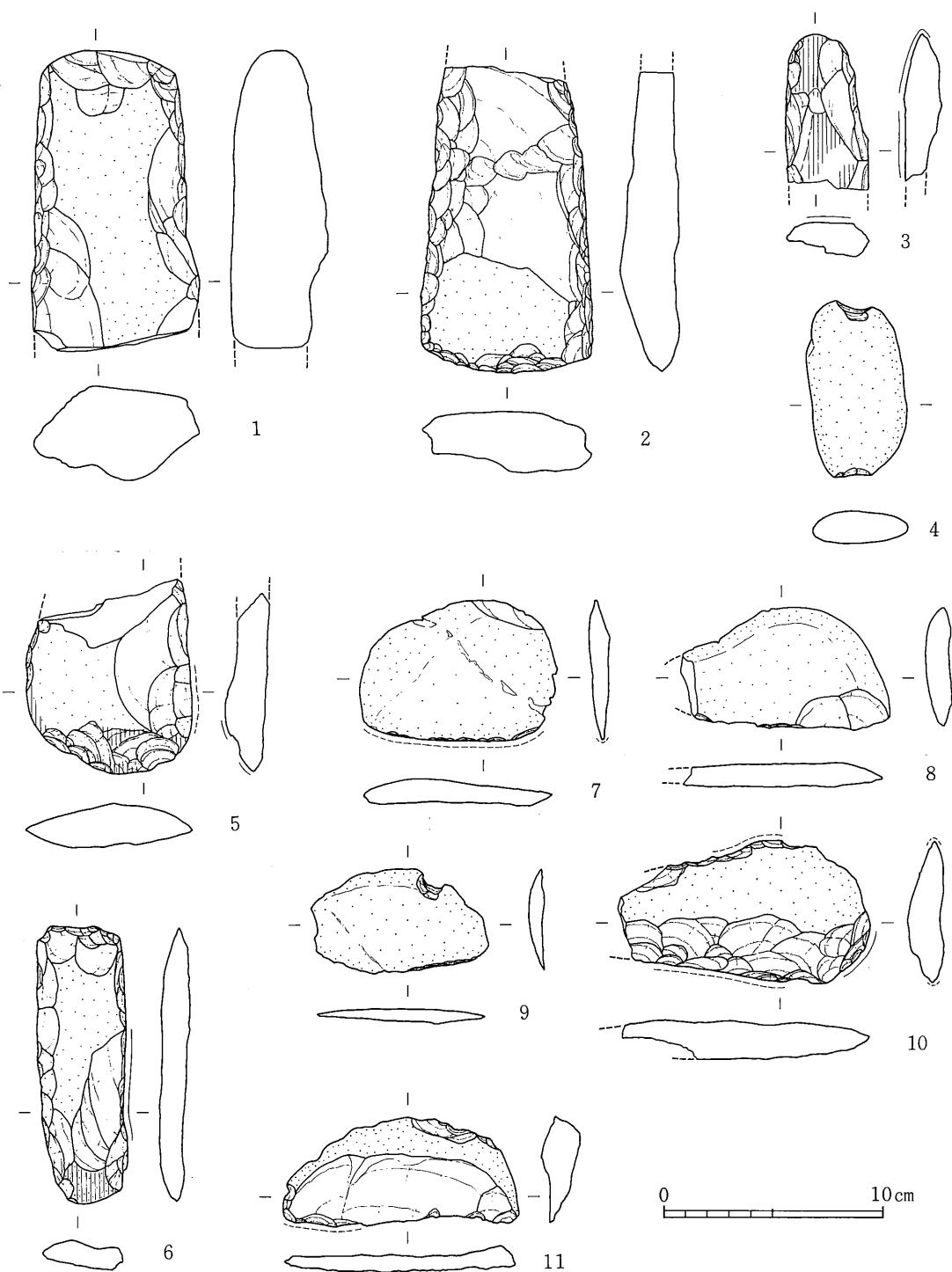
第14図 6号住居址出土土器



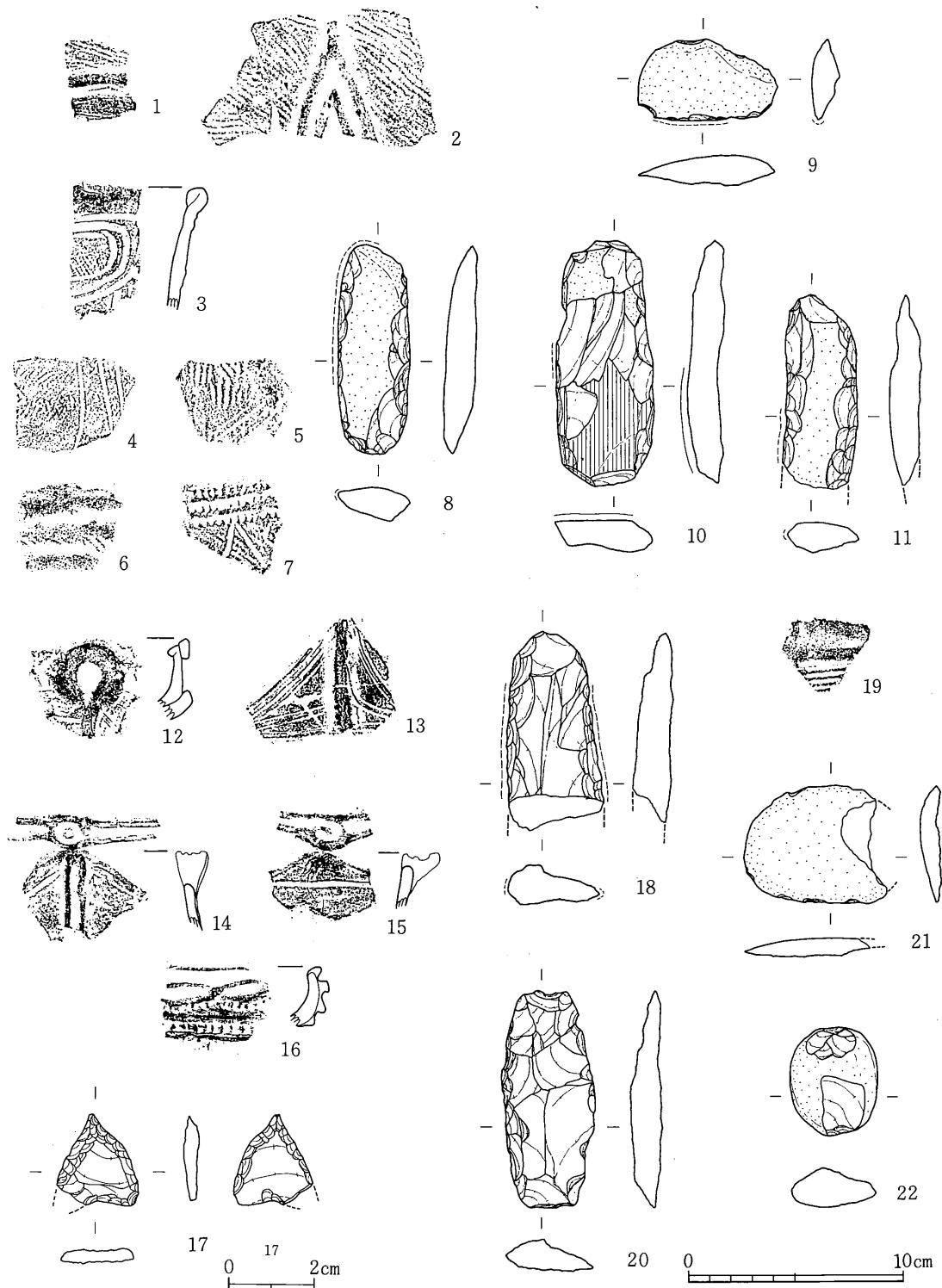
第15図 6号住居址出土土器



第16図 6・7号住居址出土遺物 (1~17 6住、18~19 7住)

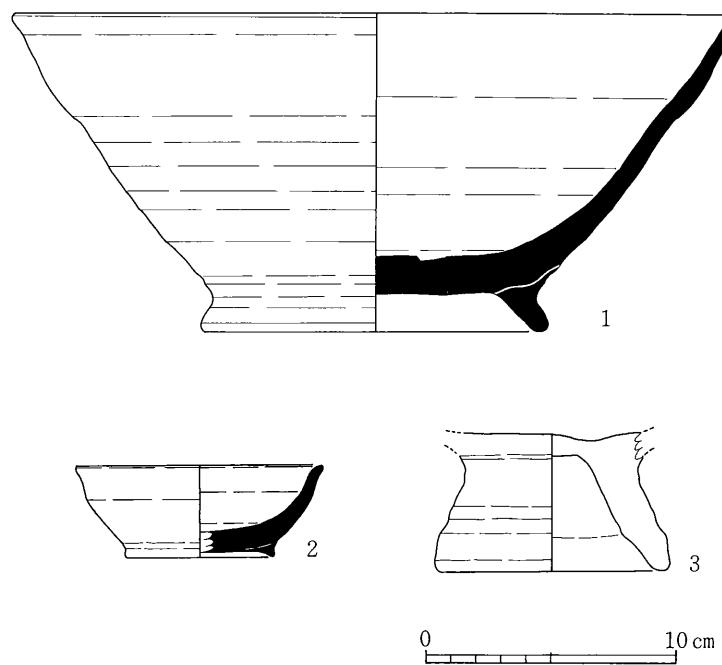


第17図 1・2・4号住居址出土土器・石器（1～4 1住、5～10 2住、11 4住）

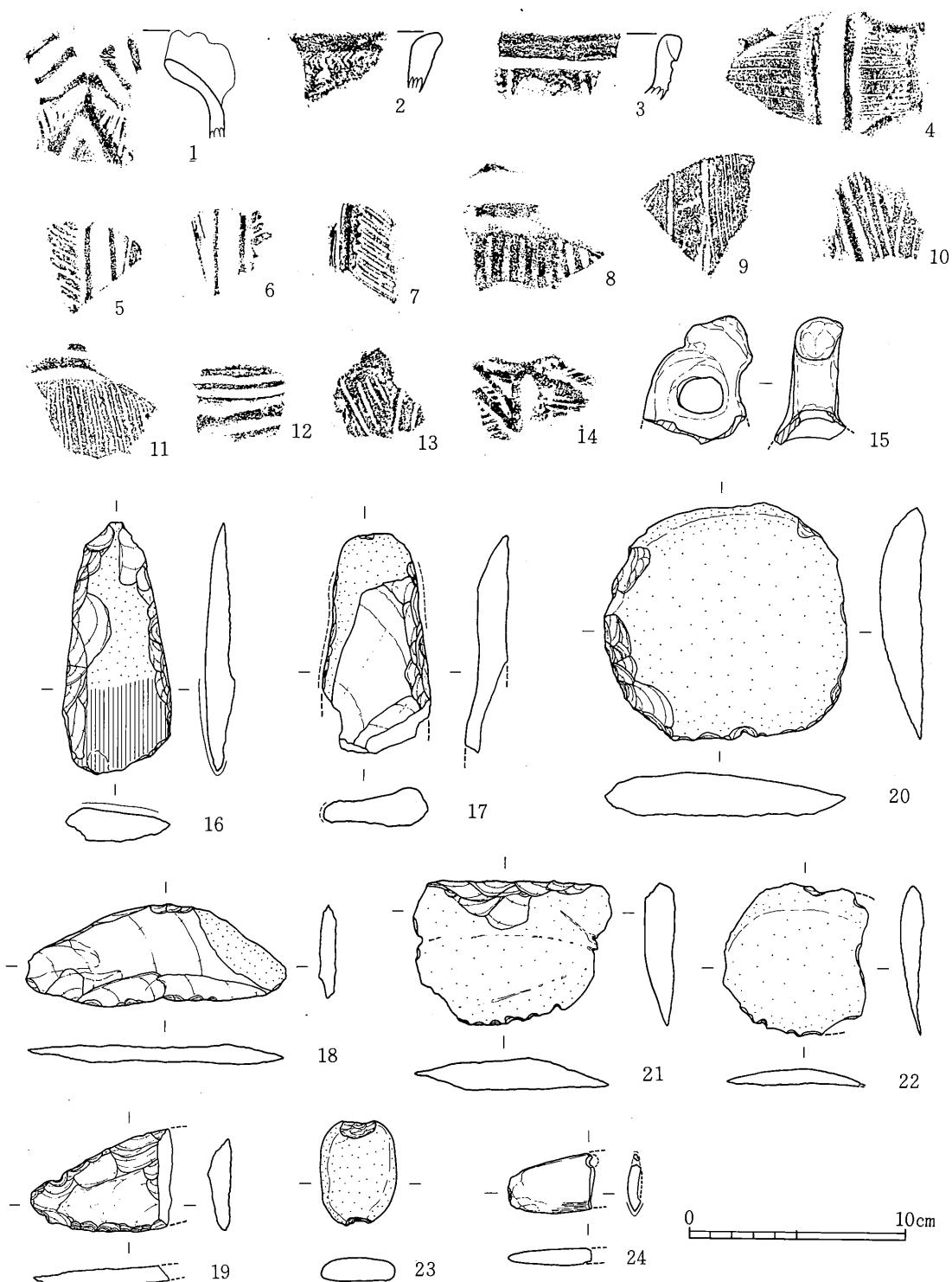


第18図 5・6・7号住居址 土坑4・5・7・13・15 穫穴2出土土器・石器

(1~2 5住、3~8 6住、9~11 7住、12~13 4、14~16 5、17 7、18 13、19 15、20~22 穫2)



第19図 溝址4 遺構外出土土器（1 溝址4、2～3 遺構外）



第20図 遺構外出土土器・石器

写 真 図 版

図版 1



8号住居址



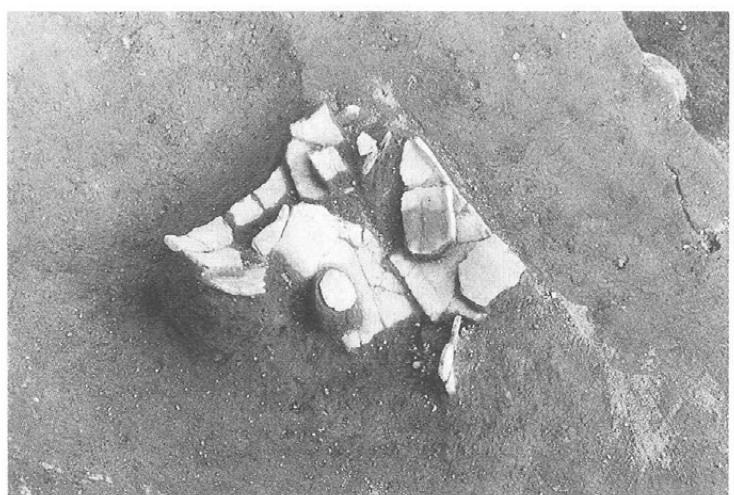
同 炉 址



9号住居址



同炉址



深鉢出土状態

図版 3



1号住居址



同カマド

1号住居址
カマド袖石



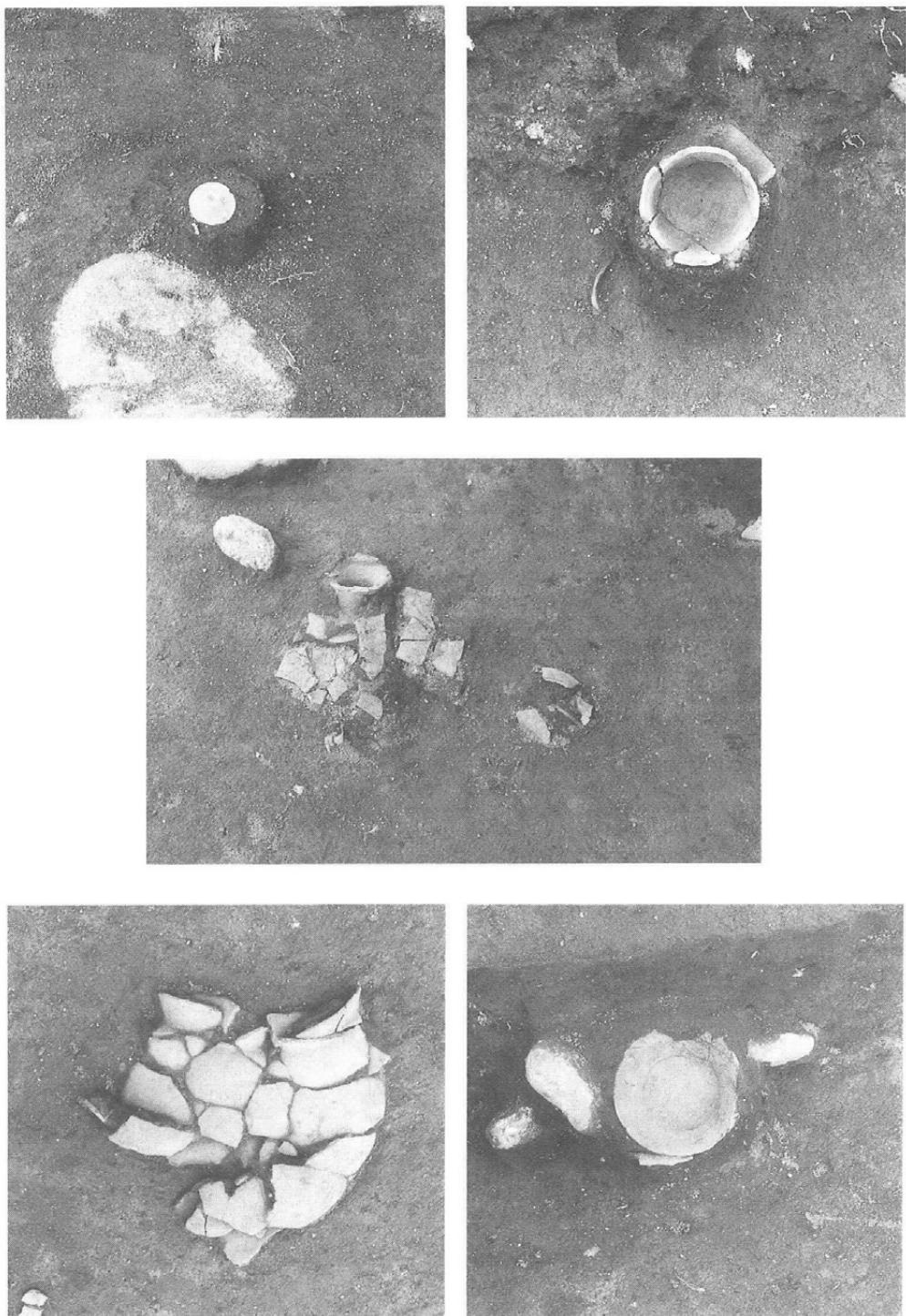
同カマド内出土
土師器小型壺



同遺物拡大（上より）



図版5



1号住居址遺物出土状態



2号住居址

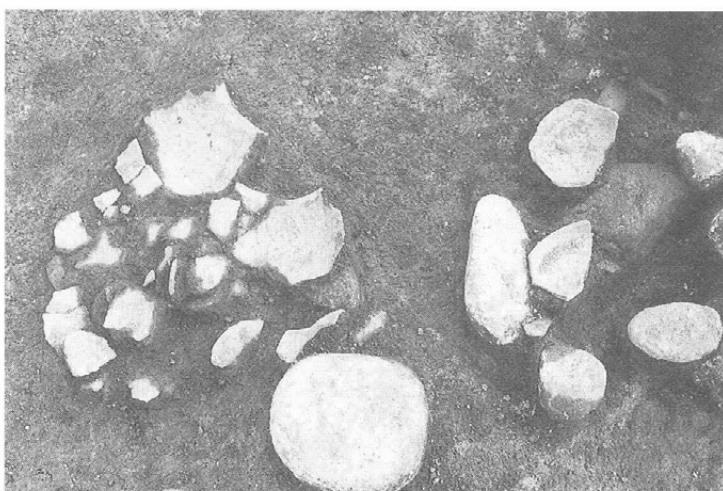


同内検出礫（集石 1・2 を含む）

図版 7



2号住居址内出土
須恵器甕



同遺物出土状態



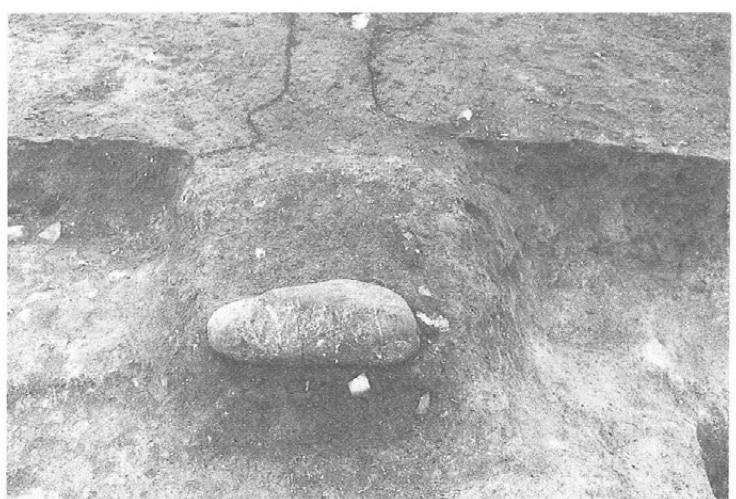
同 上



3号住居址

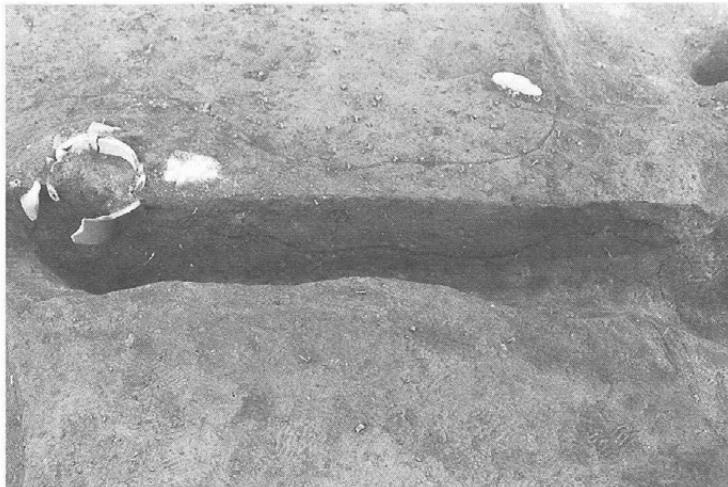


4号住居址



同カマド

図版 9



4号住居址
カマド煙道断面



同カマド断面



同上



4号住居址
遺物出土状態



同上



同上

図版11



5号住居址



同南側隅



5号住居址カマド

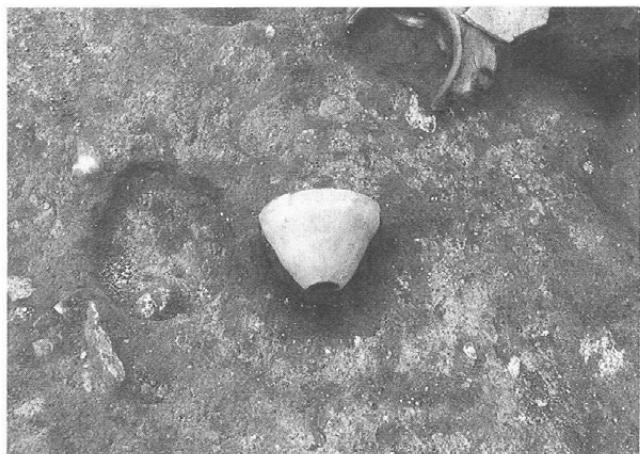
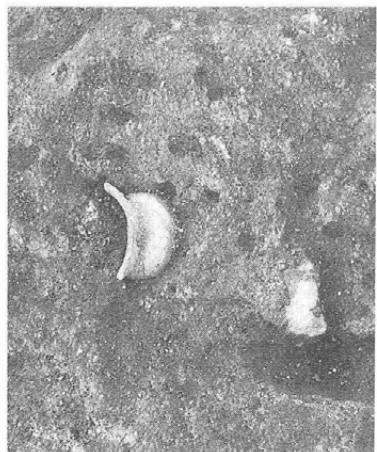
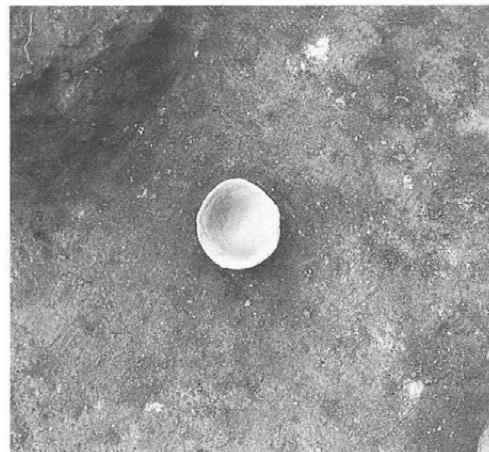


同カマド袖石



同カマド中央断面

図版13



5号住居址遺物出土状態

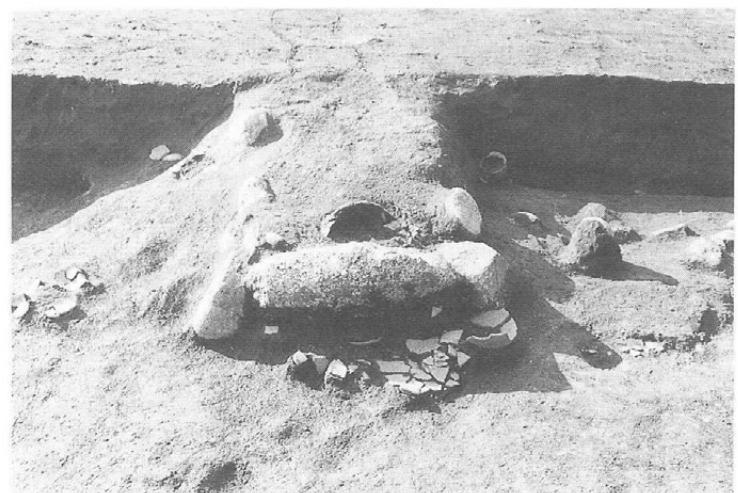
図版14



6号住居址



同東南壁



同カマド

図版15



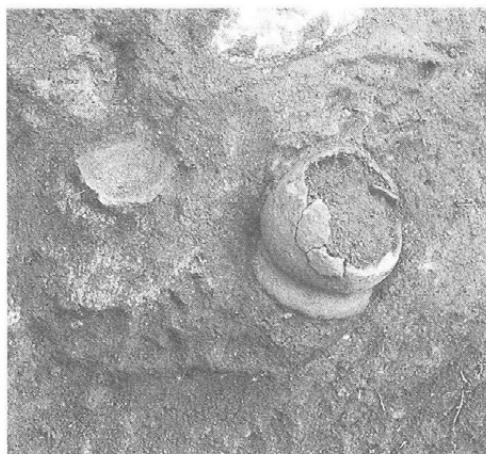
6号住居址カマド
北側袖石



同カマド中央断面



同カマド南側袖石



6号住居址遺物出土状態



7号住居址

図版17



溝址1・2及び
周辺土坑(南より)



溝址3及び
周辺土坑(北より)



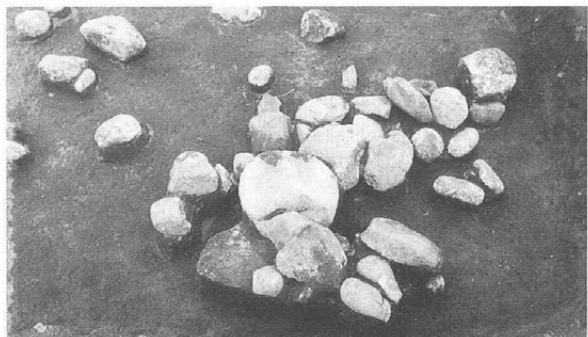
7号住居址及び
周辺土坑(東より)



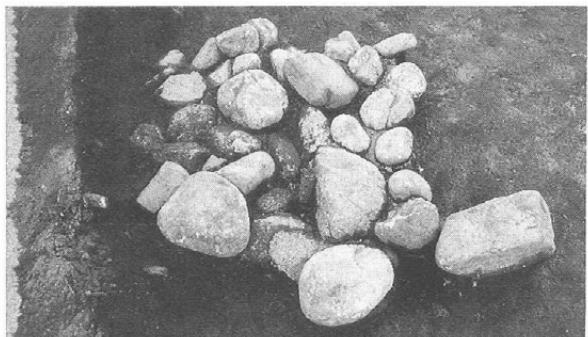
堅穴 1



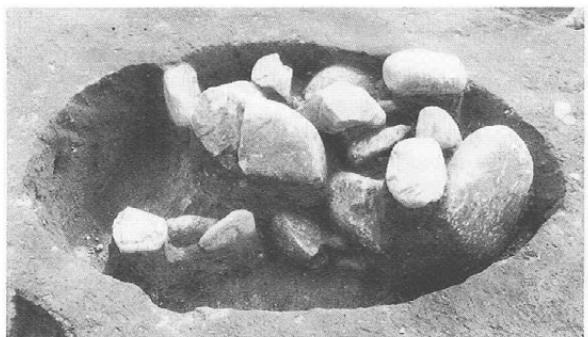
堅穴 2



集石 1

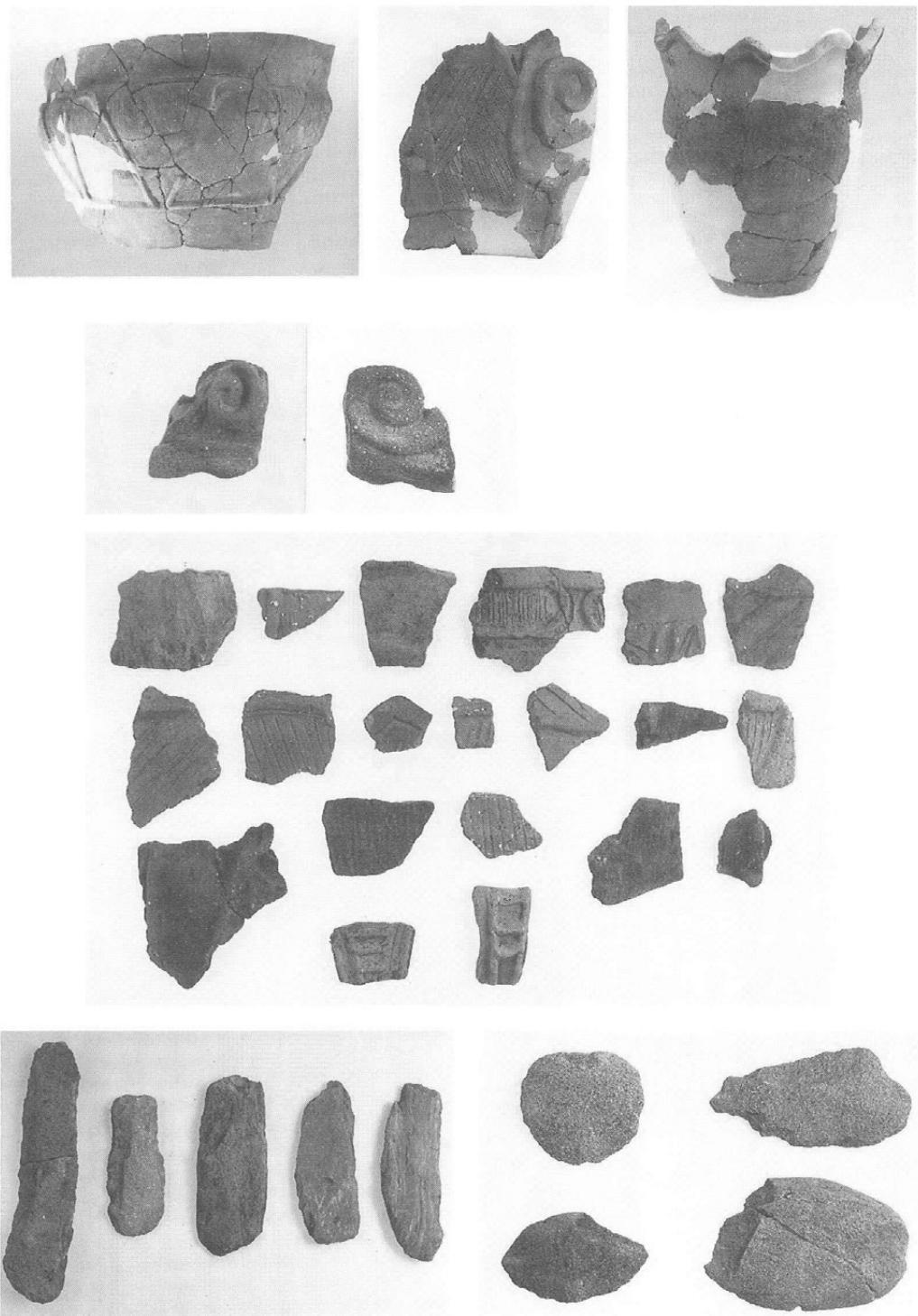


集石 2



集石 4

图版19

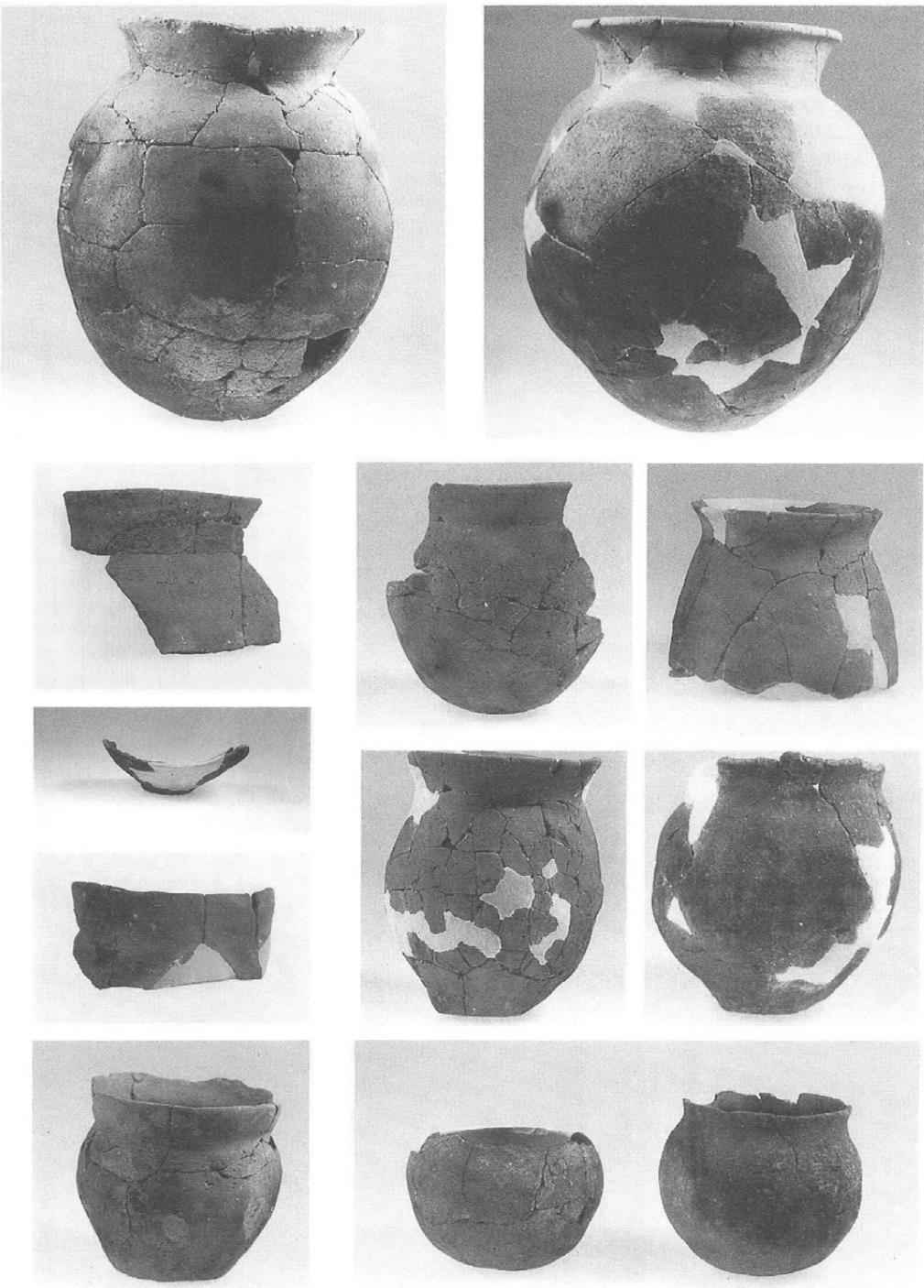


8号住居址出土遺物

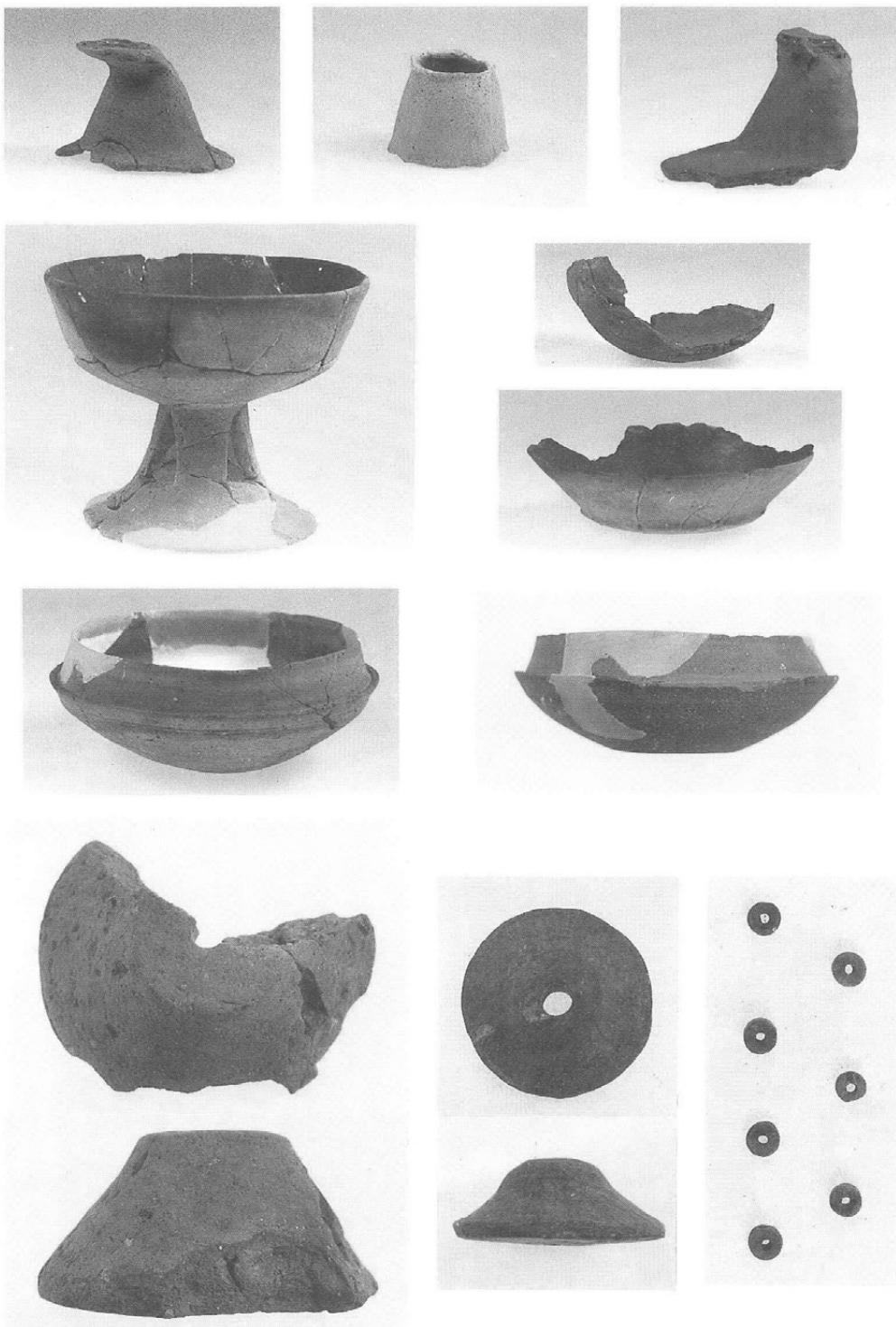


9号住居址出土遺物

図版21

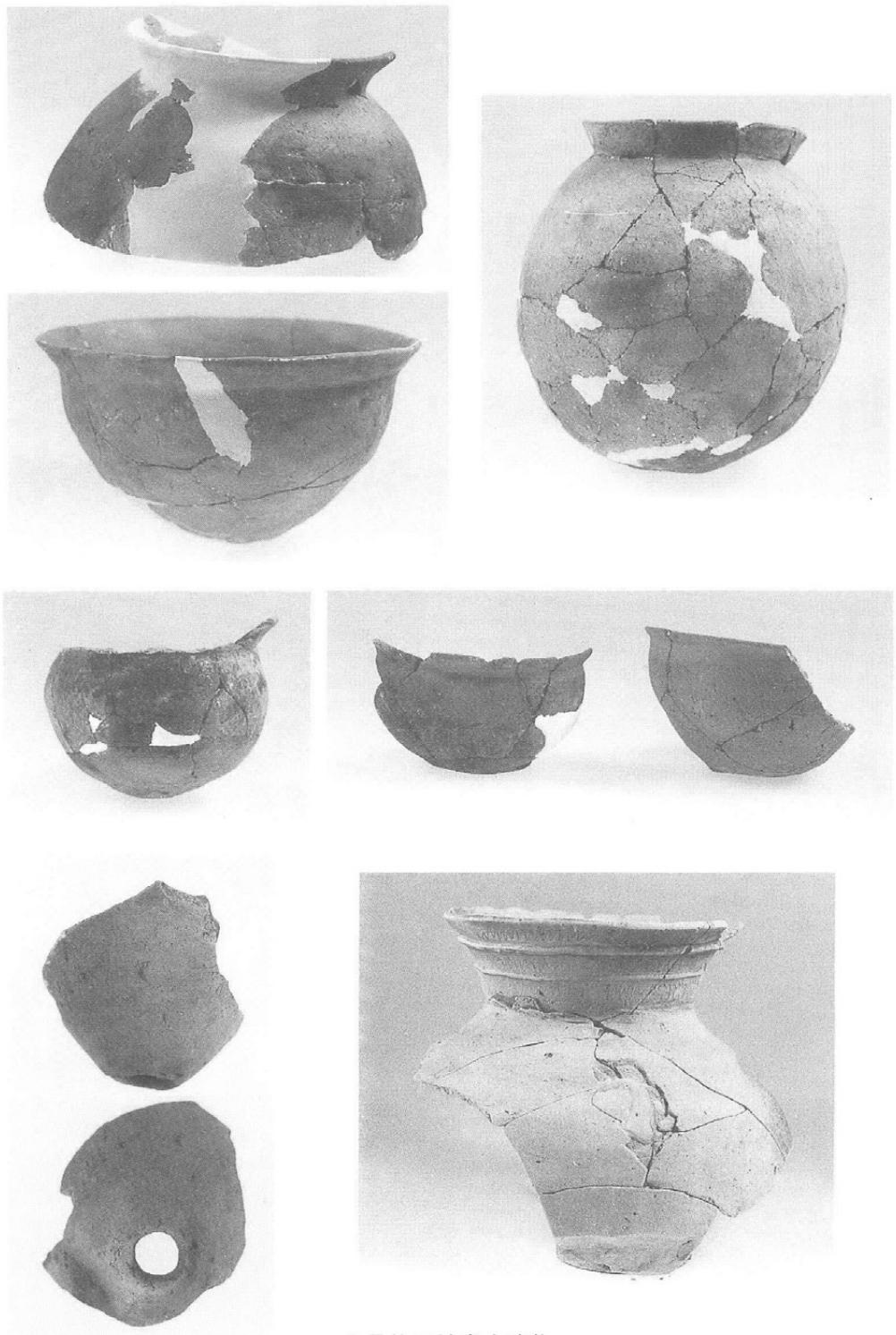


1号住居址出土遺物

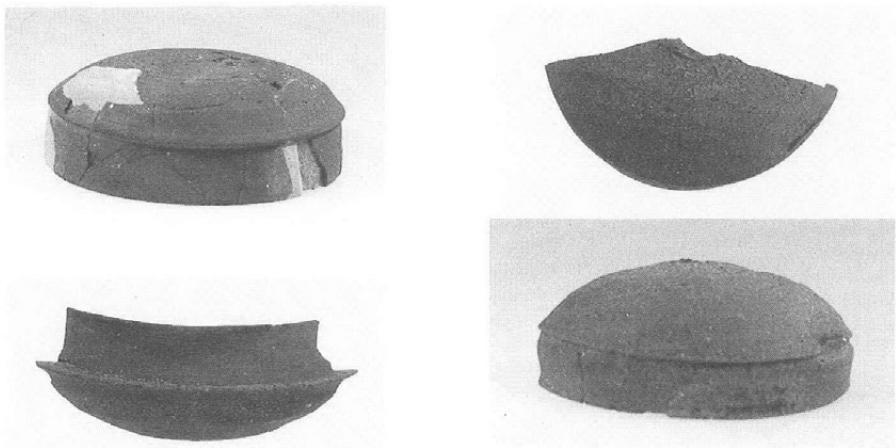


1号住居址出土遺物

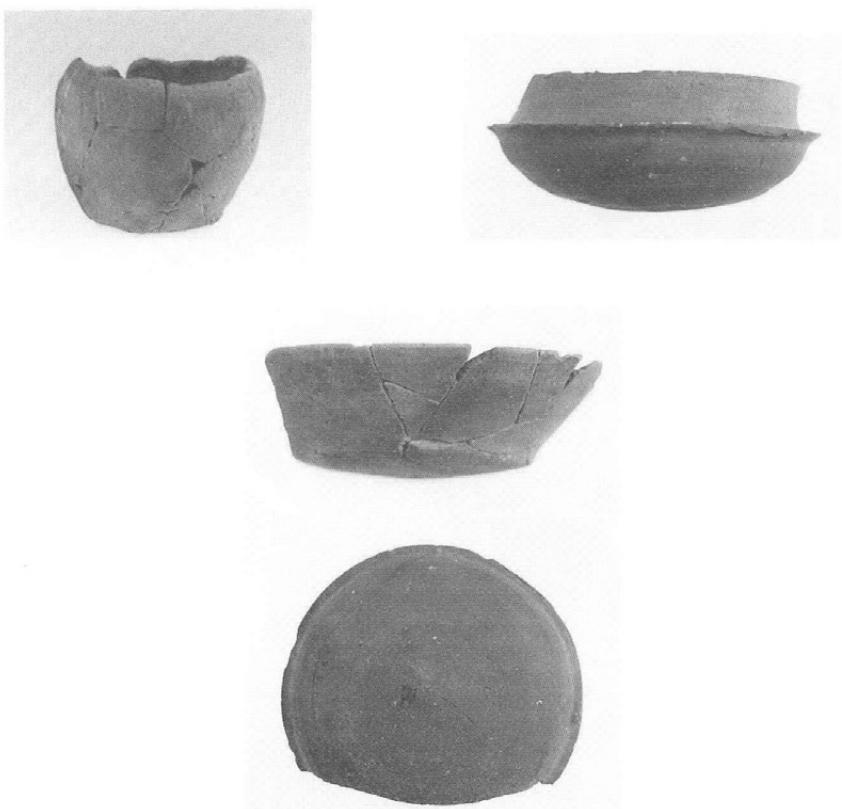
図版23



2号住居址出土遺物

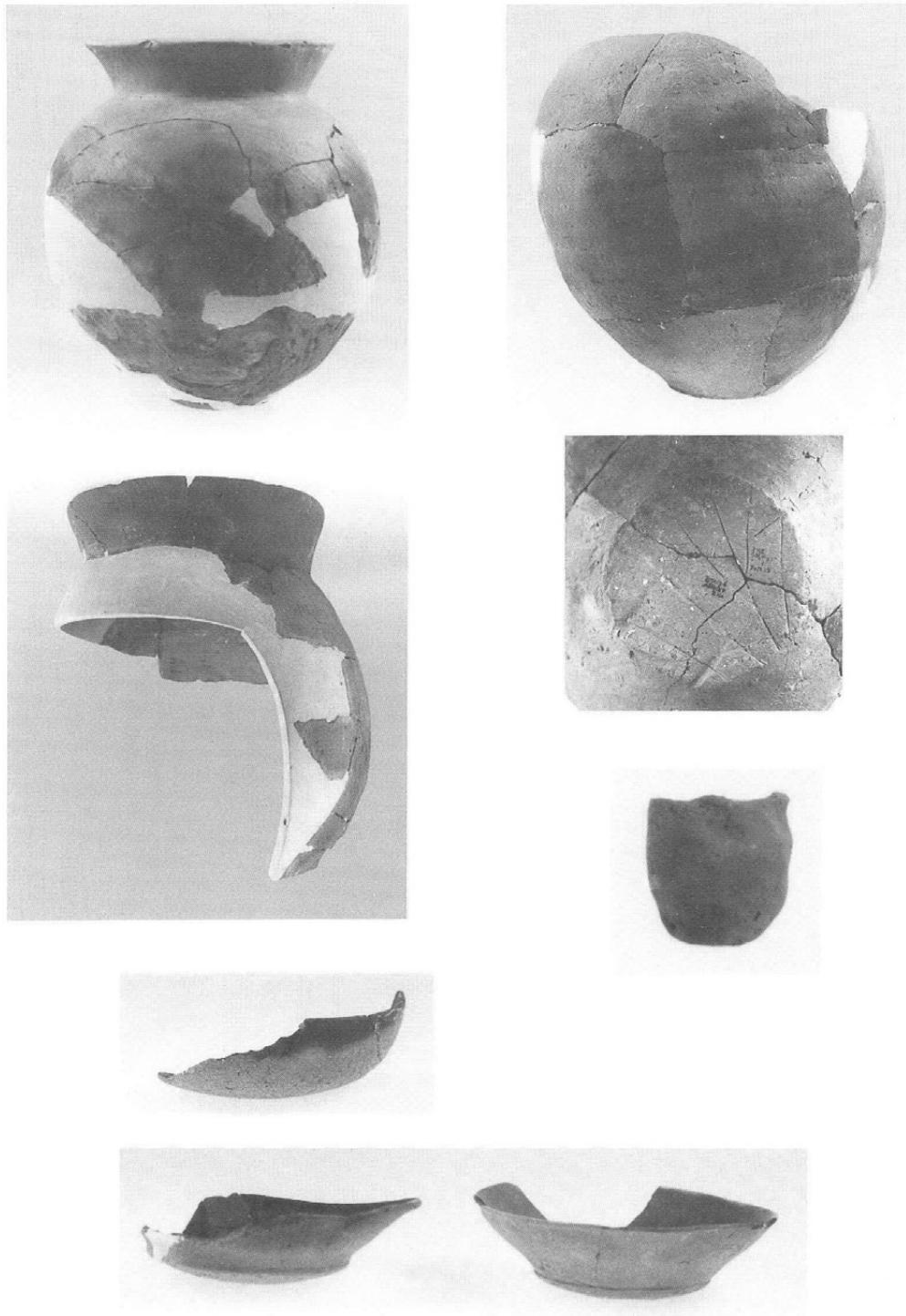


2号住居址出土遺物

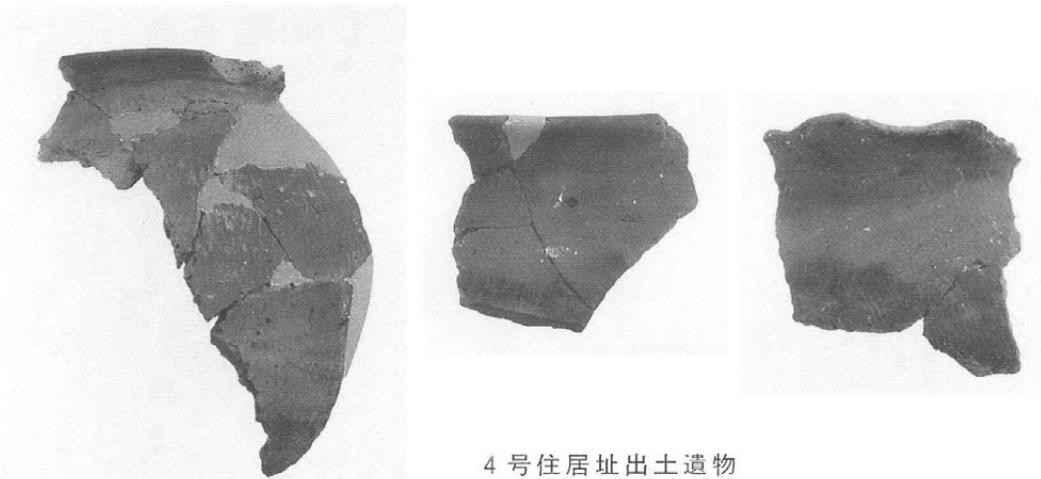


3号住居址出土遺物

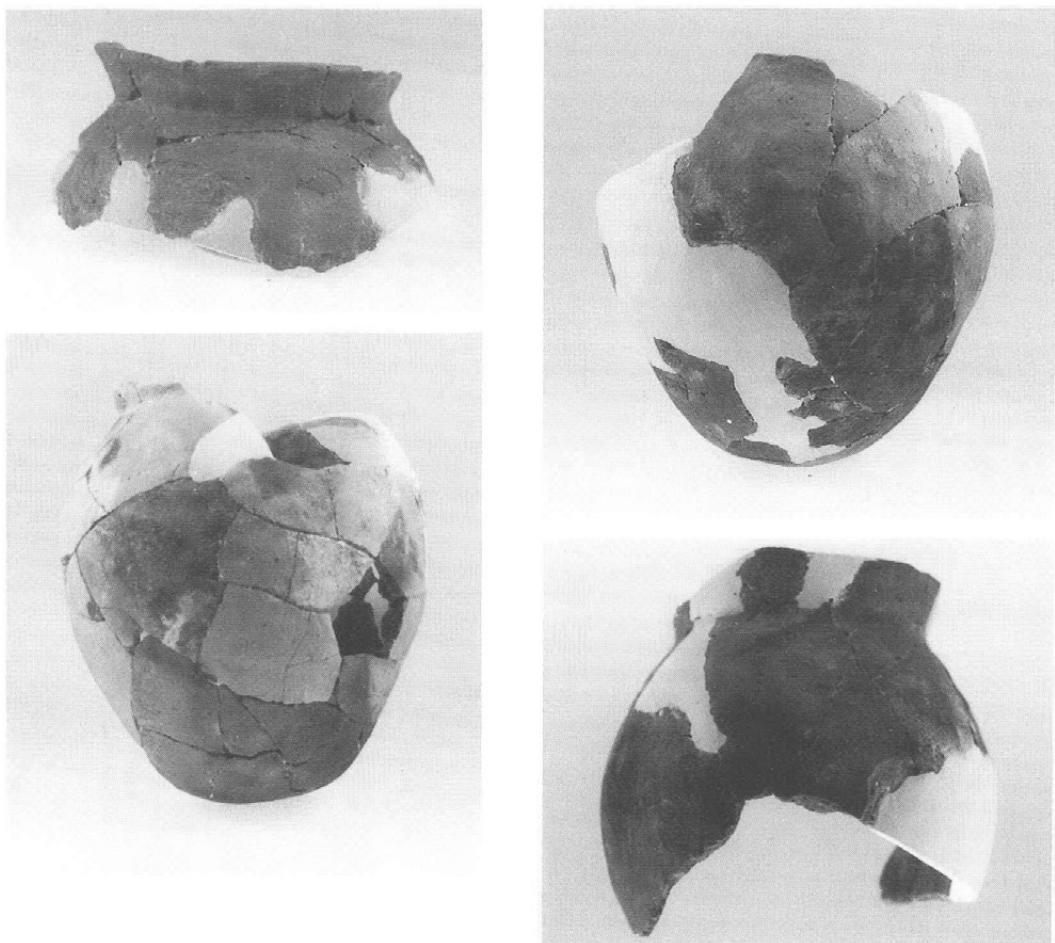
图版25



4号住居址出土遗物

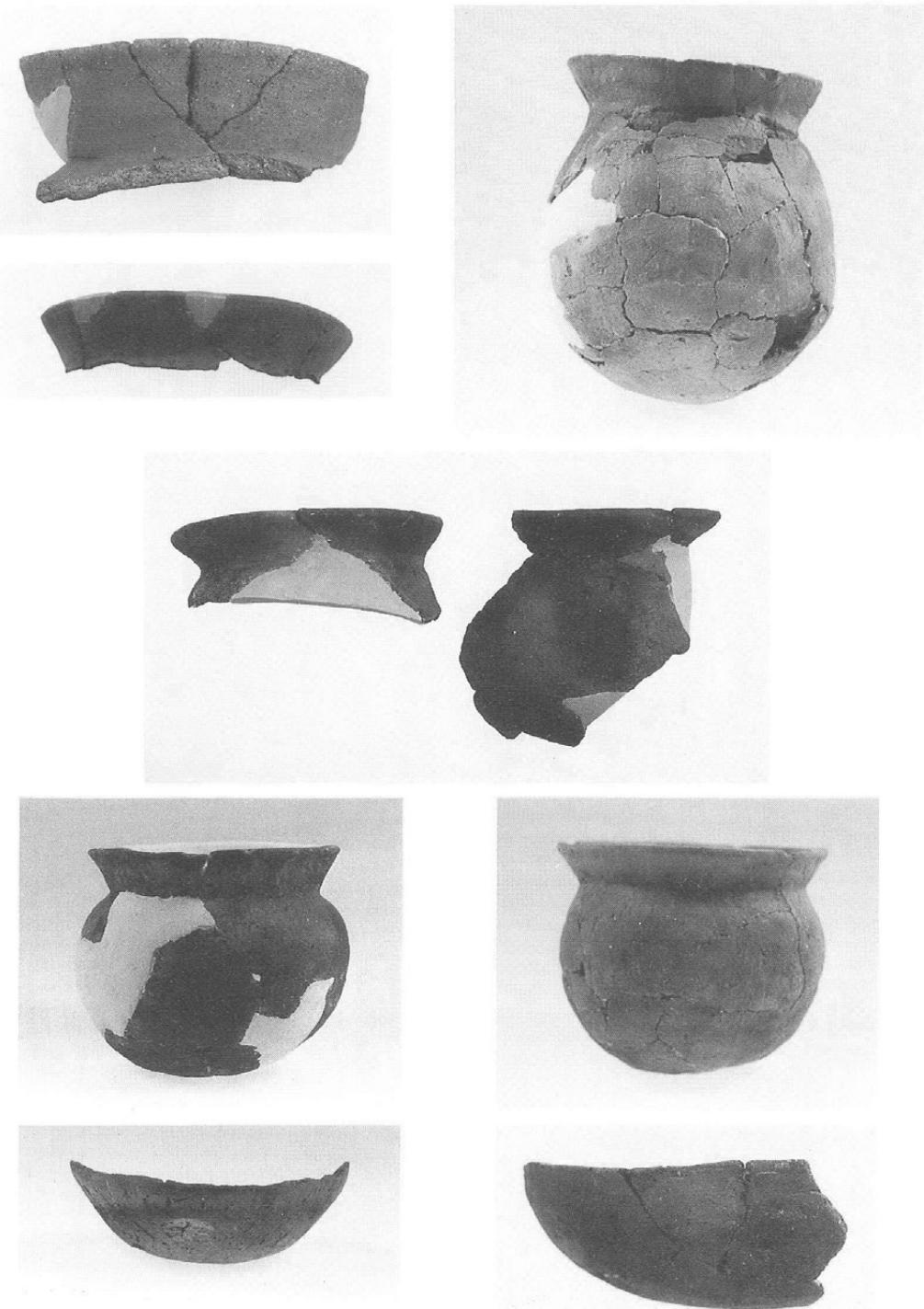


4号住居址出土遺物

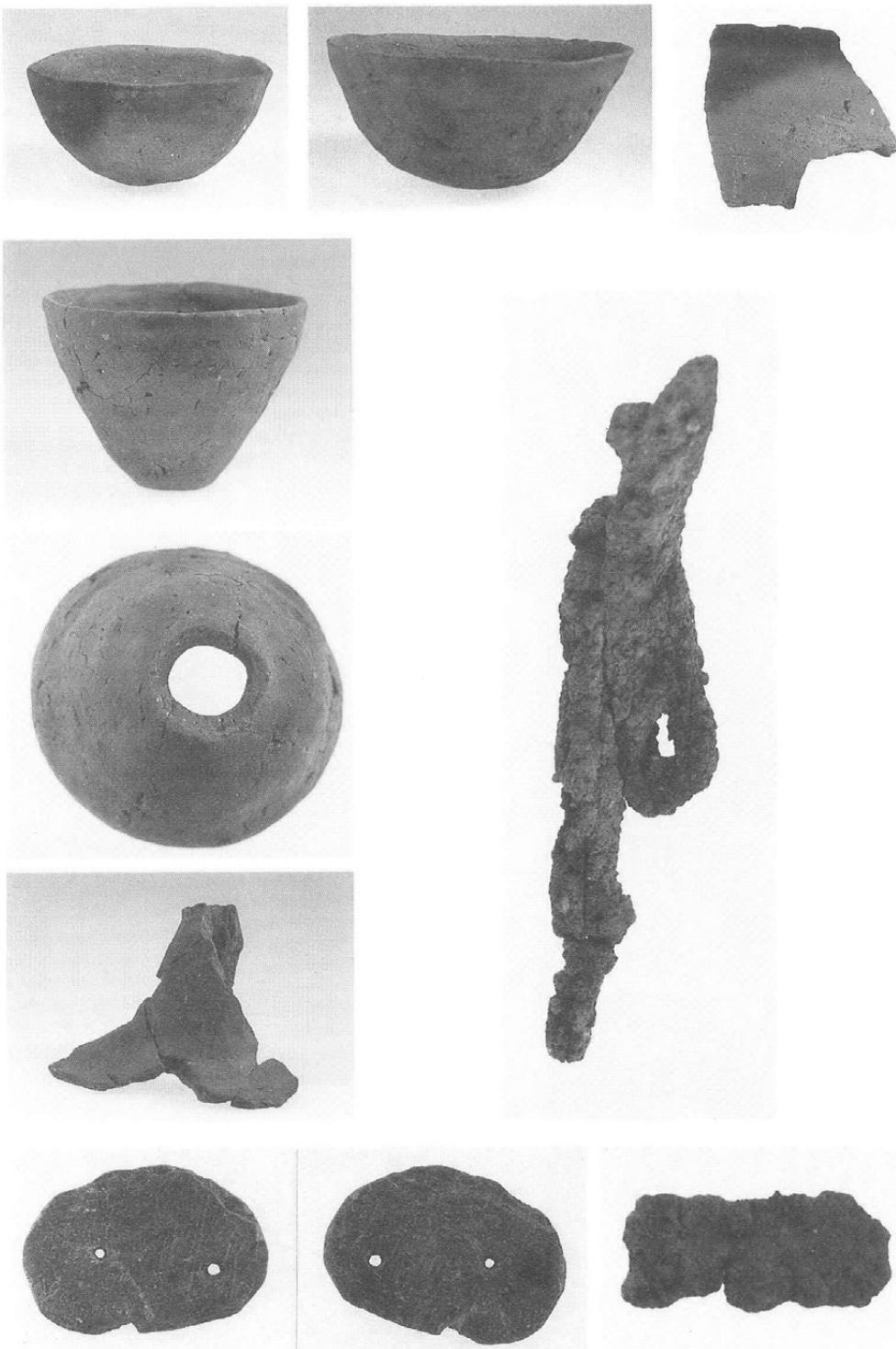


5号住居址出土遺物

図版27

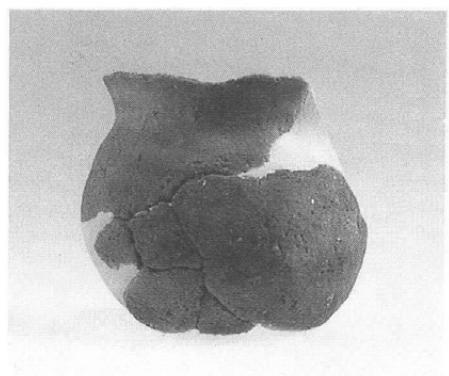
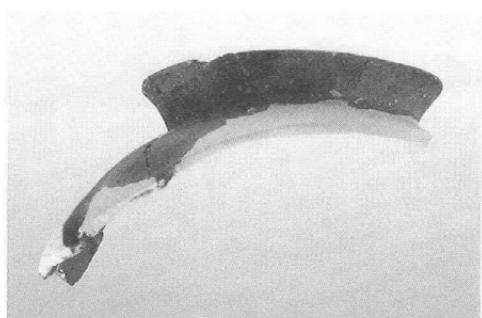
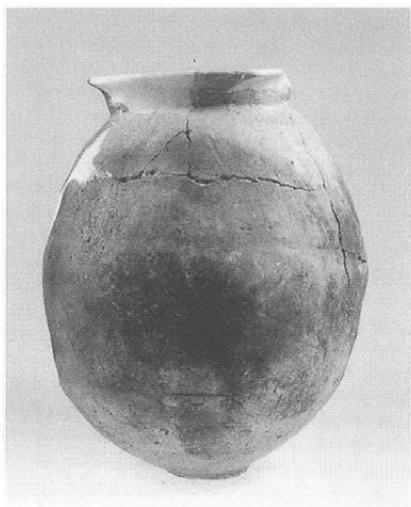


5号住居址出土遺物

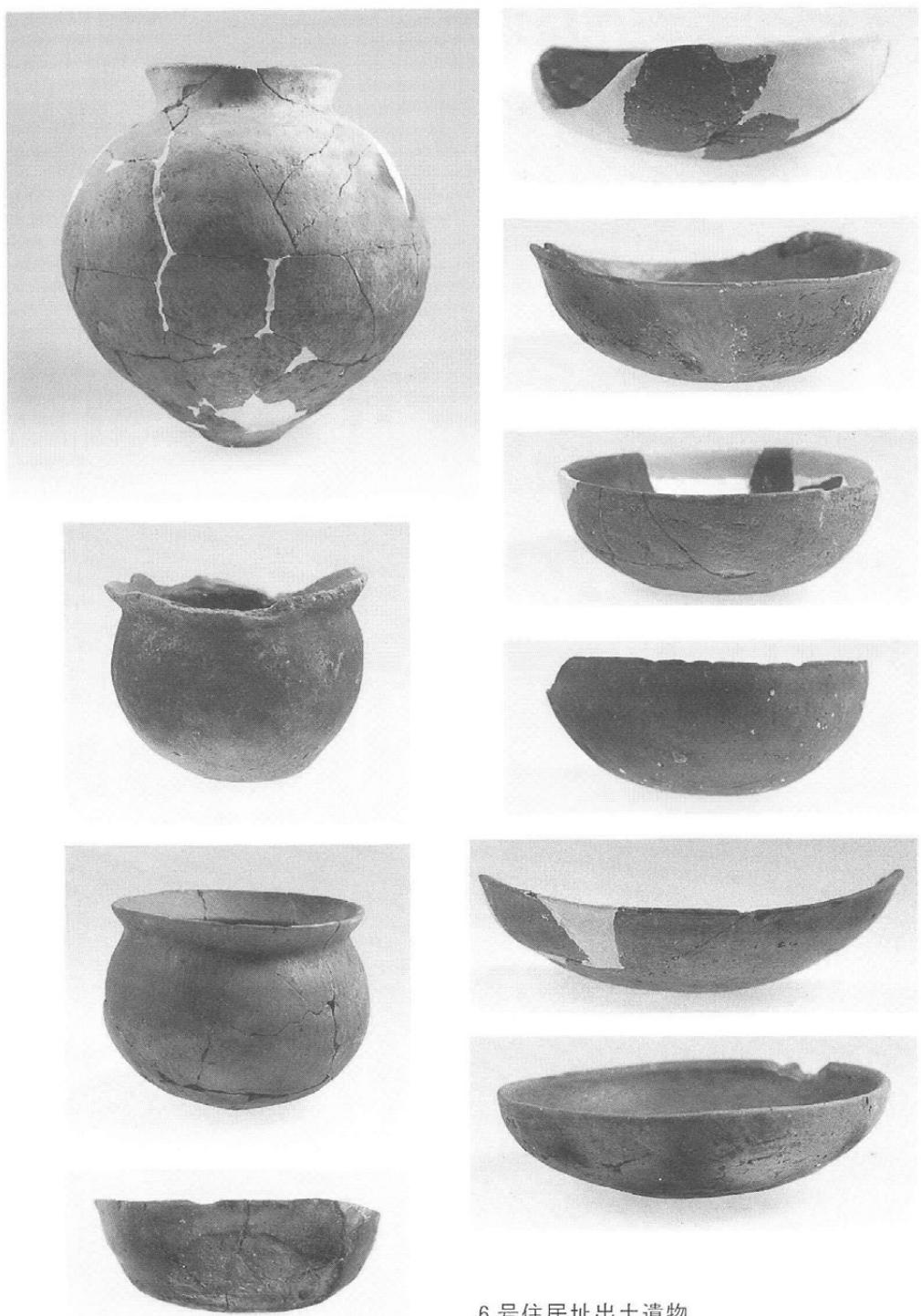


5号住居址出土遺物

図版29

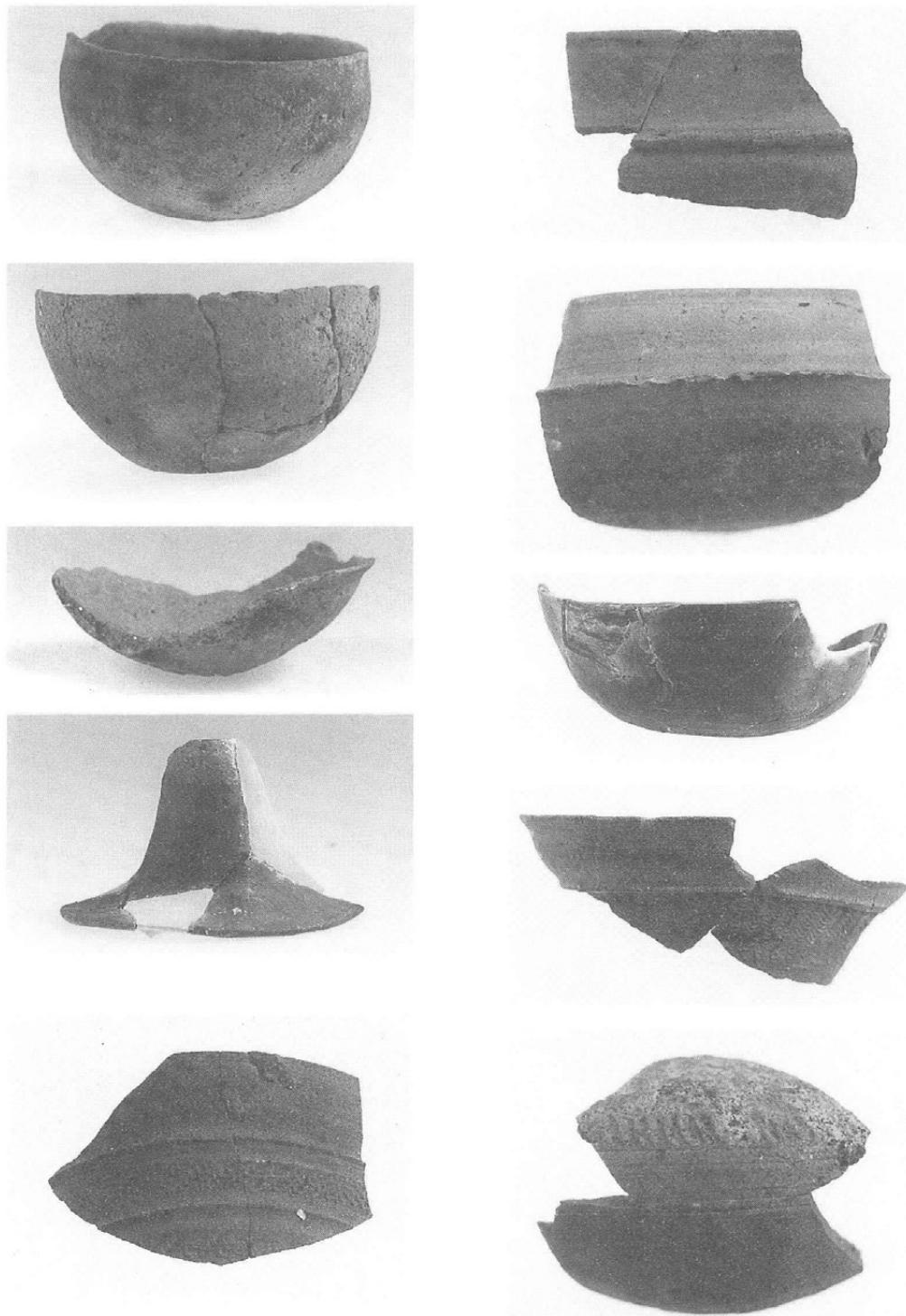


6号住居址出土遺物

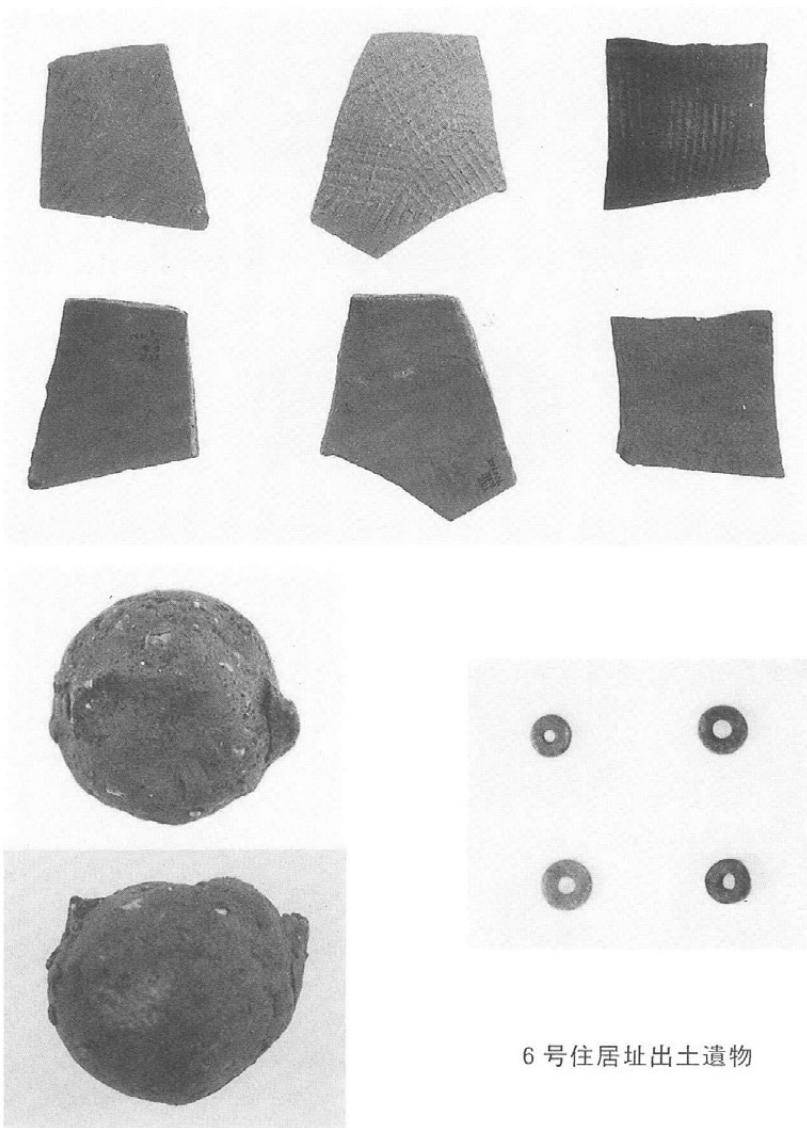


6号住居址出土遺物

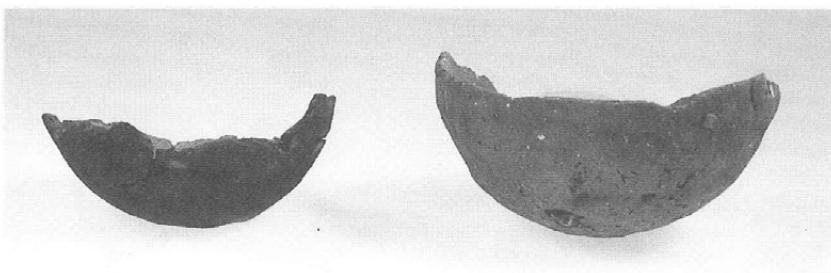
図版31



6号住居址出土遺物

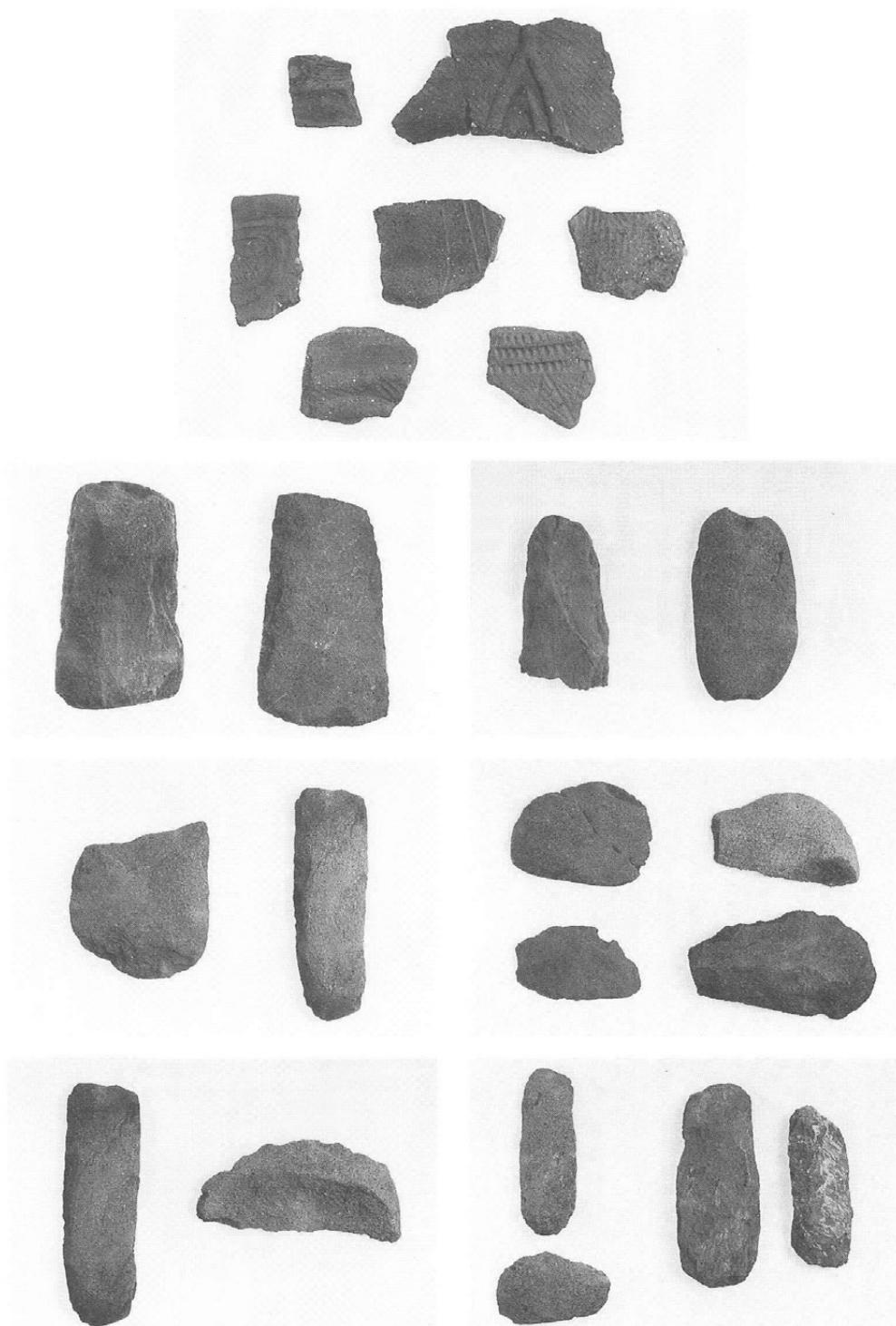


6号住居址出土遺物

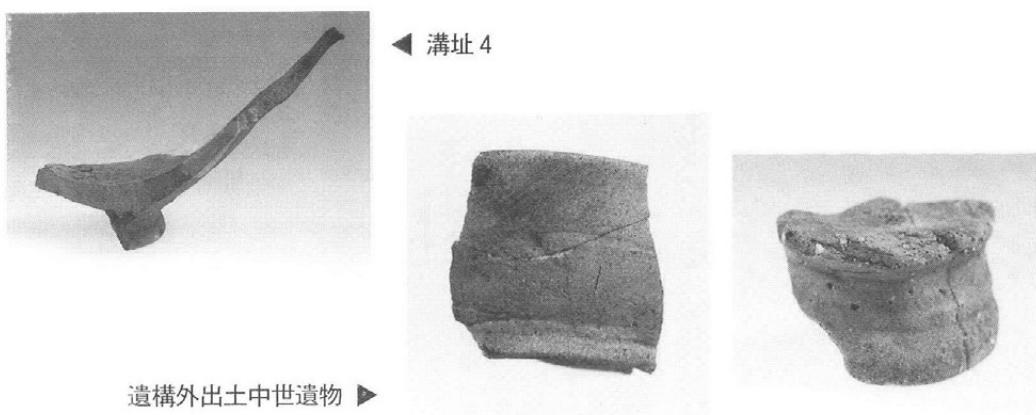
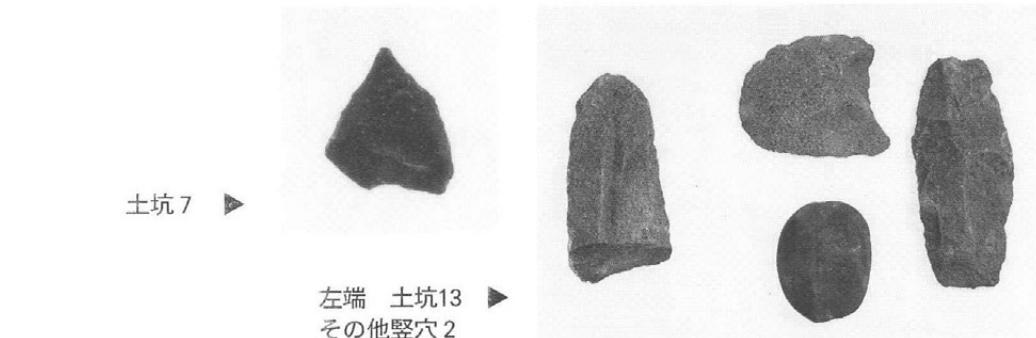
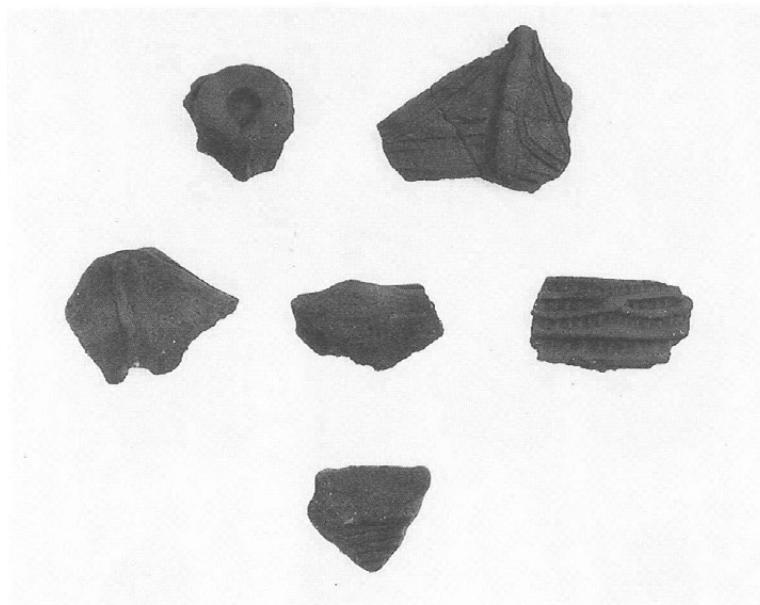


7号住居址出土遺物

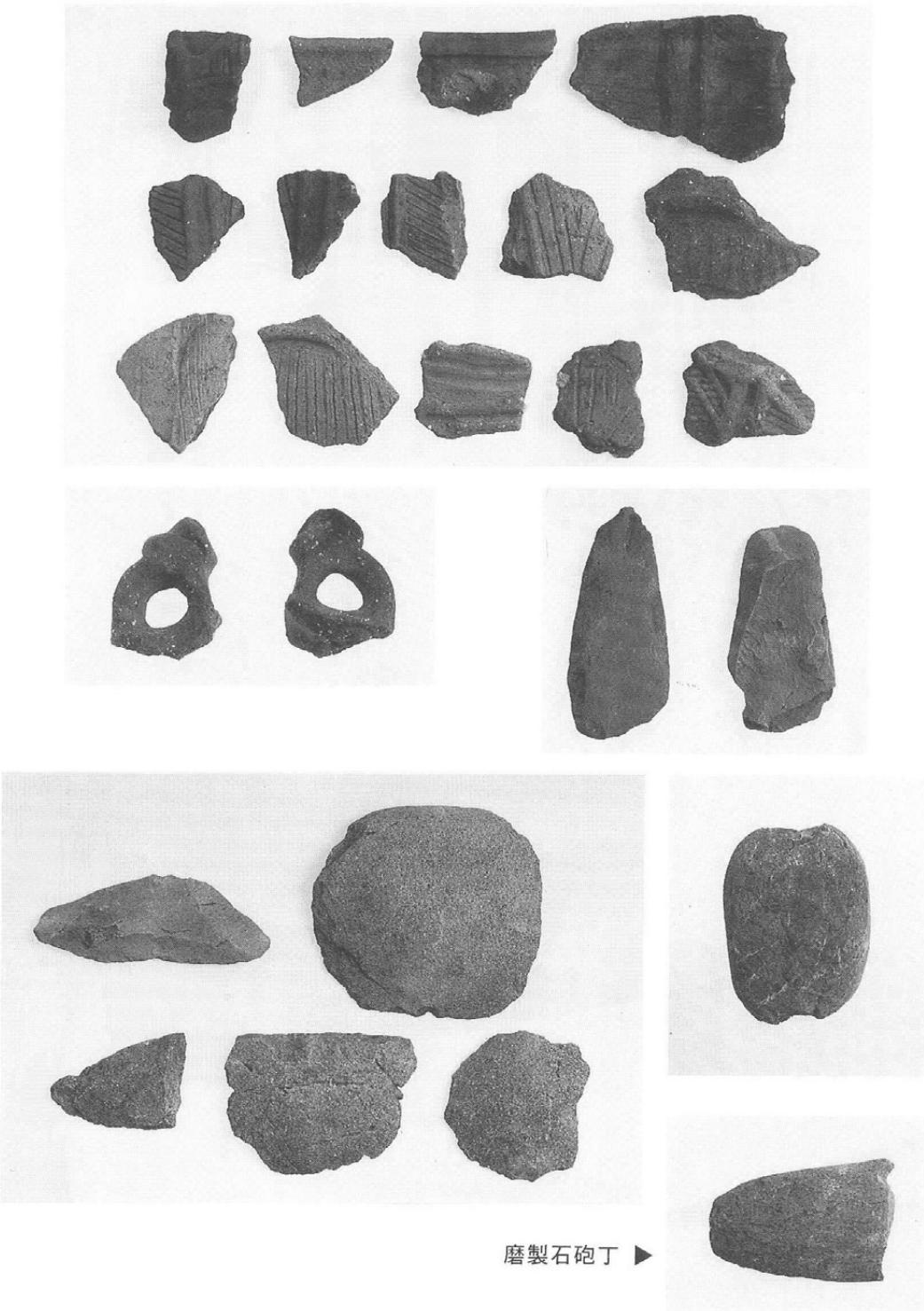
図版33



1・2・4・5・6・7号住居址出土遺物



図版35



磨製石砲丁 ▶

遺構外出土遺物



発掘調査風景



航空測量



現地説明会

飯田市立鼎中学校グランド拡張工事に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

柳添遺跡

1992年3月 印刷・発行

編集 長野県飯田市大久保町2534番地
・発行 長野県飯田市教育委員会
印刷所 ヨシザワ印刷株式会社

